
加 須 市

長 竹 遺 跡 II

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

2018

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	3
3. 発掘調査・報告書作成の組織	5
II 遺跡の立地と環境	7
1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	9
3. 環状盛土・環状貝塚を伴う 縄文後期～晩期の遺跡分布	15
III 遺跡の概要	21
IV 南盛土の遺構	37
1. 住居跡	37
2. 土壇墓・土壇	193
3. 遺物集中	216
4. 埋蔵	222
5. 掘立柱建物跡	224
6. 柱穴列	228
7. 焼土跡・粘土塊	233
8. グリッドピット	243

(第2分冊)

V 南盛土の遺物	267
1. 土器	267
(1) 住居跡出土土器	267
(2) 土壇出土土器	419
(3) 遺物集中出土土器	438
(4) 埋蔵出土土器	446
(5) 掘立柱建物跡出土土器	448
(6) 柱穴列出土土器	450
(7) 焼土跡出土土器	452
(8) 粘土塊出土土器	462
(9) グリッドピット出土土器	463
2. 土製品	480
(1) 住居跡出土土製品	480
(2) 土壇出土土製品	522
(3) 遺物集中出土土製品	524
(4) 掘立柱建物跡出土土製品	525
(5) 柱穴列出土土製品	525
(6) 焼土跡出土土製品	526
(7) グリッドピット出土土製品	527
3. 石器	531
4. 骨製品	580
VI 調査のまとめ	584

(第3分冊)

写真図版

付図

插图目录

(第2分册)

第191图 住居跡出土土器 (1)	307	第225图 住居跡出土土器 (35)	341
第192图 住居跡出土土器 (2)	308	第226图 住居跡出土土器 (36)	342
第193图 住居跡出土土器 (3)	309	第227图 住居跡出土土器 (37)	343
第194图 住居跡出土土器 (4)	310	第228图 住居跡出土土器 (38)	344
第195图 住居跡出土土器 (5)	311	第229图 住居跡出土土器 (39)	345
第196图 住居跡出土土器 (6)	312	第230图 住居跡出土土器 (40)	346
第197图 住居跡出土土器 (7)	313	第231图 住居跡出土土器 (41)	347
第198图 住居跡出土土器 (8)	314	第232图 住居跡出土土器 (42)	348
第199图 住居跡出土土器 (9)	315	第233图 住居跡出土土器 (43)	349
第200图 住居跡出土土器 (10)	316	第234图 住居跡出土土器 (44)	350
第201图 住居跡出土土器 (11)	317	第235图 住居跡出土土器 (45)	351
第202图 住居跡出土土器 (12)	318	第236图 住居跡出土土器 (46)	352
第203图 住居跡出土土器 (13)	319	第237图 住居跡出土土器 (47)	353
第204图 住居跡出土土器 (14)	320	第238图 住居跡出土土器 (48)	354
第205图 住居跡出土土器 (15)	321	第239图 住居跡出土土器 (49)	355
第206图 住居跡出土土器 (16)	322	第240图 住居跡出土土器 (50)	356
第207图 住居跡出土土器 (17)	323	第241图 住居跡出土土器 (51)	357
第208图 住居跡出土土器 (18)	324	第242图 住居跡出土土器 (52)	358
第209图 住居跡出土土器 (19)	325	第243图 住居跡出土土器 (53)	359
第210图 住居跡出土土器 (20)	326	第244图 住居跡出土土器 (54)	360
第211图 住居跡出土土器 (21)	327	第245图 住居跡出土土器 (55)	361
第212图 住居跡出土土器 (22)	328	第246图 住居跡出土土器 (56)	362
第213图 住居跡出土土器 (23)	329	第247图 住居跡出土土器 (57)	363
第214图 住居跡出土土器 (24)	330	第248图 住居跡出土土器 (58)	364
第215图 住居跡出土土器 (25)	331	第249图 住居跡出土土器 (59)	365
第216图 住居跡出土土器 (26)	332	第250图 住居跡出土土器 (60)	366
第217图 住居跡出土土器 (27)	333	第251图 住居跡出土土器 (61)	367
第218图 住居跡出土土器 (28)	334	第252图 住居跡出土土器 (62)	368
第219图 住居跡出土土器 (29)	335	第253图 住居跡出土土器 (63)	369
第220图 住居跡出土土器 (30)	336	第254图 住居跡出土土器 (64)	370
第221图 住居跡出土土器 (31)	337	第255图 住居跡出土土器 (65)	371
第222图 住居跡出土土器 (32)	338	第256图 住居跡出土土器 (66)	372
第223图 住居跡出土土器 (33)	339	第257图 住居跡出土土器 (67)	373
第224图 住居跡出土土器 (34)	340	第258图 住居跡出土土器 (68)	374

第259图	住居跡出土土器 (69)	375	第296图	住居跡出土土器 (106)	412
第260图	住居跡出土土器 (70)	376	第297图	住居跡出土土器 (107)	413
第261图	住居跡出土土器 (71)	377	第298图	住居跡出土土器 (108)	414
第262图	住居跡出土土器 (72)	378	第299图	住居跡出土土器 (109)	415
第263图	住居跡出土土器 (73)	379	第300图	住居跡出土土器 (110)	416
第264图	住居跡出土土器 (74)	380	第301图	住居跡出土土器 (111)	417
第265图	住居跡出土土器 (75)	381	第302图	住居跡出土土器 (112)	418
第266图	住居跡出土土器 (76)	382	第303图	土壙出土土器 (1)	426
第267图	住居跡出土土器 (77)	383	第304图	土壙出土土器 (2)	427
第268图	住居跡出土土器 (78)	384	第305图	土壙出土土器 (3)	428
第269图	住居跡出土土器 (79)	385	第306图	土壙出土土器 (4)	429
第270图	住居跡出土土器 (80)	386	第307图	土壙出土土器 (5)	430
第271图	住居跡出土土器 (81)	387	第308图	土壙出土土器 (6)	431
第272图	住居跡出土土器 (82)	388	第309图	土壙出土土器 (7)	432
第273图	住居跡出土土器 (83)	389	第310图	土壙出土土器 (8)	433
第274图	住居跡出土土器 (84)	390	第311图	土壙出土土器 (9)	434
第275图	住居跡出土土器 (85)	391	第312图	土壙出土土器 (10)	435
第276图	住居跡出土土器 (86)	392	第313图	土壙出土土器 (11)	436
第277图	住居跡出土土器 (87)	393	第314图	土壙出土土器 (12)	437
第278图	住居跡出土土器 (88)	394	第315图	遺物集中出土土器 (1)	440
第279图	住居跡出土土器 (89)	395	第316图	遺物集中出土土器 (2)	441
第280图	住居跡出土土器 (90)	396	第317图	遺物集中出土土器 (3)	442
第281图	住居跡出土土器 (91)	397	第318图	遺物集中出土土器 (4)	443
第282图	住居跡出土土器 (92)	398	第319图	遺物集中出土土器 (5)	444
第283图	住居跡出土土器 (93)	399	第320图	遺物集中出土土器 (6)	445
第284图	住居跡出土土器 (94)	400	第321图	埋堊出土土器	447
第285图	住居跡出土土器 (95)	401	第322图	掘立柱建物跡出土土器 (1)	449
第286图	住居跡出土土器 (96)	402	第323图	掘立柱建物跡出土土器 (2)	449
第287图	住居跡出土土器 (97)	403	第324图	柱穴列出土土器	451
第288图	住居跡出土土器 (98)	404	第325图	焼土跡出土土器 (1)	456
第289图	住居跡出土土器 (99)	405	第326图	焼土跡出土土器 (2)	457
第290图	住居跡出土土器 (100)	406	第327图	焼土跡出土土器 (3)	458
第291图	住居跡出土土器 (101)	407	第328图	焼土跡出土土器 (4)	459
第292图	住居跡出土土器 (102)	408	第329图	焼土跡出土土器 (5)	460
第293图	住居跡出土土器 (103)	409	第330图	焼土跡出土土器 (6)	461
第294图	住居跡出土土器 (104)	410	第331图	粘土塊出土土器 (1)	462
第295图	住居跡出土土器 (105)	411	第332图	粘土塊出土土器 (2)	462

第333図	グリッドビット出土土器 (1) ……	468	第370図	柱穴列出土土製品 ……	525
第334図	グリッドビット出土土器 (2) ……	469	第371図	焼土跡出土土製品 ……	526
第335図	グリッドビット出土土器 (3) ……	470	第372図	グリッドビット出土土製品 ……	527
第336図	グリッドビット出土土器 (4) ……	471	第373図	遺構出土尖頭器・石鏃・石錐 ……	541
第337図	住居跡出土土製品 (1) ……	483	第374図	遺構出土スクレイパー・ 二次加工剥片 ……	542
第338図	住居跡出土土製品 (2) ……	484	第375図	遺構出土二次加工剥片・ 礫器・打製石斧 ……	543
第339図	住居跡出土土製品 (3) ……	485	第376図	遺構出土打製石斧 (1) ……	544
第340図	住居跡出土土製品 (4) ……	486	第377図	遺構出土打製石斧 (2) ……	545
第341図	住居跡出土土製品 (5) ……	487	第378図	遺構出土打製石斧 (3) ……	546
第342図	住居跡出土土製品 (6) ……	491	第379図	遺構出土磨製石斧 ……	547
第343図	住居跡出土土製品 (7) ……	492	第380図	遺構出土磨製石斧・砥石 ……	548
第344図	住居跡出土土製品 (8) ……	493	第381図	遺構出土砥石 (1) ……	549
第345図	住居跡出土土製品 (9) ……	494	第382図	遺構出土砥石 (2) ……	550
第346図	住居跡出土土製品 (10) ……	495	第383図	遺構出土砥石 (3) ……	551
第347図	住居跡出土土製品 (11) ……	496	第384図	遺構出土敲石 (1) ……	552
第348図	住居跡出土土製品 (12) ……	497	第385図	遺構出土敲石 (2) ……	553
第349図	住居跡出土土製品 (13) ……	498	第386図	遺構出土凹石 ……	554
第350図	住居跡出土土製品 (14) ……	500	第387図	遺構出土凹石・磨石 ……	555
第351図	住居跡出土土製品 (15) ……	501	第388図	遺構出土磨石 (1) ……	556
第352図	住居跡出土土製品 (16) ……	502	第389図	遺構出土磨石 (2) ……	557
第353図	住居跡出土土製品 (17) ……	503	第390図	遺構出土磨石 (3) ……	558
第354図	住居跡出土土製品 (18) ……	504	第391図	遺構出土磨石 (4) ……	559
第355図	住居跡出土土製品 (19) ……	505	第392図	遺構出土スタンプ形石器・石皿 ……	560
第356図	住居跡出土土製品 (20) ……	506	第393図	遺構出土石皿 (1) ……	561
第357図	住居跡出土土製品 (21) ……	507	第394図	遺構出土石皿 (2) ……	562
第358図	住居跡出土土製品 (22) ……	508	第395図	遺構出土石皿 (3) ……	563
第359図	住居跡出土土製品 (23) ……	509	第396図	遺構出土石皿 (4) ……	564
第360図	住居跡出土土製品 (24) ……	515	第397図	遺構出土石皿 (5) ……	565
第361図	住居跡出土土製品 (25) ……	516	第398図	遺構出土台石 ……	566
第362図	住居跡出土土製品 (26) ……	517	第399図	遺構出土軽石類 ……	567
第363図	住居跡出土土製品 (27) ……	518	第400図	遺構出土石錘・石棒 ……	568
第364図	住居跡出土土製品 (28) ……	519	第401図	遺構出土石棒・石剣 ……	569
第365図	住居跡出土土製品 (29) ……	520	第402図	遺構出土石剣 ……	570
第366図	住居跡出土土製品 (30) ……	521	第403図	遺構出土独鈷石 ……	571
第367図	土壌出土土製品 ……	523	第404図	遺構出土石冠・岩版・垂飾 ……	572
第368図	遺物集中出土土製品 ……	524			
第369図	掘立柱建物跡出土土製品 ……	525			

第405図	遺構出土骨製品(1)……………581		住居跡・プラン変更住居跡……………589
第406図	遺構出土骨製品(2)……………582	第410図	藤岡神社・下ヶ戸宮前遺跡の
第407図	南盛土縄文時代後・ 晩期集落変遷図……………585		焼失住居……………590
第408図	各地域の大形(堅穴)建物址……………588	第411図	動物形土製品集成1……………596
第409図	県内の縄文時代晩期前半における 方形プランと円形プラン、折衷型	第412図	動物形土製品集成2……………598
		第413図	土製円盤のタイプと比率……………600
		第414図	土製円盤の重量分布……………601

表目次

(第2分冊)

第15表	遺構出土復元土器観察表(1)……………472	第27表	遺構出土土製円盤観察表(3)……………531
第16表	遺構出土復元土器観察表(2)……………473	第28表	遺構出土石器観察表(1)……………573
第17表	遺構出土復元土器観察表(3)……………474	第29表	遺構出土石器観察表(2)……………574
第18表	遺構出土復元土器観察表(4)……………475	第30表	遺構出土石器観察表(3)……………575
第19表	遺構出土復元土器観察表(5)……………476	第31表	遺構出土石器観察表(4)……………576
第20表	遺構出土復元土器観察表(6)……………477	第32表	遺構出土石器観察表(5)……………577
第21表	遺構出土復元土器観察表(7)……………478	第33表	遺構出土石器観察表(6)……………578
第22表	遺構出土復元土器観察表(8)……………479	第34表	遺構出土石器観察表(7)……………579
第23表	遺構出土耳飾り観察表(1)……………528	第35表	遺構出土骨製品観察表……………583
第24表	遺構出土耳飾り観察表(2)……………529	第36表	中央窪地型集落の属性表(1)……………593
第25表	遺構出土土製円盤観察表(1)……………529	第37表	中央窪地型集落の属性表(2)……………594
第26表	遺構出土土製円盤観察表(2)……………530		

V 南盛土の遺物

1. 土器

(1) 住居跡出土土器

第14号住居跡出土土器 (第191図1、第228図)

第191図1は紐線文系の粗製深鉢である。胴下半部を欠失する。胴部中段にくびれを持ち、口縁外傾する。口縁直下と胴部中段に紐線文を巡らせ、頸部に横位、胴部では右下がりの条線を施文する。地文縄文を持たず、器面にケズリ調整を残す。曾谷～安行1式に伴うものとみられる。

第228図は破片資料である。

1は加曾利B3式の粗製土器口縁部である。2は安行1式の大波状口縁深鉢、3は同時期の瓢形土器口縁部である。4・5は安行3a式で、玉抱き三叉文を描く。6は頸部が「く」の字にくびれる土器で、口縁外反して縄文を施文する。晩期前葉の土器であろう。

7・8は深鉢胴部で、弧線文の内外に縄文を施文する半円形モチーフ。安行3b式か。9は台付き鉢の脚台で、半円形の擦り消しモチーフを描き、胴部との境に2段の短沈線を巡らせる。

10～15は安行式の粗製深鉢口縁部である。10・11は口縁外面に装飾を持たず、縦位の条線を施文する。12は列点+沈線を巡らせる。13も列点+沈線で縦位の平行沈線文を描く。

14は2段の押し引き文で、縦位の平行沈線文を描く。15は口唇断面肥厚して外面に段を持ち、連続押圧の隆帯を巡らせる。口端上面は平坦に整形している。

16～18は無文土器で、16・17は口唇断面肥厚する砲弾形深鉢、18は外反口縁である。

第37号住居跡出土土器 (第191図2～5、第228～230図)

第191図2は丸底の精製浅鉢である。胴部中段から上を欠失する。胴下半部に帯縄文を巡らせ、

以下は無文となる。晩期前葉のものか。

3は新地系の壺型土器である。頸部～胴上半部が残存する。横位の平行沈線文を巡らせ、ボタン状の貼り瘤を多段に配する。

4は後期安行式の粗製深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。水平口縁で、軽微に内湾しつつ直線的に開く。口唇は肥厚し、口端は平坦に整形されている。口縁直下と胴部に押し引き文を巡らせ、全面に斜位の条線を施文している。

5は無文の深鉢である。口縁と底部を欠失する。内湾しつつ単調に立ち上がる砲弾形の器形で、全面に縦位のナデ調整を施す。

第228～230図は破片資料である。

1は堀之内1式の口縁部である。10は堀之内2式で、内文を持つ浅鉢口縁部である。8・9は加曾利B1式の浅鉢で、9は内文を持つ。

2～6・19・20は加曾利B2式であろう。口縁外面に区画を巡らせ2・3は括弧状のモチーフを配する。6は胴上半部に絞杉状の集合沈線文を施文する。19・20はソロバン玉状に張り出す口縁部で、19は弧線文を巡らせる。20は押圧隆帯を巡らせて、括弧状のモチーフを配する。

11～13は加曾利B2式の精製深鉢胴部で、多段の横帯文に括弧状のモチーフを配する。14は横帯文内部に縄文と斜格子文を施文するもので、やはり加曾利B2式であろう。

21は波状口縁で、外面に刻みと帯縄文を巡らせる。加曾利B3式であろう。22は瓢形土器で、加曾利B3式～曾谷式である。

15～18は縄文のみの土器で、加曾利B式の粗製土器である。23～35は紐線文の土器で、加曾利B～曾谷式の粗製土器である。粗放な縄文と条線を施文する。23は横帯文、24は格子目文を施文する。

35は胴部中段に押圧隆帯を巡らせ、上下で方向の異なる条線を施文する。

7・37～45は曾谷・高井束式である。

7・37～41は大波状口縁の深鉢で、口縁直下に文様帯を持つ。40は波底部で、多段の貼り瘤を配する。

42～44は水平口縁の深鉢で、やはり口縁直下に文様帯を持ち、42は縦瘤を配する。

45は緩やかな波状口縁で、研磨した器面に鋭利な工具で矢羽状の集合沈線を施文する。

46～49は安行1式の大波状口縁深鉢である。帯縄文の区画と縦瘤を配する。円形の貼り瘤の47は曾谷式の可能性もある。

50～57は水平口縁深鉢で、後期安行式である。帯縄文の区画を巡らせる。口縁外反する50は浅鉢や台付き鉢となる可能性もある。

58～61は瓢形深鉢で、安行1式である。口縁内湾して、帯縄文と押し引き文を巡らせる。

62～64は台付き鉢で、後期安行式であろう。62は刻みを持つ外反口縁で、縦位の条線を施文する。63・64は脚台部である。

65～67は晩期前葉の土器である。65は細密沈線を地文とする安行3b式である。66は胴上半部が「く」の字に張り出し、口縁外面に杓状工具の刻みを巡らせて擦り消し文様を描く。67は鱗状突起を配する無文の口縁で、浅鉢の可能性もある。

68～85は安行式の粗製深鉢である。68～81は口縁外面に沈線や押し引き文を巡らせる土器で、安行1式と考えられる。横位の条線に縦位の沈線文の82・83、帯縄文の巡る84は晩期の土器であろう。

86～90は無文土器で、87は口端上にごく浅い刻みを持つ。89・90は浅鉢であろう。

91は安行式の深鉢底部で、条線を施文し、底面に網代痕を残す。

第38号住居跡出土土器（第191図6～第192図10、第231・232図）

第191図6は安行1式の砲弾形深鉢である。口縁

部のみ残存する。口縁直下に帯縄文による楕円形の区画文を描き、縦瘤を配する。頸部は無文となる。

7は安行2式で、注口土器とみられるが、胴下半部および注口部を欠失する。砲弾形の器形で水平口縁、口唇著しく肥厚して、外面にR L単筋の縄文を施文する。口縁直下に2個一対の貼り瘤を配し、双頭状の突起で連繋する。胴部には円文と横位の刻み突起を配し、刻み隆帯で連繋する。

8は粗製深鉢である。底部を欠失する。砲弾形の器形で、口唇肥厚し、口端上は平坦に整形している。口縁直下と胴部中段に押し引き文を巡らせ、胴上半部を中心に斜めの条線を交差させる。後期末葉～晩期初頭のものか。

9は五角形の皿である。口縁～胴部中段まで残存する。山形波状口縁で、波頂部と波底部にそれぞれ一対の貼り瘤を配する。波頂部間を弧線文で連携し、胴部には平行沈線文を巡らせる。縄文を持たない。

10は円口方底の浅鉢である。編み籠の内面に粘土紐を積み上げて成形し、そのまま焼成したものとみられる。10mm前後と、非常に肉厚の器壁である。水平口縁で、底部は四隅がやや突出する。側面および底面に編み物の圧痕を残すが、口縁部のみ横位のナデ整形で圧痕を擦り消している。口縁直下に1条の凹線を残すが、これは編み籠の縁かがりの部分の痕跡であるかもしれない。

第231・232図は破片資料である。

1は諸磯b式である。2は縦位の条線を施文する深鉢で、堀之内式と考えた。3は加曾利B3式と考えたが、曾谷式に下る可能性もある。4は加曾利B式の粗製土器である。

5～11は安行式の大波状口縁深鉢である。5・9・11は安行1式、7・10は安行2式、6・8は安行3a式であろう。

12～19は水平口縁深鉢で、16は安行2式、17は安行3a式、他は安行1式であろう。15は浅鉢や

台付き鉢の可能性もある。

20～22は砲弾形の深鉢で、後期安行式であろう。押し引き文を巡らせて円孔を穿つ。22は瓢形土器の可能性もある。

23～28は口縁下に縄文帯を持つ外反口縁の深鉢で、後期末～晩期前葉の土器である。波頭文の24、半円形モチーフの26は安行3b式、横位の紡錘文の間に波状沈線を垂下させる25や押し引き文の27は安行2式であろう。28・29も晩期前葉の土器と考えられる。

30・31は瓢形土器で、安行1式であろう。32・33は貼り瘤を持つ胴部で、32は安行1式ないし曾谷式、33は安行3b式であろう。34・35は擦り消し縄文の胴部で、34は晩期前葉、35は安行2式であろう。

36は非常に薄手の器壁で、口縁上に緩やかな山形の突起を配し、横位の沈線を巡らせる。晩期前葉の土器であろう。37は安行3d式である。

38・39は台付き鉢で、後期安行式である。

40～62は安行式の粗製深鉢である。口縁外反ないし直立して、刻みや押し引き文を巡らせる41～50は安行1式、他は大半が後期末～晩期前葉の土器と考えられる。63～70は無文土器である。64は口縁外面に1条の沈線を巡らせる。65は折り返し口縁上に押圧を伴っている。

第39号住居跡出土土器（第232・233図）

1・2は浮島式である。3は加曾利B1式、4～8はB2式、9は曾谷式である。

10は無文の外反口縁、11は粗い縄文を施文する口縁部。12は櫛歯状工具で曲線的なモチーフを描く胴部。13は無文の底部で、底面に網代痕を残す。いずれも後期前葉～中葉の土器であろう。

第40号住居跡出土土器（第192図11～第198図70、第233～246図）

第192図11～15は大波状口縁の精製深鉢で、いずれも安行3a式である。16・17はこれに伴う胴部であろう。

11は口縁部～胴上半部まで残存する。上下左右に刻みを持つ貼り瘤を配し、これを沈線で連繫することで波頂部直下にひし形の区画を構成する。区画の内部には入り組み文と三叉文を配する。地文はL無節の縄文である。

12は胴部中段まで残存する。波頂部には縦長扁平な豚鼻突起を配し、豚鼻突起を伴う帯縄文により胴上半部に三角形区画文、胴部中段に楕円形区画文を描く。地文はR L単節の縄文である。

13はほぼ完形の小型精製深鉢である。胴上半部に横位の対向弧線文を巡らせ、間隔に三叉文を配する。胴部中段には縄文を伴う隆帯を巡らせ、胴下半部は無文となる。地文はR L単節の縄文である。

14は口縁部～胴上半部まで残存する。波頂部下に帯縄文でひし形の区画を描き、交点に豚鼻突起を配する。区画内部には三叉文などのモチーフを配するものとみられる。地文はR L単節の縄文である。

15は口縁部～胴部中段まで残存する。胴上半部に三角形区画文を配し、頂点から一対の短沈線を垂下させる。胴部中段には帯縄文の楕円形区画文を巡らせるが、区画の交点には「の」の字形の単位文を描いている。地文はL無節の縄文である。

16は胴部中段～下半部のみ残存する。胴上半部には三角形区画文を描くものとみられる。胴部中段には楕円形区画文を巡らせるが、下端の描線は3本沈線で描いている。区画の接点には刻みを持つ縦瘤を配する。地文はL無節の縄文である。

17は胴部中段のみ残存する。上向きの連続弧線文を描き、頂部に豚鼻突起を配する。文様帯上下を平行沈線で区画する。地文はR L単節の縄文である。

18・19は安行1式の水平口縁深鉢である。

18は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁下に3段の帯縄文を巡らせ、3段の縦瘤を配する。頸部にも帯縄文を巡らせる。地文はR L単節の縄文

である。

19は口縁部のみ残存する。3段の帯縄文と、上下2段の縦縞を配する。地文はRL単節の縄文である。

20～22は砲弾形の深鉢である。胴部中段に最大径を持ち、口縁強く内湾する。

20は口縁～胴下半部まで残存する。3段の帯縄文を巡らせ、口縁直下に刻みを持つ縦縞、中・下段には豚鼻突起を配する。地文はRL単節の縄文である。胴部中段以下は無文で、横位～斜位のヘラケズリを残す。安行2式であろう。

21は口縁部～胴部中段まで残存する。縄文を施文せず、沈線のみで2段の長方形区画文を描き、接点に刻みを持つ縦縞を配する。文様帯下端は平行沈線で区画する。安行2式であろう。

22は口縁部～胴部中段まで残存する。縄文を施文せず、幅広い凹線によって3段の区画帯を表現する。胴部には対向弧線文を巡らせる。安行1式か。

23～25は瓢形の深鉢で、安行1式である。胴部中段にくびれを持って胴下半部に最大径を持ち、口縁強く内湾する。

23は口縁部を欠失する。口縁直下に円孔を持つ。胴上半部と中段に帯縄文を巡らせ、押し引き文を施文する。胴下半部には粗放な対向弧線文を描いて縄文を充填する。底部付近は縄文帯となるが、沈線による区画は持たない。

24は口縁部～胴部中段まで残存する。胴上半部に幅広い縄文帯を持って、短沈線の綾線文を巡らせ、上下の沈線の交点には対弧状の短沈線を配する。口縁との境は無文帯となり、胴部との境は平行沈線で区画する。地文はRL単節の縄文である。

25は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁直下に帯縄文による区画を形成し、押し引き文を巡らせる。胴上半部には粗放なS字状入り組み文を描いて縄文を充填する。胴部中段のくびれ部分には平行沈線文と押し引き文を巡らせる。地文はRL

単節の縄文である。

26は深鉢胴部である。胴部中段にくびれを持ち、胴下半部が「く」の字に張り出す。胴部中段の文様帯は横位の紡錘文を2段に巡らせて縄文を充填し、蛇行沈線を垂下させて、下端に豚鼻突起を配する。胴下半部には上向きの弧線文を巡らせ、下端を横位の沈線で区画して縄文を充填し、以下には斜位の条線を施文する。地文はRL単節の縄文である。安行2式であろう。

27は安行3a式の入り組み文系深鉢である。口縁部と胴上半部に文様帯を持ち、それぞれの境界を帯縄文で区画する。小波状口縁で、波頂部下には一つ置きに玉抱き三叉文を施文するが、この三叉文の末端は弧状の区画となって口縁部を巡っており、間隙に三叉文を充填している。胴部には入り組み三叉文を描く。胴下半部は無文で、底部は上げ底状となっている。地文はL単節の縄文である。

28は口縁部を欠失する深鉢である。胴上半部および中段に幅広い帯縄文を巡らせており、口縁下には弧状のモチーフが巡るものとみられる。胴下半部は無文である。地文はL単節の縄文である。晩期前葉の土器であろう。

29は精製深鉢の底部である。斜位の条線を地文として、胴部の無文帯との境を1条の沈線で区画する。30も精製深鉢底部で、RLの単節の縄文のみ施文している。

31は紐線文系の粗製深鉢で、口縁部のみ残存する。水平口縁で、緩やかに外反しつつ開く。口縁直下に押圧を伴う隆帯を巡らせ、頸部にはRL単節の粗雑な縄文の上に横位弧状の条線を施文する。加曾利B3～曾谷式に伴うものであろう。

32～69は、安行式に伴う粗製土器である。砲弾形の器形で口縁強く内湾し、口唇断面が肥厚する。大半が晩期前葉のものであろう。

32は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下に段を有する。段の下には押し引き文を巡ら

せ、さらに1条の沈線を巡らせる。胴上半部には文様帯を持たず、斜位の条線を施文する。胴部中段には平行沈線+押し引き文の区画を巡らせる。

33は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁直下に押圧を伴う隆帯を巡らせる。胴上半部には蛇行沈線文を垂下させ、左右に弧状のモチーフを重畳させる。地文は持たず、ヘラケズリの調整痕を残す。

34は口縁～胴下半部まで残存する。口唇断面著しく肥厚し、口端上面は平坦に整形する。口唇外面と胴部中段に刻みを伴う隆帯を巡らせる。胴上半部には列点文を垂下させ、左右に対弧状のモチーフを配する。弧状の条線を地文とし、胴上半部では横位、胴下半部では斜位に施文している。

35は口縁～胴下半部まで残存する。口唇外面と胴部中段に刻みを伴う隆帯を巡らせる。胴上半部は縦位の紡錘文の中に列点文を垂下させ、横位に対弧文で左右連繫する。弧状の条線を地文とし、胴上半部では横位、胴下半部では斜位に施文している。

36は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口唇外面と胴部中段に刻みを伴う隆帯を巡らせ、胴上半部は細い平行沈線の斜行文を描く。胴上半部は横位弧状の条線を施文している。

37は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口端上面を平坦に整形している。口唇外面と胴部中段に刻みを伴う隆帯を巡らせ、胴上半部は平行沈線の弧状モチーフと単沈線の横V字モチーフを交互配置する。地文条線を持たず、器面に粗いナデ調整を残す。

38は底部を欠失する。37に類似の文様を描くが、弧状モチーフに対する横V字モチーフの方向が逆になっている。地文条線は胴下半部のみ斜位に、粗雑に施文している。

39は口縁部～胴上半部まで残存する。口縁直下に刻みを持つ隆帯を巡らせ、胴上半部には太い沈線で37に類似の文様を描く。条線は施文せず、器

面を研磨している。

40は口縁～胴部中段まで残存する。口端上面を平坦に整形している。口唇外面と胴部中段に刻みを伴う隆帯を巡らせ、胴上半部は太い平行沈線の弧状モチーフと斜行モチーフを交互配置する。地文条線を持たず、器面を研磨している。

41は口縁～胴部中段まで残存する。口端上面を平坦に整形している。口縁直下に段を持ち、段上に刻みを巡らせる。胴部中段には刻みを伴う隆帯を巡らせる。胴上半部は太い平行沈線の弧状モチーフを入り組ませ、内部にLR単節の縄文を充填する。条線は施文せず、器面を研磨する。

42は口唇内面に段を持ち、口端上面を平坦に整形している。口唇外面には1条の沈線を巡らせている。胴部中段に平行沈線を巡らせて胴上半部にやや幅の狭い文様帯を構成し、平行沈線の弧状モチーフを描いて、内部に米粒状の列点を充填する。条線は施文せず、篋状工具のナデ調整を施している。

43～51はこれら粗製土器に伴う底部である。

49・51は無文だが、他は斜位の条線を施文している。

52は台付き鉢の脚台部である。透かしを持たない無文の脚台で、「ハ」の字形に開く。上面に体部の底面を残している。53も台付き鉢で、体部と脚台部の接続部分だが、脚台側は完全に剥落している。

54～56は鉢である。

54は注口土器の可能性もある。口縁部～胴下半部まで残存する。折り返し口縁で、口端上面は平坦に整形し、外面に縄文を施文する。胴部中段は「く」の字に張り出して2条の帯縄文を巡らせ、刻みを持つ横瘤を配する。胴上半部には対弧文と横V字文・三叉文を組み合わせてひし形のモチーフを描く。胴下半部は縄文帯となり、上端を1条の沈線で区画する。地文はRL単節の縄文である。安行3a式であろう。

55は扁平な鉢で、胴部中段～胴下半部にかけて残存する。胴部中段が「く」の字に張り、刻みを伴う箍状の隆帯を巡らせて、上下に文様帯を持つ。下位の文様帯には平行沈線による弧状モチーフが巡り、下端を横位の平行沈線で区画する。底部は無文である。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式であろう。

56は口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴上半部に最大径を持って、頸部は屈曲して内面に稜を持ち、口縁は軽微に外屈して、口唇断面は肥厚する。口端上に一対の貼り瘤を配する。胴上半部に短沈線の弧状モチーフを巡らせ、下端を1条の沈線で閉塞する。地文は持たず、胴下半部に横位のヘラケズリを残している。安行3 c式であろう。

57は無文の鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。非常に薄手の器壁で、全面に粗いヘラナデ調整を施す。製塩土器に類似の造りだが、被熱の痕跡はみられない。

58・59は鉢ないし浅鉢の底部である。

58は丸底で、周縁に段を持って平行沈線でなぞりを加えた高台風の造りである。胴下半部にはR L単節の縄文を施文するが、底面は無文である。

59も丸底で、周縁に段を持つ。底面は無文で粗いナデ調整を施し、胴下半部には斜位の条線を施文する。

60～63は浅鉢である。いずれも口縁～底部まで残存する。

60は水平口縁で、内文を持つ突起を中心に、左右に刻みを持つ一対の小突起を配する。口縁が軽微に屈曲して外反し、この部分が縄文帯となる。胴部中段に帯縄文を巡らせるが、上位の描線が変化して魚眼三叉文を形成する。丸底で、周縁に段を持ち、沈線によるなぞりを加えている。地文はL R単節の縄文である。安行3 a式。

61は水平口縁で、胴上半部に楕円形区画文を描き、内部に対向三叉文を描くが、1箇所のみさらにひし形の区画を描いて、中央に入り組み文を描

いている。胴下半部には崩れた対向弧線文を巡らせる。丸底で、周縁に緩い段を持つ。地文を持たない。内面にも粗雑な沈線らしきものがあるが、モチーフは判然としない。安行3 c式であろう。

62は無文の浅鉢ないし皿で、ほぼ完形品である。扁平で、口縁がやや外反して、内面に稜を持つ。口端上の1箇所に、刻みを持つ貼り瘤2対を配する。時期は後期前葉か。

63は丸みを帯びた五角形の浅鉢である。頂点の部分に内文を持つ双頭の突起を配し、突起間を弧線文で連繋する。胴部には帯縄文で三角形の区画を構成し、内部に対向三叉文を描くものとみられる。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式であろう。

64・65は壺である。

64は注口土器の可能性もある。口縁部と底部を欠いている。肩部～胴下半部にかけて文様帯を持ち、大柄の入り組み三叉文を描く。地文はL R単節の縄文である。底部は無文となる。安行3 a式であろう。

65は胴上半部のみ残存する。肩部に眼鏡状隆帯が巡り、これより下に擦り消し文様を描く。地文はL R単節の縄文である。晩期前葉の土器である。

66は注口土器である。胴上半部に最大径を持つ砲弾形の器形で、口縁部に刻みを持つ縦瘤を配し、円孔を穿つ。胴上半部に単沈線の入り組み文を巡らせ、胴部中段には帯縄文を重畳させて、縦瘤を配する。胴下半部は縄文帯となる。安行3 b式である。

67～68は床面焼土層からの出土である。

67は円口方底土器である。胴下半部～底部にかけて残存する。底面は楕円形に近い隅丸長方形で、周縁に沈線を巡らせる。長軸方向に対弧文を描き、外側に縄文を施文する。胴部には対向弧線文を巡らせ、やはり縄文を充填する。地文はR L単節の縄文である。

69は無文土器である。丸みを帯びた折り返し口

縁で、口唇断面は外削ぎ状である。胴部には指頭？による縦位のナデを徹底している。晩期前葉の土器である。

70は楕円形の浅鉢である。長軸側と短軸側の口端上に形状の異なる突起を配し、口縁外面にも中央押圧を伴う円形の突起を配する。口縁下に綾杉状の沈線文を巡らせ、文様帯下端を横位の沈線で区画する。底面には篋状工具の粗いナデ調整を施す。縄文は施文しない。突起などの特徴が天神原式に類似し、同時期の土器と考えられる。

第233～246図は破片資料である。

1は鶏ヶ島台式、2は茅山式であろう。3・4は花積下層式の口縁部である。5は関山式、6・7は黒浜式である。8は諸磯a式である。

9は加曾利EⅢ式、10は同EⅣ式である。11～20は堀之内1式で、11～14は口縁部、15以下は胴部である。15・16については称名寺式に遡る可能性もある。21～25は堀之内2式である。26・27は堀之内式に伴う粗製土器であろう。

28は加曾利B1式で、浅鉢の可能性はある。29～38は加曾利B2式である。29・30は口縁上の突起、31・32・34は横帯文の流れをくむ土器である。33・35は胴上半部がソロバン玉状に張り出す鉢、36～38は矢羽状の集合沈線が巡る口縁部である。

39・40は加曾利B3式で、39は5単位大波状口縁の深鉢、40は瓢形深鉢である。

41～46は加曾利B式に伴う粗製土器である。

41・42は紐線文の土器、43は縄文のみの土器である。44以下は無文土器で、口縁内面に凹線を持つ。

47～58は曾谷・高井東式である。47～50は大波状口縁深鉢で、波頂部に突起を配し、口縁直下に区画帯を持つ。51・52は山形波状口縁の土器で、51は波頂部に押圧を伴う縦長の貼り付け文を配する。52は波頂部の内外に貼り付け文を持つ。

54～57は水平口縁の深鉢で、やはり口縁直下に文様帯を持つ。58は桶妻状の沈線文を描く胴部である。

59～87は安行式の大波状口縁深鉢である。59～62は安行1式、63～68は安行2式である。69～78は安行3a式、79～87は安行3b式であろう。

88～105・107～109は安行式の水平口縁深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ貼り瘤を配するものである。88～96は安行1式と考えたが、95・96は曾谷式の可能性はある。97～105・107～109は安行2式ないし3a式であろう。109は台付き鉢の可能性はある。114～130などはこれらに伴う区画文の口縁部である。

106は口縁上に突起を配して豚鼻突起を付す砲弾形深鉢で、文様帯を縦位に分割した中に横位の弧線文を上下対向させる。安行3b式であろう。

110～113・131～140は擦り消し文様を描く深鉢で、110～113・137は水平口縁上に突起を配する。蛇行沈線を垂下させる112は安行2式、対向三叉文の137～140は安行3a式であろう。他も後期末～晩期前葉の土器である。

143～198は安行式の砲弾形深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、口縁上や区画の交点に突起を配する。143～155は安行1式、156～180は安行2～3a式であろう。156～158は注口土器の可能性もある。197は細密沈線文土器と共通の文様を描く土器で、安行3b式であろう。

199～202は瓢形土器で199は曾谷式、200以下は安行1式である。

203・204は外反口縁の深鉢で、安行3b式であろう。口端上に突起を持ち、口縁外面に縄文を施文する。203は突起の下に波頭状の入り組み文を描く。

205～229は安行式の精製深鉢胴部である。205～208は安行1式の瓢形深鉢である。211～223は豚鼻突起を配する。刻み隆帯の212・213は安行2式、他は概ね晩期前葉の土器とみられる。

230～235は台付き鉢である。230～232は外反口縁で口端部に刻みが巡り、縦位の条線を施文する。安行1式である。233は刻み隆帯と豚鼻突起の安行

2式である。234・235は円孔を穿つ脚台部で、やはり後期安行式に伴うものである。

236～241は注口土器の口縁部とみられ、256・257は注口部である。刻み隆帯の241・257は安行2式、他は安行3a式であろう。

242～255は安行式に伴う浅鉢である。242・243は胴部中段が「く」の字に張り出して隆帯を巡らせる土器で、三叉文を描く安行3a式である。244もこの流れを引く土器で、安行3b式であろう。

245～248は帯縄文や対向弧線文などシンプルな擦り消し文様を描く口縁部で、後期安行式と考えたが、248は曾谷式の可能性もある。

249は五角形など特殊な形態を持つ波状口縁の浅鉢で、頸部が「く」の字に屈曲し、波頂部に複数の貫通孔を穿つ。

250～255は浅鉢や壺・注口土器などの胴部と考えた。252は安行3a式、250・251・253は同3b式であろう。

258は大洞C2式で、壺ないし注口土器の口縁部である。259はいわゆる柵原式文様を描く精製深鉢で、西日本系の澄賀里式である。

260～401は安行式に伴う粗製深鉢口縁部である。260・261は口縁装飾を持たない。263～273は口縁外面に沈線を巡らせる土器である。267は胴部中段に平行沈線の区画を持つ。

262・274・275は口縁外面に刻みを巡らせる。口縁外反ないし直立する土器で、安行1式であろう。276～291は口縁外面に刺突や刻み、押し引き文を巡らせ、これに沿って沈線を巡らせる土器で、後期安行式に伴うものである。290・291は押し引き文+沈線を2段に巡らせて区画を構成する。

292～301は口縁外面に段を持って刻みや押し引き文を巡らせる。302～328は連続押王を伴うひだ状の隆帯を巡らせる土器である。

329～401は胴上半部に文様帯を持つ土器を一括した。329～332は縦位の平行沈線文、333～340は

平行沈線による斜行文を描いている。

341～357は縦位の弧線文を組み合わせた紡錘文や対弧文を描く土器である。358～369は縦位の蛇行沈線文を垂下させる土器で、多くは縦位の平行沈線文や紡錘文、対弧文を併用して複合的に描かれる。369は蛇行沈線文+紡錘文が器面を縦位に分割し横位の弧線文がこれを連繋している。370もこれと類似の文様である。

371～385は平行沈線の弧状文を描く土器である。多くは棒状工具の太い沈線で文様を描いている。378・385は異方向の弧状文を入り組ませている。379～384は横V字のモチーフと組み合わせて特徴的な矢羽根文を描く。

386～389は平行沈線間に米粒状の列点文を描く。390～393は口縁部の押王隆帯が胴上半部に侵入してモチーフを描く土器で、平行沈線の弧状文と複合して用いている。

394～401は縄文を施文する土器である。395～398は縦位平行沈線文や紡錘文、入り組み弧状文などと複合して擦り消し文様を描いている。399～401は口縁外面に帯縄文を巡らせる。

402～432は無文土器である。402・403は波状口縁で、加曾利B～曾谷式であろう。404・405は突起や瘤を持つ土器で、曾谷式ないし安行1式に伴うものであろう。406は薄手の器壁で頸部がS字に屈曲し、ごく浅い平行沈線を巡らせる土器で、晩期前葉の土器と思われる。407～419は砲弾形の無文深鉢で、晩期前葉の土器である。口唇断面著しく肥厚して、外面に段を形成する。414～416は内面に稜を形成している。

420～432はその他の無文土器で、後期～晩期のものが含まれる。口縁下に段を持つ429・430は曾谷式の可能性があり、ごく薄手の器壁で粗い調整を施す431は製塩土器であろう。

433～477は床面焼土上層から出土の土器である。

433・434は加曾利B2式で、433は横帯文の深鉢、

434は体部ソロバン玉形の鉢である。435～437は紐線文の土器で、加曾利B 2・3式に伴うものとみられるが、条線が密な437は曾谷式に下る可能性はある。

438～440は安行式の大波状口縁深鉢である。波底部に縦瘤の438は安行1式である。439・440は姥山系の文様を描いており、安行3 b式と考えられる。

441～443は安行式の水平口縁深鉢である。441は安行1式、442・443は同3 a式であろう。444～449は安行式の砲弾形深鉢である。445～448は安行1式、449は安行2式であろう。450は安行2式の注口土器と考えた。

451～453は擦り消し縄文の深鉢で、晩期前葉の土器である。451・452は水平口縁上に小突起を配し、入り組み三叉文を描く。安行3 a式であろう。

454は安行2式の台付鉢である。口唇断面著しく肥厚して外屈し、口縁外面に縄文を施文する。胴部には刻み隆帯を巡らせて豚鼻突起を配する。

455は異系統の深鉢である。水平口縁上一対の小突起を配し、口縁外面には平行沈線の鋸歯文を描いて貼り瘤を配する。

456～466は安行式の粗製深鉢で、後期末～晩期前葉の土器である。456は口縁外面に押し引き文+沈線の区画を巡らせ、胴上半部に横位の弧線文を描く。457～464は口縁外面に段を持って刻みや押圧隆帯を巡らせ、胴上半部に紡錘文や対弧文、蛇行沈線文などを描いている。463・464は縄文を施文する土器である。465・466は胴上半部に押圧隆帯で文様を描いている。

467以下は無文土器である。467～470は砲弾形の深鉢である。口唇断面著しく肥厚し、467・469は口縁外面に段を持つ。また、469・470は口縁内面に稜を形成する。晩期前葉の土器であろう。

471～474は内湾口縁で、後期～晩期の土器が含まれる。口縁下に微隆起帯を巡らせる472は安行1式の可能性はある。474は浅鉢とみられ、水平口

縁上に小突起を配する。

475～477は製塩土器であろう。薄手の器壁で、鑊状工具の粗い調整を残しており、被熱の痕跡がみられる。口唇の断面形状は、475が角頭棒状、476は外削ぎ、477は単純な先細りである。

第41号住居跡出土土器（第198図71、第246図）

第198図71は大型の精製深鉢で、口縁部～胴下半部にかけて残存する。5単位の緩やかな波状口縁をなすものとみられる。口唇外面に刻み目帯を巡らせ、以下頸部までを縄文帯とする。頸部には無文帯を持って、胴部との境を刻み目帯で区画する。胴部中段には上下に間延びした対向弧線文を描き、縄文を充填する。胴下半部は縄文帯で、上端を横位の沈線で区画している。地文はR L単節の縄文である。加曾利B 3式である。

第246図は破片資料である。

1は曲線的な擦り消し縄文の称名寺式である。2は紐線文の土器で、縄文がほとんど見られないことから加曾利B 3～曾谷式であろう。3・4は縄文のみの胴部で、加曾利B式に伴う。5は条線のみの胴下半部で、2と同時期のものであろう。

第42号住居跡出土土器（第247図）

1は早期末～前期初頭の土器である。0段多条の原体で幅広の羽状縄文を構成している。2・3は加曾利B 2式、4・5は加曾利B 3式である。6～14は加曾利B式に伴う粗製土器で、6～11は紐線文の深鉢、12は縄文のみの深鉢口縁部で、内面に凹線を巡らせる。

17～20は口縁直下に文様帯を持つ土器で、曾谷式であろう。17は帯縄文の区画を巡らせ、ごく小さな貼り瘤を配する。

21は安行3 b式の砲弾形深鉢で、口縁外面に縄文を施文し、胴上半部にも擦り消し文様を描く。22は横位の条線を施文する胴下半部で、後期安行式の台付鉢である。23～25は安行式の粗製土器で、後期末～晩期前葉の土器である。26～28は無文の土器で、26は口縁外面に段を持って押圧を巡

らせる。

第43号住居跡出土土器（第198図72～第210図175、第247～272図）

第198図72は小型精製の深鉢である。緩やかな波状口縁で、波頂部に円盤状の小突起を配する。口唇断面外割き状で内文を持ち、胴上半部には横帯文を描いて、波頂部下に区切り文を重畳させている。地文はR L単節の縄文である。加曾利B 1式である。

73～80は安行式の大波状口縁深鉢である。

73は口縁部～胴下半部にかけて残存する。ほぼ無文の土器で、波状口縁の波頂部と波底部に縦瘤を配し、両者を凹線で連繫している。安行1式であろう。74は口縁部～胴部中段まで残存する。波頂部と波底部に刻み無しの縦瘤を配し、胴上半部には刻み隆帯の三角形区画文を描いて、豚鼻突起を配する。地文はR L単節の縄文である。安行2式である。75は口縁部～胴部中段まで残存する。波頂部に刻みを持つ縦瘤を配し、胴上半部には刻み隆帯の三角形区画文を描いて、豚鼻突起を配する。胴部中段には楕円形区画文を巡らせるものとみられる。地文はR L単節の縄文である。安行2式である。76は小型の深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。波頂部には縦刻みの縦瘤を配し、胴上半部には簡略な三角形区画文を描いて、豚鼻突起を配する。胴部中段の帯縄文を挟んで胴下半部には入り組まずに上下対抗する弧線文を巡らせる。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式か。77は口縁部～胴部中段まで残存する。波頂部に刻み付きの縦瘤を配し、胴上半部には帯縄文の三角形区画文を描いて、豚鼻突起を配する。胴部中段には帯縄文を重畳させて対弧文で上下連結し、胴下半部には楕円形区画文を巡らせるものとみられる。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式である。78は口縁部～胴部中段まで残存する。波頂部と波底部に刻み付きの縦瘤を配し、胴上半部には帯縄文の三角形区画文を描いて、豚鼻突起

を配する。胴部中段には三叉文を中心とする文様を描く。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式である。79・80は胴部に鋸歯文を描く土器で、安行2式であろう。79は完形品である。波頂部と波底部に刻み付きの縦瘤を配し、胴上半部～胴部中段にかけて鋸歯文を描いて縄文を充填する。胴下半部は縄文帯で、上端は横位の沈線で区画する。80は底部を欠失する。瘤を持たず、波頂部の口端上に刻みを持つ小突起を配する。胴上半部には蛇行沈線文と鋸歯文を交互配置して縄文を充填する。胴部中段には上向きの弧線文を巡らせて、上を単沈線、下を帯縄文で区画して縄文を充填し、半円形の区画を構成する。胴下半部には斜位の条線を施文している。地文はR L単節の縄文である。

81～85は後期の水平口縁深鉢である。

81は曾谷式で、口縁部～胴上半部にかけて残存する。キャリバー形の器形で、口縁外反して口端が短く内屈する。口縁外面に幅の狭い縄文帯を持つ。胴部中段で屈曲して、1条の沈線を巡らせる。82・83は寸胴の深鉢で、いずれも口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁部に縦瘤を配する。安行1式ないし曾谷式であろう。84・85は安行2式の水平口縁深鉢である。84は胴部～口縁にかけて直線的に開き、口唇上に一対の突起を配する。胴上半部には粗雑な2段の紡錘文を巡らせ、文様帯下端は横位の沈線で区画する。口縁直下および胴部の紡錘文の間隙には横位の押し引き文を巡らせる。胴下半部には条線を施文する。縄文は施文せず、縦位のヘラケズリを残している。85は胴上半部にくびれを持って口縁外反し、口唇断面肥厚する。口端上に対をなす小突起を5単位配し、胴上半部には蛇行沈線文と2段の紡錘文を交互配置する。文様帯下端は横位の沈線で区画する。胴部中段以下は条線を施文する。地文はR L単節の縄文である。

86は晩期初頭の入り組み文系深鉢である。胴部中段のみ残存する。2段の入り組み文を描いて上

下を横位の沈線で区画するが、主文様の描線が上下の区画線と融合して開放している。地文はL R単節の縄文である。

87・88は胴上半部に擦り消し文様が展開する晚期前葉の深鉢である。いずれも内湾しつつ開く単調な器形で、口端上に刻みを持つ板状の突起を配する。87は口縁部～胴部中段にかけて残存する。上下を帯縄文で区画する文様帯を持ち、三叉文とステッキ状モチーフを組み合わせて横位に連続させ、縄文を充填する。胴部中段以下は無文となる。地文はR L単節の縄文である。88は底部を欠失する。入り組み文と弧線文・三叉文を組み合わせた複雑な擦り消しモチーフが展開する。文様帯下端は平行沈線で区画し、下方の連続弧線文との間に縄文を充填する。胴下半部は無文となる。地文はL R単節の縄文である。

89～99は安行式の砲弾形深鉢である。

89は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁下に3段の帯縄文を巡らせ、上下2段の縦縮を配する。地文はR L単節の縄文である。安行1式である。

90は口縁部～胴部中段まで残存する。頸部が軽微に屈曲して、口縁直立する。帯縄文により上下2段の楕円形区画文を形成し、接点に上下2段の縦縮を配して、下端に豚鼻突起を付す。文様帯の下端の描線を持たず、開放している。地文はL R単節の縄文である。安行2式であろう。

91は胴部中段が「く」の字に強く張り出す。帯縄文を対弧文で上下連結して2段の楕円形区画文を形成し、接点に刻みを持つ縦縮を配する。文様帯下端は押し引き文で区画する。胴部中段以下には条線を施文する。地文はR L単節の縄文である。

92は口縁部～胴上半部まで残存する。帯縄文を対弧文で上下連結して2段の楕円形区画文を成し、接点に山2つの縦縮と豚鼻突起を配する。安行2式である。

93は口縁部と胴上半部に帯縄文を巡らせ、上下に刻みを持つ縦縮と豚鼻突起を配する。突起間を

蛇行沈線文と対弧文で連結して、左右に楕円形区画を構成する。胴部は無文で、幅の狭い工具による縦位のミガキが施される。地文はR L単節の縄文である。安行2～3a式であろう。

94は口縁部～胴上半部まで残存する。口縁に刻みを持つ縦縮を配し、胴部の横縮や帯縄文の環状モチーフ相互の間を平行沈線で複雑に連繋する。地文はR L単節の縄文である。安行3a式とみられ、注口土器の可能性もある。

95は口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁直下に幅狭の無文部を持ち、刻みを持つ縦縮を配して帯縄文で連繋する。胴部には紡錘文と対向弧線文を巡らせ、縄文を充填して、文様帯下端を横位の沈線で区画する。胴下半部には縦位の条線を施文する。地文はR L単節の縄文である。安行3a式であろう。

96は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下に幅狭の無文部を持ち、刻みを持つ縦縮を配して平行沈線文で連繋する。胴部には複雑な入り組みモチーフを描いて縄文を充填し、文様帯下端を帯縄文で区画する。胴下半部は無文となる。地文はL R単節の縄文である。安行3a式であろう。

97は頸部～胴下半部にかけて残存する。口縁直下に押し引き文と横位の沈線を巡らせるものとみられる。胴上半部に文様帯を持ち、平行沈線の連続弧線文を巡らせて縄文を施文し、下端を横位の沈線で閉塞する。胴部中段以下には斜位の条線を施文する。地文はR L単節の縄文である。安行3b式であろう。

98は口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴上半部～中段にかけて文様帯を持つ。上方を平行沈線、下方を平行沈線+列点文で区画し、内部には蛇行沈線文と対弧文を組み合わせた文様を描く。縄文は施文せず、胴上半部では横方向、下半部では縦方向の粗いナデ調整を施す。安行3c式であろう。

99は口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴部

中段でごく軽微に屈曲し、口縁直立する。口唇断面肥厚して折り返し口縁となり、口端上面は平坦に整形している。胴上半部に平行沈線による粗雑な入り組み文を描き、文様帯下端は横位の平行沈線文で区画する。区画の下には下向きの連続弧線文を巡らせ、以下胴下半部にかけて縦位の条線を施文する。縄文は施文しない。安行3c式であろう。

100は瓢型深鉢である。胴下半部のみ残存する。上下に間延びした対向弧線文を描いて縄文を充填し、下端に1条の沈線を巡らせて、以下底部までを縄文帯としている。地文はRL単節の縄文である。曾谷式ないし安行1式とみられる。

101は瓢型深鉢に伴う底部である。RL単節の縄文を施文し、底面に網代痕を残す。

102～127は安行式の粗製深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾する砲弾形の器形である。

102・103は口縁肥厚して押し引き文と横位の沈線が巡り、胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を持つ土器である。102は口縁部～胴下半部にかけて残存する。条線は、胴上半部～中段にかけてはほぼ縦方向、胴下半部では斜位の条線が交錯する。103は口縁～胴部中段の区画まで残存し、斜位の条線を施文する。

104～106は口縁直下に段を持って、段の下に押し引き文と1条の沈線を巡らせる。胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を持つ。104は底部を欠失する。地文条線は胴上半部～中段までは縦位、胴下半部では斜位に施文する。105は胴下半部を欠失し、胴部中段の区画から下のみ斜位の条線を施文する。口端上に1箇所のみ円形の小突起を持つ。106は口縁部～胴部中段まで残存し、斜位の条線を施文する。

107は口縁直下に段を持ち、段の上に刻みを巡らせる。口縁部～胴部中段にかけて残存し、条線を施文せず、篋状工具による粗いナデ調整を残し

ている。

108～110は口縁肥厚して連続押圧を伴う隆帯を巡らせ、胴部中段にも押圧隆帯の区画を巡らせる土器である。地文条線は区画内では横位、区画から下は斜位に施文する。108は口縁～胴部中段まで残存する。109は底部を欠失する。110は口縁～胴上半部まで残存する。

111～123・126は胴上半部に文様帯を持つ土器である。

112・115は斜行沈線文である。112は口縁部～胴上半部まで残存する。口縁直下に半截竹管状工具の連続刺突を伴う隆帯を巡らせる。胴上半部に3～4本の沈線で三角形の区画を描く。115は口縁部～胴部中段まで残存する。刻みを伴う隆帯を口縁直下と胴部中段に巡らせて、内部に平行沈線の斜行文を配置する。地文条線は区画内では横位、それより下では斜位に施文している。

113・114・116は対弧文の土器である。連続押圧を伴う隆帯を口縁直下と胴部中段に巡らせて文様帯を区画する。いずれも対弧文を二つ一組で描いており、116のみ中間に垂線を挟んでいる。113は対弧文の間の条線を擦り消しており、114は対弧文の間にRL単節の縄文を施文する。いずれも地文条線は横位に施文する。113・114は口縁部～胴部中段まで、116は胴上半部まで残存する。

111・117は蛇行沈線文である。111は口縁部～胴上半部まで残存する。口縁直下に列点文と横位の沈線を巡らせ、縦位の平行沈線間に蛇行懸垂文を描いている。地文は粗い斜位の条線である。117は口縁部～胴上半部まで残存する。口縁下に連続押圧を伴う隆帯と横位の沈線を巡らせる。対弧文の間に2条の蛇行懸垂文を描く。

118～120は口縁部と胴部中段の隆帯が胴上半部に侵入する土器である。118は口縁部～胴下半部まで残存する。半截竹管状工具の刻みを持つ隆帯を口縁直下に巡らせた後、反転して胴上半部を横切り、逆Z字を描いて胴部の隆帯に接続し、末端

は全周せず下方へと屈曲して終わっている。地文条線は胴上半部では横位に、胴部中段では斜位に施文しており、胴下半部は無文となっている。

119は口縁部～胴上半部まで残存する。連続押圧の隆帯が口縁直下を巡って、末端が鉤状に垂れ下がっている。胴上半部には対弧文を描く。地文は条線である。

120は口縁部～胴上半部まで残存する。連続押圧の隆帯が口縁直下を巡った後、胴上半部の文様帯を斜めに横切っている。括弧状の沈線の中央に垂線を描き、横位の条線を地文とする。

121は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁直下に押し引き文と沈線を巡らせ、胴上半部では横位の沈線の下に押し引き文を巡らせている。太い平行沈線で弧線文を描く。条線は施文しない。

123は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下と胴部中段に半截竹管状工具の刻みを持つ隆帯を巡らせて文様帯を区画し、太い沈線により括弧状モチーフ＋蛇行沈線文、弧線文、X字文などを展開する。地文条線は横位に施文する。

122は口縁部に軽微な段を持つ以外、装飾を持たない。胴部中段に1条の沈線を巡らせる。胴上半部を中心に斜位の条線を施文するが粗雑で、胴部中段以下は無文となる。

124は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下に縄文を施文して横位の沈線で区画し、胴部中段にも帯縄文を巡らせる。地文は縦位の条線である。

126は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下と胴部中段に刻み隆帯を巡らせて文様帯を構成し、内部に擦り消し文様を描く。また、文様帯内部にも隆帯が侵入する。胴部の区画から下のみ斜位の条線をまばらに施文している。

127は口縁部に4単位の小突起を配する。口縁直下に1条の沈線を巡らせ、胴部中段には平行沈線を巡らせる。条線は縦位に施文している。

129～140は安行式の深鉢底部である。137がR

L単節の縄文を施文している他はすべて条線施文の土器である。139・140は底面に網代痕を残している。

141は無文の深鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。口唇断面肥厚して、口縁の内面に段を形成している。器面には匏状工具による粗いナデ調整を残している。

142～145は付付き鉢である。142は底面を欠く体部のみ残存する。胴部中段が「く」の字に張り、頸部で屈曲して口縁直立する。折り返し口縁で、外面に縄文を施文する。頸部の無文帯を挟んで胴部に帯縄文を重ねさせ、豚鼻突起を配する。胴下半部は無文帯を挟んで縄文帯となり、脚部へと接続するものとみられる。地文はL R単節の縄文である。安行3 a式であろう。143は胴下半部のみ残存する。無文で、1段の帯縄文が巡り、脚台部との境に平行沈線を巡らせる。地文はR L単節の縄文である。晩期前葉の土器である。144は胴下半部のみ残存する。無文で、下向きの弧線文を巡らせ、L R単節の縄文を充填する。脚台部との境に沈線を巡らせる。145は胴下半部～脚台部の一部が残存する。胴部に平行沈線を巡らせて一对の貼り瘤を配する。脚台の上部にも平行沈線を巡らせる。縄文は施文しない。後期末～晩期初頭で、東北系の土器の可能性がある。

146～156は浅鉢である。146は口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴部中段が「く」の字に張りだし、口縁強く内湾する。口端～屈曲部にかけて縦位の隆帯を貼り付け、左右に平行沈線による方形の区画を配して、R L単節の縄文を施文する。屈曲部から下には矢羽状の沈線を施文するものとみられる。曾谷式と考えた。147はボウル状の浅鉢で、口縁～胴下半部まで残存する。水平口縁上に鱗状の突起を配し、正面に刻みを持つ縦瘤を付す。口縁直下は縄文帯となり、胴上半部は連続する弧線文を描いて間隙に縄文を施文、胴下半部も縄文帯となる。安行2式であろう。148は小型の

浅鉢で、口縁部～胴部中段まで残存する。水平口縁上に鱗状の突起を配し、胴上半部は眼鏡状隆帯で突起間を弧状に連繋するものとみられる。胴下半部には平行沈線の弧状モチーフが巡り、R L単節の縄文を充填する。晩期前葉の土器である。149はボウル状の浅鉢で、口縁部～胴部中段まで残存する。口縁上に鱗状の突起を配し、口縁外面を縄文帯とする。胴上半部には上下一組の弧線文を入り組ませて縄文を充填した巴状の単位文が並ぶ。地文はR L単節の縄文である。150は扁平な浅鉢で、底面を欠失する。水平口縁で、口端上に小突起を持つ。胴上半部に上下を帯縄文で区画する文様帯を持ち、平行沈線の弧状モチーフを巡らせて、間隙を三叉文で埋めている。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式である。151は口縁～底面まで残存する。胴下半部に押圧を伴う隆帯を巡らせ、口縁直立して、口端上に鱗状の突起を配する。胴上半部および底面に三叉文を入り組ませた単位文を描いて縄文を充填する。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式であろう。152はボウル形の鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。形状の異なる2種類の突起を対向して配置するものとみられる。口縁下に矢羽状の短沈線を巡らせ、下端を横位の沈線で閉塞して、押圧を伴うボタン状の貼り付け文を配する。縄文は施文しない。安行3 c式であろう。

153～155は浅鉢の底部である。いずれも晩期前葉の土器とみられる。153・154は、胴下半部に対向弧線文を巡らせて縄文を充填する。底面にも縄文を施文して、胴部との境を沈線で区画する。地文はR L単節の縄文である。155は丸底で、周縁部に段を持つ。底面には2段の入り組み文を描いて、上下を沈線で区画する。地文はR L単節の縄文である。

156は楕円形の浅鉢である。長径側を波頂部とする2単位の波状口縁で、波頂部と波底部に小突起を配する。胴部に対向弧線文を巡らせて縄文を

充填し、底面は円文を中心に紡錘文を対向させる。地文はR L単節の縄文である。後期末～晩期初頭の土器であろう。

157は方口円底の壺ないし注口土器である。口端上に刻みを持ち、口縁直下に玉抱き三叉文を描く。胴上半部に入り組み文や三叉文を描いて縄文を充填し、文様帯下端を刻み隆帯で閉塞する。胴下半部は縄文帯となつて、上端を平行沈線で区画する。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式であろう。

158は円口方底土器である。4単位波状口縁で、波頂部に刻みを持つ突起を配する。口縁下には刻み隆帯の区画文を巡らせる。胴部にも同種の隆帯で文様を描いている。地文はR L単節の縄文である。安行2式であろう。

159～175は床面焼土層から出土した土器である。

159は大波状口縁の深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。口縁直下に帯縄文の三角形区画文を描いて豚鼻突起を配する。胴上半部には鋸歯文を描いて、間隙に渦文を配する。胴部中段には帯縄文を巡らせて、胴下半部には対向弧線文を描く。地文はR L単節の縄文である。安行3 a式であろう。

160は水平口縁の深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。口縁外反して口端上に小突起を配する。胴上半部には蛇行沈線文と横位の鋸歯文を描いて、縄文を施文する。地文はR L単節の縄文である。安行2式であろう。

161は水平口縁の深鉢である。口端上に4単位の小突起を配する。胴上半部に横V字の沈線文を描いて上下を沈線で区画し、胴下半部には縦位の条線を施文する。晩期前葉の土器であろう。

162～164は砲弾形の深鉢で、安行1式である。いずれも口縁部～胴上半部まで残存する。162・163は帯縄文を多段に巡らせて2段の縦帯を配する。164は1段の楕円形区画文を描いて、接点に

縦線を配する。地文はR L単線の縄文である。

165は砲弾形の深鉢か、注口土器である。口縁直下と胴部中段に刻みを持つ縦線を配し、幅広の凹線で連繫して三角形の区画文を構成する。縄文は施文しない。晩期前葉の土器であろう。

166～168は付付き鉢である。

166は体部である。口縁直下に刻みを持つ縦線一對を配して、鱗状突起で連繫し、帯縄文で楕円形区画文を描く。胴部中段には平行沈線の弧状モチーフを巡らせて、上下を帯縄文で区画する。地文はR L単線の縄文である。後期末～晩期初頭の土器であろう。167は胴部中段から脚台の一部が残存する。胴下半部に帯縄文が巡るほかは無文である。地文はR L単線の縄文である。晩期前葉の土器であろう。168は体部と脚台部の接続部分である。底面の脚台側に燃糸文を施文している。晩期中葉の土器であろうか。

169～171は浅鉢である。169は半球型の鉢である。水平口縁で、口端上に小突起を配する。胴部中段に粗雑な沈線文を巡らせる。縄文は施文しない。晩期中葉の土器であろう。170は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下に列点文を伴う平行沈線を巡らせる。縄文は施文しない。安行3c式であろう。171は胴下半部～底部にかけて残存する。丸底で、胴部との境に段を持つ。胴下半部に縄文帯を持ち、上端を沈線で区画する。地文はR L単線の縄文である。晩期前葉の土器である。

172～174は安行式に伴う粗製土器で、後期末～晩期前葉の土器である。172は口縁部～胴下半部にかけて残存する。口唇断面著しく肥厚して段をなし、段の下に押し引き文と1条の沈線を巡らせる。胴部中段には平行沈線と押し引き文の区画を持つ。斜位の粗い条線を地文とする。173・174は口縁部と胴部中段に連続押圧を伴う隆帯を巡らせる土器で、いずれも口縁部～胴部中段にかけて残存する。173は2個1単位の対弧文、174は平行沈

線の斜行文を描いている。横位の条線を地文とする。

175は無文の深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴上半部に最大径を持つ砲弾形の器形で、口唇断面肥厚する。器面に粗いナデ調整を残している。

第247～272図は破片資料である。

1は早期末葉の条痕文土器である。2は花積下層式で、燃糸側面圧痕による渦文を描く。3は異条羽状縄文の関山式である。4～6は羽状縄文の胴部で、花積下層式であろう。

7は半裁竹管文の諸磯a式である。8・9は諸磯b式の浮線文の土器である。10は隆帯に沿って半裁竹管状工具の平行沈線とキャタピラ文が巡る土器で、藤内Ⅱ～井戸尻Ⅰ式である。

11～20は加曾利E式である。11は頸部無文帯と胴部との境に平行沈線を巡らせ、胴部に平行沈線の懸垂文と蛇行懸垂文を描く。加曾利EⅡ式新段階～EⅢ式古段階の土器であろう。12は加曾利EⅢ式新段階で、口縁部の渦巻き文である。13・14は加曾利EⅢ式新段階～EⅣ式で、微隆起線文の土器である。15～19は擦り消し懸垂文を描く胴部で、加曾利EⅢ～Ⅳ式である。20は曾利系の無文口縁で、加曾利EⅡ～EⅢ式であろう。21は称名寺式終末期の土器であろう。縦位の沈線文の間隙にV字状のモチーフが描かれ、縄文・列点文は施文しない。

22～32は堀之内Ⅰ式である。口縁部には盲孔と短沈線の特徴とする文様を描く。22は貫通孔を持つ突起、23は頸部に刻み隆帯を垂下させる。24は口縁外面に段を持って、平行沈線+列点文を巡らせる。25は口端部に盲孔を巡らせる。27～30は地文縄文上に集合沈線文を描く新段階の土器である。

33～45は堀之内Ⅱ式である。平行沈線によるバネル状の擦り消し文様を描く。33～38は口縁部で、いずれも直線的に開いて口端部内屈する。33は口

縁外面に刻み2段の隆帯を巡らせ、内面にも刻み隆帯を持つ。34は外面のみ1段の隆帯を巡らせる。

39~44は胴部で、43はパネル状の区画内部を重畳文で埋めている。44は胴下半部に「く」の字の張り出しを持つ。45は浅鉢の胴下半部~底部で、扁平球状の胴部に無文の外反口縁を持つものであろう。底面には網代痕を残す。

46~49は加曾利B1式で、横帯文を多段構成化する新しい段階の土器である。46は深鉢、47以下は内湾口縁の浅鉢であろう。

50~55は加曾利B2式である。50は3単位波状口縁の深鉢で、胴部に弧線文を巡らせる。51は無文地に括弧状の沈線文を描く口縁部である。52は浅鉢で、内面に弧線文を巡らせて接点に括弧状のモチーフを配する。

53・54は所謂ソノバン玉状の鉢だが、53は球胴状となる。平行沈線・刻みの区画を挟んで、口縁側に盲孔を起点とする弧線文、胴部には矢羽状の沈線文を描く。55は斜行沈線文の土器で、いわゆる遠部第二類である。56は加曾利B3式に特徴的な波状口縁の深鉢である。

57~81は曾谷・高井東式である。

57~60は波状口縁で、口縁外面に押し引き文と帯縄文を巡らせる土器である。波頂部・波底部を中心に貼り瘤を持つ。56に類似の60は加曾利B3式に遡る可能性があるが、押し引き文を巡らせる口縁部を新しい特徴と考えた。61・62はこれに類似の水平口縁の土器、63は瓢形土器胴下半部で、安行1式の可能性もある。

64~71は波状口縁の深鉢で、口縁直下に各種の文様帯が集約される。64・65は山形波状口縁で、64は貼り瘤が上下対をなす。66~71は口縁外面に隆帯・沈線の区画を巡らせる土器で、波頂部・波底部に貼り瘤を配する。

72~81は水平口縁で、口縁外面に多段の平行沈線を巡らせて縄文を施文し、貼り瘤や突起を配する。73~78は頸部との境が「く」の字に張り出す

キリバー形の深鉢である。72は加曾利B2式以来の器形で、時期が遡る可能性がある。79は唯一口縁内傾する。

82~86は口縁と頸部の境に屈曲を持つ無文・縄文施文の土器で、曾谷式に伴うものと考えた。

87~102は加曾利B・曾谷式に伴う粗製・半粗製の土器である。87・88は地文縄文上に格子目文を描く遠部第四類である。89・90は広口壺形で押圧隆帯の文様を描く遠部第三類、91・95もこれに類似の器形である。

91・92・94・96~100は外反口縁で押圧隆帯を巡らせ、地文縄文上に条線を描く遠部第一類。101・102は縄文のみの深鉢である。

103~136は安行式の大波状口縁深鉢である。

103~108は安行1式で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせて縦瘤を配する。109~123は刻み隆帯で三角形区画文を描く安行2式で、刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起を配する。

124は帯縄文の区画で豚鼻突起を配する安行3a~3b式。134~136は姥山系の文様を描く安行3b式である。

137~150・161は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、縦瘤を配する。144~149は区画が多段化する。口端に押圧を持つ147は付台鉢の可能性もある。

187~192は水平口縁の深鉢で、口端上に鰭状の突起を配し、口縁外面に刻みを持つ縦瘤や豚鼻突起を配するもので、安行2~3a式である。187は刻み隆帯の安行2式である。189~191は突起と貼り瘤が対をなしている。

151~160・162~185・193・194・281・282は安行式の砲弾形深鉢である。胴上半部に最大径を持って口縁内湾し、口唇断面肥厚する。口縁外面に帯縄文で多段の区画を構成し、貼り瘤を配する。

151~160・162~165は縦瘤や円形の瘤を配する安行1式である。刻みを持つ縦瘤や豚鼻突起を配する166~175は安行2~3b式であろう。176・

177は胴上半部に蛇山系の文様を描いており、安行3b式と考えられる。193・194は口端上に鱗状突起を配する土器で、注口土器の可能性もある。

195は縦位の蛇行沈線を中心に擦り消し文様を描く土器で、安行2式である。196～241は擦り消し縄文を描く水平口縁深鉢である。安行2～3b式の各時期のものが含まれる。

蛇行沈線文と半円文や横位の紡錘文が複合する208・216、219・220・223・226などは安行2式、三叉文の198・199は同3a式、波頭文や入り組み文の203・207などは同3b式と考えられる。縄文を施文しない242～244は安行3b式かそれ以降の可能性もある。

245～258は後期安行式の瓢形深鉢で、247～250は曾谷式に遡る可能性もある。

245・246・251～258は口縁外面に帯縄文の区画を持ち、押し引き文を巡らせる。245・246は貼り瘤を配する。247～249は胴上半部に幅広の縄文帯を持つ。

259～269は安行式の精製深鉢胴部である。259～262は波状口縁深鉢に属するもので、擦り消し文様を描いて豚鼻突起を配する。安行2～3式であろう。263は胴部中段に擦り消し文様を描き、胴下半部には斜位の条線を施文する。264は砲弾形の深鉢で、胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を巡らせ、豚鼻突起を配する。

265～269は後期安行式の瓢型深鉢である。胴部中段にくびれを持って押し引き文を巡らせる。266は対向弧線文、267・268は棒状の入り組み文を描く。

270～280・283は台付き鉢で、大半が後期安行式であろう。270・271は外反口縁で、縦位の条線を施文する。272も外反口縁で、帯縄文の区画を重畳させる。273～275・278は安行2式で、刻み隆帯を巡らせて豚鼻突起を配する。

276・277・283は晩期前葉の土器で、277は入り組み文を描く安行3b式であろう。279・280は脚

台部で、280は円孔を穿つ。

284～301は鉢ないし浅鉢である。284～286は波状口縁の土器で、台付き鉢の可能性もある。284は刻み隆帯の安行2式、285は三叉文を描く安行3a式、286も後期末～晩期初頭の土器であろう。

287～292は水平口縁上に突起を付す。292は安行2式、287は安行3a式、他も後期末～晩期初頭の土器であろう。

294・295・297・298は胴部中段が「く」の字に張り出し、押圧隆帯を巡らせる。晩期前葉の土器である。

300・301は浅鉢胴下半部～底部で、底部周縁に段を持ち、沈線を巡らせる。300は底面に十字形の擦り消し文様を描く。

302は壺形土器の口縁部と考えたが、注口土器の可能性もある。球状の胴部～頸部の屈曲を経て直線的に立ち上がる口縁で、帯縄文を巡らせる。晩期前葉の土器である。

303～311は注口土器である。刻み隆帯で複雑なモチーフを描く303～307は安行2式である。三叉文の308は同3a式、他は晩期前葉の土器であろう。

312～477は安行式の粗製深鉢である。

312・313は口縁に装飾を持たず、条線のみ施文している。314～321は口縁外面に刻みや押し引き文を巡らせる。縄文を施文せず口縁内湾する321は晩期、他は後期安行式に伴うものとみられる。

322～353は刻み・押し引き+沈線文の区画を巡らせる土器である。354～392は連続押圧の隆帯を巡らせる。393～397は折り返し口縁の土器で、口縁外面の段の上に押し引き文や列点文を巡らせる。398～408は折り返し口縁で、段の下に押し引き+沈線文を巡らせる。

409以下は胴上半部に文様帯を持つ。409～416は平行沈線による斜行文である。417～440は弧状の沈線で、対弧文や紡錘文を描き、しばしば沈線間を磨いて地文条線を擦り消している。

441~450は蛇行沈線文の土器である。しばしば平行沈線文や対弧文など他のモチーフと組み合わせて用いられる。451~457は押王隆帯で文様を描く土器である。

458~463は縄文を施文する土器である。458・459は胴上半部に擦り消し文様を描く。450以下は口縁外面に帯縄文を巡らせる。464~469は米粒状の列点文を施文する土器である。470~476は口縁外面に沈線を巡らせる。

478~509は無文土器である。498~509は製塩土器であろう。薄手の器壁で、甕状工具の粗い調整がなされ、被熱の痕跡が残る。

口唇断面には498~501・503・504・508など甕で水平に切り落としたような角頭棒状のもの、これに似て内削ぎ・外削ぎ状となる505・507、やや肥厚して丸みを帯びた496・497、指先でつまんだように先細りとなる502など、いくつかのバリエーションが存在する。

509は例外的に器壁が厚いが、胎土や器面の状態が近いところに含めた。口縁外面のナデ調整により口端が内側にめくれる独特の形状を持つ。

510は無文の深鉢底部で、底面に網代痕を残す。

511~685は床面焼土上層出土の土器である。

511~513は堀之内2式である。直線的に外反しつづく朝顔形の深鉢で、口端内屈する。擦り消し縄文により胴上半部にパネル文を描く。511は口縁外面に刻み隆帯を巡らせる。514・515は加曾利B3式の波状口縁深鉢である。

516~520は加曾利B・曾谷式の粗製土器である。516・517は遠部第一類、518・519は地文縄文上に条線を施文し口端内面に凹線を巡らせる。520は櫛歯状工具の条線を施文する。

521~535は安行式の大波状口縁深鉢である。521・522は安行1式、523~528は安行2式である。529~533は安行3a式、534・535は安行3b式であろう。

536~554は安行式の水平口縁深鉢である。536

~541は帯縄文の区画を巡らせるもので、537・538は安行1式、539・540は安行3a式である。541は安行2式で、台付き鉢の可能性はある。

542~552は擦り消し縄文で紡錘形や半円形のモチーフを描くもので、安行2~3a式であろう。553は胴上半部に幅広い縄文帯を持つもので、瓢形深鉢の可能性はある。時期は安行2~3a式と考えた。554は口端上に小突起を配し、口縁直下に縄文帯を巡らせる。晩期前葉の土器で、浅鉢の可能性はある。

555~580は安行式の砲弾形深鉢である。555~575は口縁外面に帯縄文の区画を巡らせる。

555~563は縦瘤を配する安行1式、564~570は刻みを持つ縦瘤や豚鼻突起を配する土器で、安行2~3a式であろう。576~579は擦り消し縄文を描く晩期前葉の土器である。578・579は連続弧線文を巡らせており、安行3b~3c式と考えられる。580は口縁外面に押し引き文を巡らせており、瓢形深鉢の可能性はある。

581はこれらの精製深鉢に伴う胴部で、晩期安行式である。582は外反口縁の深鉢で、三叉文を描く安行3a式である。

583・584は安行2式の台付き鉢である。

585~587は晩期安行式の鉢および浅鉢である。585・587は胴部中段が張り出す鉢で、587は眼鏡状の隆帯を巡らせる。586は浅鉢で、水平口縁上に貫通孔と内文を持つ突起を配し、胴部に三叉文を描く安行3a式である。

588~592は注口土器である。591は安行2式、他は安行3a式と考えられる。588は注口部で、豚鼻突起を起点に帯縄文を巡らせ、胴下半部に斜位の条線を描く。592は貫通孔を持つ口縁部で、胴上半部に平行沈線の鋸歯文を描いて縄文を充填する。

593は東北地方後期後葉の新地式で、入り組み文に刻み目文を充填する。594は西日本の滋賀里式の浅鉢である。

595~664は安行式に伴う粗製深鉢である。595~601は口縁外面に沈線~平行沈線の区画を巡らせる。602は口縁と胴部中段に押し引き文を巡らせている。603~606は押し引き+沈線文の区画を巡らせる。606は胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を持つ。

607~610は口縁外面に段を持って刻みを巡らせる。611~614は連続押圧を伴う隆帯を巡らせる土器で、615~618は隆帯が剥離しているが同種の土器とみられる。619・620は口縁外面に段を持ち、619は段の下、620は段の上に押し引き文を巡らせる。

621~661は胴上半部に文様帯を持つ土器である。621~623は平行沈線の斜行文、624~642は弧線文の土器で、627~629の紡錘文や630~635の対弧文などのバリエーションを持つ。

643~651は縦位の蛇行沈線文を描くもので、対弧文や紡錘文などと複合的に用いている。652・653は列点文で、やはり紡錘文・対弧文との組み合わせである。655・656は押圧隆帯で文様を描く。

656~661は縄文施文の土器である。656・657・660は胴上半部に擦り消し文様を描く。656・657は斜行文、660は紡錘文の外側を縄文で埋めることでネガ的に浮き立たせている。658・659・661は口縁外面に縄文を施文する。658・659は縄文帯の下を幅広の沈線で区画して紡錘文を描く。661は縄文帯に沿って押し引き文を巡らせている。

662~664は口縁外面に装飾を施さない。662は口縁上に半円形の突起を配する。

665~685は無文土器である。665~675は内湾口縁で、670~673・676は口唇断面肥厚して口縁内面に段を形成する。677は外屈する口縁である。

678~685は製塩土器である。口端部の処理は、678~682は寛で水平に切り落とすように角頭棒状になり、683~685は外削ぎ状となっている。

686~729は床面を構築した焼土内部から出土した土器である。

686~688は早期末葉の条痕文土器である。689は0段多条の縄文で深い角度の羽状縄文を施文する土器で、早期末葉~前期初頭の土器であろう。690はなぞりを加えた隆帯で文様を描く加曾利EⅢ式、691・692は称名寺式であろう。

693は堀之内1式の鉢で、無文外反する頸部と丸く張り出す胴部の接点である。694・695は堀之内2式の精製深鉢で、胴部のパネル文の一部である。696は堀之内式に伴う粗製土器であろう。

697~699は加曾利B1式で、697・698は深鉢、699は球胴の注口土器である。700は加曾利B2式のソロバン玉状の鉢、701は加曾利B3式で刻みの巡る口縁部である。702~704は加曾利B2~3式の粗製土器で、地文縄文上に条線を描く。705はやはり加曾利B式に伴う粗製深鉢である。縄文のみの口縁部で、口端内面に凹線を巡らせる。

706~716は安行式である。安行1式を主体に、ごく少量の同2式を含むものとみられる。

706は安行2式の精製深鉢で、蛇行沈線文を挟んで擦り消し文様を展開させる。707~712は瓢型深鉢で、707の口縁部は曾谷式に遡る可能性がある。713・714は精製土器の胴下半部である。

715・716は台付き鉢である。715は胴部中段の区画で、刻み隆帯に円形の貼り瘤を配する。716は円孔を穿つ脚台部である。

717~719は安行式の粗製深鉢で、719のみ晩期の土器である。720~727は条線を施文する胴部で、粗い縄文を持つ720は加曾利B3~曾谷式、他は安行式の粗製土器である。728は無文の口縁部で、後期の土器か。729は縄文施文の胴下半部である。
第44号住居跡出土土器 (第210図176~第220図278、第272~289図)

第210図176は加曾利B3式で、小型精製の深鉢である。口縁部~胴部中段にかけて残存する。4単位の大波状口縁で、波底部にも小突起を配する。口縁外面に刻みを持って、平行沈線を巡らせる。頸部は「く」の字にくり抜いて刻みを持ち、胴部に

は入り組み文を描く。地文はR L単節の縄文である。

177～188は曾谷・高井東式である。

177～179は大波状口縁の深鉢である。

177は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁直下に平行沈線を巡らせて縄文を施文し、波頂部と波底部に貼り付け文を配する。胴部には斜位の条線を施文する。

178は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁部に隆帯による区画を巡らせる。波底部に縦瘤を配し、波頂部にも大型の突起を配するものと思われる。胴部には稲妻状の沈線を描く。

179は小型の深鉢で、胴下半部が欠失する。4単位の波状口縁で、波頂部に二又の突起を配する。粗雑な集合沈線で器面を横位に分帯する。

180～188は水平口縁の深鉢である。

180は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁部に刺突を伴う隆帯で区画を構成し、区画の接点に半円形の突起を配する。

181はキャリバー形の深鉢で、口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下に平行沈線を巡らせて縄文を施文し、円形の貼り付け文を配する。胴部には矢羽状の集合沈線を多段に施文する。

182もキャリバー形の深鉢で、口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外面が「く」の字に屈曲して幅広の凹線を2段に巡らせ、刺突を伴う円形貼り付け文を配する。

183は口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴部中段に幅広の蛇行文を持ち、口縁内湾しつつ立ち上がる。口縁外面に3本の沈線を巡らせ、鱗状の小突起を貼り付ける。184もこれに類似の器形で、口縁直下に1条の沈線を巡らせ、円形の貼り付け文を配する。

185～187は口縁直下に平行沈線を巡らせ、縦瘤を配する土器である。185は砲弾形の小型深鉢で、底部が欠失する。186は内湾口縁で、胴部中段まで残存する。187は直線的に開く口縁部で、胴下

半部が欠失する。

188は無文のキャリバー形深鉢である。胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁は「く」の字に屈曲する。

189は安行3 a 式の大波状口縁深鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴上半部に帯縄文の三角形区画文を描いて豚鼻突起を配する。胴部中段には1段の帯縄文を巡らせ、胴下半部には粗雑な斜位の条線を施文する。地文はL R単節の縄文である。

190・191は縦瘤を持つ水平口縁深鉢で、安行1式である。190は口縁部～胴上半部にかけて残存する。帯縄文で多段の区画を構成し、2段の縦瘤を配する。地文はR L単節の縄文である。

191は胴部中段まで残存する。帯縄文による1段の区画に縦瘤を配する。胴上半部には弧線文を巡らせて半円形の擦り消し文様を描く。胴部中段には平行沈線文と押し引き文の区画を持ち、胴下半部には対向弧線文を巡らせる。地文はR L単節の縄文である。

192・193は擦り消し文様を描く水平口縁深鉢である。いずれも口端上に対をなす小突起を配する。

192は口縁部～胴部中段まで残存する。胴上半部に波頭状の入り組み文を描いてR L単節の縄文を充填する。胴部中段には平行沈線と押し引き文の区画を巡らせ、胴下半部には斜位の条線を施文する。安行3 a 式であろう。

193は口縁部～胴下半部まで残存する。胴上半部に幅広の蛇行文を描き、横位の沈線で文様帯下端を閉塞する。胴下半部は縄文帯となる。地文はR L単節の縄文である。安行2式であろう。

194～196は砲弾形の深鉢である。胴上半部に帯縄文で多段の区画を構成する。

194は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁直下に円形の貼り瘤を配する。地文はR L単節の縄文である。195は口縁部～胴上半部にかけて残存する。地文はR L単節の縄文である。

196は3段の帯縄文と対弧状の沈線で2段の楕円形区画を構成し、刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起を重畳させる。胴部中段以下には斜位の粗い条線を施文する。地文はR L単節の縄文である。安行2式であろう。

197～203は瓢形深鉢で、大半が曾谷～安行1式とみられる。

197は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外面に段を持って、押し引き文と1条の沈線を巡らせ、円孔を穿つ。胴上半部は縄文帯となる。胴部中段には沈線+押し引き文の区画を持ち、胴下半部には対向弧線文を描く。地文はR L単節の縄文である。198も同様の文様構成だが、口縁に段を持たない。

199は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外面に帯縄文の区画を持ち、胴上半部には櫛状の入り組み文を描く。地文はR L単節の縄文である。

200は口縁部～胴下半部にかけて残存する。沈線+押し引き文の区画を口縁部と胴部中段に巡らせ、胴上半部と胴下半部に櫛状入り組み文を描く。地文はL R単節の縄文である。

201は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外面に段を持って押し引き文を巡らせ、胴上半部には多段の横帯文を描いている。地文はR L単節の縄文である。

202・203は胴下半部～底部にかけて残存する。上下に間延びした対向弧線文を描いて縄文を充填する。底部付近は縄文帯となり、上端を横位の沈線で区画する。

204～209は安行式の精製深鉢胴部である。

204は胴部中段～胴下半部まで残存する。平行沈線の区画を巡らせて豚鼻突起を配し、連続弧線文を描く。底部周辺は縄文帯となる。地文はL R単節の縄文である。安行3 a式であろう。

205は胴部中段～胴下半部まで残存する。胴部中段に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせ、胴下半

部には半円形の擦り消し文様を描く。地文はR L単節の縄文である。

206は「く」の字に屈曲する胴下半部である。帯縄文と半円形の擦り消し文様を描く。底部付近には斜位の条線を施文し、上端を横位の沈線で区画する。

207は胴部中段～下半部にかけて残存する。胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を持ち、カーブの緩やかな対向弧線文を施文する。地文はR L単節の縄文である。

208・209は胴下半部で、やはり対向弧線文を描き、R L単節の縄文を施文する。

210～213はこれら深鉢に伴うとみられる底部である。210は条線、他は縄文を施文する。212はL R単節の縄文で、底部周辺に研磨を施す。211・213はR L単節の縄文である。

214～217は安行式に伴うとみられるその他の深鉢を一括した。214は水平口縁の深鉢である。頸部に平行沈線を巡らせ、斜位の粗い条線を施文する。215は細密沈線文の深鉢である。砲弾形の器形で、上下を平行沈線で区画した中に上下2段の幾何学文様を描き、細密沈線を充填する。安行3 b式であろう。

216は口縁部～胴下半部にかけて残存する。内湾しつつ立ち上がる単調な器形で、口縁外面に平行沈線+刺突の区画を巡らせ、胴部は無文で縦位の研磨を施している。

217は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁直下に1条の沈線を巡らせて平行沈線の鑑歯文を描き、横位の平行沈線で文様帯下端を閉塞している。胴部は無文である。

218～224は台付き鉢である。

218・219は口縁外反し、縦位の集合沈線を施文する土器で、安行1式である。218は口縁部～胴上半部にかけて残存する。胴部との境を横位の沈線で区画している。219は口縁部のみ残存する。

220は口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴

上半部の文様帯は上下を帯縄文で区画して豚鼻突起を配し、半円形モチーフを上下対向させて、ネガ部分に縄文を施文している。胴下半部には横位の条線を施文する。地文はRL単節の縄文である。安行2～3a式であろう。

221は口縁部～胴部中段まで残存する。帯縄文で多段の区画を構成し、対をなす縦線を配する。地文はRL単節の縄文である。安行1式であろう。

222は体部と脚台部の接続部分である。RL単節の縄文を施文し、脚台部に円孔を穿つ。後期安行式であろう。

223・224は無文の脚台部で、224は接地面に網代痕を残している。晩期安行式と思われる。

225～236は浅鉢である。

225は口縁部～胴下半部まで残存する。内湾口縁で胴が丸く張る。口縁直下に平行沈線を巡らせて、胴上半部に縄文を施文し、下端を横位の沈線で区画して、胴下半部は無文となる。地文はRL単節の縄文である。加曾利B3式である。

226は口縁部～胴下半部まで残存する。頸部が「く」の字に屈曲して、口縁直立し、外面に多段の平行沈線を巡らせる。胴部にはRL単節の縄文を施文する。加曾利B3式でない曾谷式であろう。

227は口縁部～胴下半部まで残存する。胴部は直線的に開いて、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁直立する。口唇断面肥厚して内削ぎ状となり、外面にRL単節の縄文を施文して3条の平行沈線を巡らせる。曾谷式である。

228は碗型の鉢で、口縁部～底部まで残存する。口縁直下に3条の平行沈線を巡らせて縦線を配し、胴部との境を微隆起線で区画する。高井東式である。

229・230・232は口縁部に2段の帯縄文を巡らせる土器で、曾谷～安行1式であろう。地文はいずれもRL単節の縄文である。

231は底部付近のみ残存する。底部直上に段を持ち、2条の刻み隆帯を巡らせて、豚鼻突起を配

する。安行2式である。

233は半球型の鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。上面に円文を描く小突起を口端上に配する。口縁外面には帯縄文で楕円形の区画を構成し、接点に刻みを持つ縦線と豚鼻突起を配する。胴部中段に帯縄文の区画を巡らせて、胴下半部に斜位の条線を施文する。地文はRL単節の縄文である。安行3a式であろう。

234は多角形の鉢である。6単位の山形波状口縁をなすものとみられ、波頂部に刻みを施す。丸底で底面周縁に段を持ち、胴部には波状文を描いて、RL単節の縄文を施文する。

235は無文の浅鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存し、口唇断面は肥厚して内削ぎ状となる。

236は底部～胴部中段にかけて残存する。胴部との境に帯縄文を巡らせるほかは無文である。地文はRL単節の縄文である。

237は壺の口縁部～頸部である。やや内傾する筒状の頸部で、3段の帯縄文を巡らせ、円形の貼り瘤を多段に配しており、新地式の影響が伺われる。地文はRL単節の縄文である。

238～253は安行式および先行する時期の粗製深鉢である。

238は口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁は直線的に開いて、口唇断面肥厚する。口縁直下に押し引き文を巡らせ、胴部中段に平行沈線の区画を持って、区画の上下に斜位の条線を施文する。239も類似の文様構成だが、口縁やや内湾しつつ立ち上がる。

240～247は口縁直下に押し引き文・沈線を巡らせ、胴部中段に平行沈線・押し引き文の区画を持つ土器で、上下連続した条線を地文とする。いずれも口縁内湾して、口唇断面肥厚する。243は口縁の区画の下にさらに1条の沈線を巡らせる。244は胴部の区画が単沈線・押し引き文となっており、下端開放している。246は口唇外面に段を

持ち、段の下に押し引き文・沈線を巡らせている。247は胴上半部に平行沈線による対弧状のモチーフを描いている。

248～253は口縁部と胴中段に押し隆帯の区画を巡らせる土器である。

248・249は外反口縁の土器で、いずれも口縁部～胴中段にかけて残存する。249はL R単節の非常に粗い縄文を施文した後、胴上半部では横方向、胴下半部では斜め方向の条線を施文している。また、胴上半部には縦位の平行沈線文を描いている。加曾利B 3式であろう。248はこれに類似するが、地文縄文を持たず、条線を上下一統きに施文しているなど新しい要素がみられ、曾谷式ないし安行1式と考えられる。

250～253は内湾口縁で口唇断面著しく肥厚する。後期末～晩期初頭に属する土器であろう。252は胴上半部にも押し隆帯が侵入する。253は平行沈線による対弧モチーフを描いて、末端に扁平な豚鼻突起を配している。

254・255は無文の深鉢である。254は口縁部～胴中段にかけて残存する。口端内屈し、口縁直下に「く」の字の屈曲を持つ。曾谷式であろうか。255は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁内湾して口唇断面肥厚する。晩期安行式に伴うものか。

256～277は深鉢底部である。地文縄文上に条線を描く256は加曾利B式ないし曾谷式、無文で裾の張り出す273～277は堀之内～加曾利B式、266～270なども加曾利B式の可能性がある。他は安行式に伴うものであろう。277は網代痕を篋状工具の先端で擦り消した痕跡を残している。

278は床面焼土上層から出土した土器である。砲弾形の精製深鉢で、口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁外面に帯縄文と対弧状沈線で楕円形の区画を構成し、刻みを持つ縦瘤と豚鼻突起を配する。地文はR L単節の縄文である。胴部には斜位の条線を施文する。安行2～3 a式であろう。

第272～289図は破片資料である。

1・2は早期末葉の条痕文土器である。1は口端に押圧を持ち、表裏に貝殻条痕を施文する。2は表面のみ浅い圧痕を持つ。

3～11は前期初頭～前葉の羽状縄文土器である。3～6は花積下層式の口縁部である。3は撚糸側面圧痕で直線的なモチーフを描き、間隙に鋭利な刺切文等を間隔に施す。

4・5は折り返し口縁で、4は斜行沈線で鋸歯状のモチーフを描き、5は地文縄文上に円形の押圧が並ぶ。6は無節縄文の口縁部で、黒浜式であろう。7～11は胴部破片である。8は黒浜式、他は花積下層式か。

12・13は諸磯b式で、12は半裁竹管状工具の平行沈線文、13は浮線文の口縁部である。

14は加曾利EⅢ式で、擦り消し縄文の逆U字モチーフである。15は加曾利EⅢ式ないしIV式で、なぞりを加えた微隆起線文である。16～19は称名寺式で、19は列点文の土器、他は直線的な擦り消し縄文である。

20～24は堀之内1式である。20・21は口縁外面に段を持ち、盲孔・沈線の文様を描く。22は直線的な擦り消し縄文、23は薄手の器壁で、口端上に沈線を巡らせる。24は地文縄文上に粗い平行沈線で幾何文を描く。25・26は無文地に櫛歯状工具の条線を描く。

27～32は堀之内2式の精製深鉢口縁部である。胴上半部にバネル状の擦り消し文様を描く。27～30は外面に刻み隆帯を巡らせる。

33～36は加曾利B 1式である。33・34は横帯文の精製深鉢、35は浅鉢であろう。36は球胴の注口土器である。37～42は加曾利B 2式で、37～39は深鉢、40以下は頸部が「く」の字に張り出す浅鉢である。

43～54は加曾利B 3式である。43～46・50は波状口縁の深鉢で、50は斜行沈線、他は縄文を地文とする。46は口唇部が幅広い無文帯となって外屈

する。47は水平口縁の深鉢、48・49は瓢型深鉢の口縁部、51は胴部であろう。

52～54は丸底の浅鉢である。口縁外面に平行沈線を巡らせ、胴上半部に縄文を施文して、下端を沈線で閉塞する。胴中段は無文帯で、胴下半部も縄文帯となるものと思われる。

55～89は加曾利B式に伴う粗製～半粗製土器である。55・56は紐線文の下に横帯文を描く加曾利B1式である。

57～62は加曾利B2式であろう。57は胴部がZ字に屈曲して、口縁部に縄文、胴下半部に横位の条線を描く。58は胴下半部に矢羽状沈線を巡らせる。60～62は格子目文の遠部第四類である。

63～84は加曾利B2～B3式で、曾谷式期のものを含む可能性がある。63～70は条線地文の土器で、ごく浅い縄文があらわれる。66は半裁竹管状工具の条線である。

71～80・82は紐線文+条線の遠部第一類である。81・84は広口壺形の遠部第三類であろう。83は口縁に刻み隆帯を巡らせ、櫛歯状工具による縦位の条線を施文する。85～89は縄文のみの口縁部である。

90～147は曾谷・高井東式である。90～92は大波状口縁深鉢で、波頂部に各種の突起を配する。103はこれに伴う胴上半部で、稲妻状の沈線を描く。

93～102は山形波状口縁である。口縁外面に平行沈線文を巡らせて、波頂部に刺突を伴う貼り付け文を配する。104～110はこれに対応する波底部で、逆U字状や鱗状の貼り付け文を配する。111～113もこれらの波状口縁の一部である。

114～147は水平口縁深鉢である。口縁部付近に圧縮された文様帯を持つが、無文のものでも口縁直下に屈曲を持つ。

口縁部の文様には、115～117・121・134・135の平行沈線文や114・118・119・123・127～129のような多条沈線文が存在し、さらに、これらの沈

線文に加えて縄文を施文するものや、124・125・130のように単に縄文を施文するもの、115・118・124のように貼り付け文を伴うものなど、多くのバリエーションを生んでいる。

また、口縁無文のものの中にも137～138・147のように鋭利な工具による斜行/矢羽状沈線文を描くものや、145のように横位の条線を施文するものが存在している。

なお、114は加曾利B2式以来の器形だが、多段の平行沈線+縄文を巡らせて縦長の貼り付け文を配する。

148～176は安行式の大波状口縁深鉢である。

148～164は安行1式である。148～152は山形波状口縁で、口縁外面に帯縄文による1段の区画を巡らせる。波頂部及び波底部には縦瘤を配する。150は胴部に斜位の集合沈線を施文する。153～158は区画と縦瘤が多段化する。157・158は波頂部に突起を配し、158は円孔を穿つ。

159～163はこれらに対応する波底部で、区画文は多段化する。159・160は胴部に集合沈線を施文する。164は胴上半部で、多段化する区画文と胴部の綾杉状の集合沈線文を見ることが出来る。

165～173は安行2式である。波状口縁の波頂部に刻みを持つ縦瘤を配し、胴部には刻み隆帯で三角形区画文を描いて、隆帯の接点に豚鼻突起を配する。170・171は胴部中段に縄文帯を持つ。172は胴部を刻み隆帯で多段に分帯し、綾杉状の集合沈線を施文する。

174は安行3a式であろう。帯縄文で三角形区画文を構成して豚鼻突起を配し、胴部に綾杉状の集合沈線を施文する。

175・176は波状口縁の一部で、帯縄文の区画が多段化する安行1式であろう。

177～258は安行式の水平口縁深鉢である。

177～204は口縁外面に帯縄文の区画文と縦瘤を持つもので、安行1式である。

177～198は区画が1段のものである。一部曾谷

式に廻るものを含んでいる可能性がある。178・179は縦瘤から口縁上に小突起が立ち上がる。胴上半部には弧線文の内部に縄文を充填した半円形の擦り消しモチーフを巡らせている。199～202は区画と縦瘤が多段化するものである。

203・204は刻み隆帯の区画を巡らせて円形の貼り瘤を配するもので、やはり安行1式である。203は3段の区画を巡らせる。204は1段の区画に2個の貼り瘤が重畳する。

205～215は刻みを持つ貼り瘤や豚鼻突起を配する土器で、安行2～3a式である。205・207～209は口端上に蜂状突起を配し、206・211は上面に円文を描く小突起を配する。212は胴上半部に帯縄文の三角形区画文をしているが、これは波状口縁の土器に由来するものである。213は弧状の沈線によって簡略に表現した区画文である。

237～253はこれらの土器に伴うもので、帯縄文の区画を持つ口縁部である。後期後葉～晩期前葉の各時期のものが含まれているものと思われる。

216～217は蛇行沈線文を描く安行2式である。横位の紡錘文や半円形モチーフを描く220・227～230も同時期のものであろう。

太い沈線で入り組み文を展開する218・225・233～235は安行3a式で、東北地方の土器の流れをくむ晩期初頭の土器である。波頭文を描く221は安行3b式と考えられる。

口縁外反して帯縄文で器面を分帯し、頸部に横位の集合沈線を施文する257は安行1式で、台付き鉢の可能性もある。258も同時期で、浅鉢ないし台付き鉢の可能性もある。

259～280は砲弾形の深鉢である。259～270は縦瘤を持つ安行1式である。250・260は口端上に半円形の突起を配する。263は区画文が多段化し、269・270はそれに伴って縦瘤を重畳する。264・266は胴部に斜位の条線を施文する。267は横一対の縦瘤を配する。271は豚鼻突起を配する口縁部

で、後期末～晩期初頭の土器であらう。

281～312は瓢型深鉢で、安行1式を中心に一部前後の時期を含むものと思われる。

281～286・290は口縁外面に押し引き+沈線文の区画を巡らせる土器で、曾谷式期の土器を含む可能性がある。胴上半部は縄文帯となるが、284は棒状の入り組み文を描いている。

287～289・291～307は口縁外面に帯縄文+押し引き文を巡らせる。287～293は胴上半部に棒状の入り組み文を描く。295は区画から若干の無文帯をはさんで縄文を施文している。また、294・295は口縁直下に円孔を穿つ。

308は口縁外面に刻み隆帯を巡らせ、胴上半部に横位の紡錘文を描く土器で、安行2式とみられる。309以下は胴部で、309・310は対向弧線文を巡らせる胴下半部、311・312は胴部中段のくびれ部分で、押し引き文+沈線文の区画を巡らせる。

313は安行2式の深鉢胴部中段とみられ、胴下半部との境に段を持つ。315は台付き鉢の胴部で、やはり安行2式であらう。314・316・317・343・344は注口土器で、安行2式であらう。

319～339は後期安行式の台付き鉢である。319～326は外反口縁で、口端に刻みを巡らせ、縦位の条線を施文する。319は刻み隆帯に扁平な貼り瘤を配する安行1式である。327・328はこれに伴う胴部で、Z字形に屈曲する。胴部中段には無文帯、胴下半部は弧状の条線を施文し、境界に沈線+押し引き文を巡らせる。

329～335は区画文を描く口縁部である。329・330・332は安行1式、331・333～335は安行2式であらう。336は三叉文を描く口縁部で、安行3a式である。337～339は脚台部で、後期安行式であらう。

340～342は浅鉢であらう。340は口端部に半円形の突起を配し、胴部に弧線文を描く。安行2～3a式か。341は口縁外面に平行沈線+刺突文を巡らせる。安行3b～3c式であらう。342は無

文で、口縁外面に凹線を巡らせる。安行1式か、曾谷式の可能性もある。

345～347は異系統の土器である。345は大洞C2式で、注口土器ないし壺であろう。346・347は東北地方後期後葉の瘤付き土器である。

348～487は安行式の粗製深鉢である。

348～350は口縁部の装飾を持たない土器である。内湾口縁で横位の弧状条線の349は安行3b～3c式に伴うものであろう。351～354は口縁外面に沈線を巡らせる。

355～377は押し引き文や刻みを巡らせる口縁部である。口縁外反ないし直立する355～372は安行1式に伴うものであろう。378～422は押し引き文や刻みに加えて沈線を巡らせる。391・400・409・410・418・421の胴部中段には平行沈線+押し引き文・刻みの区画を巡らせている。

423～449は連続押圧を伴う隆帯を巡らせる。地文条線は横位に施文するものが大半を占めており、胴上半部の文様帯を明瞭に意識しているものと考えられる。443は胴部中段にも押圧隆帯の区画を巡らせる。450～454は刻みを持つ隆帯を巡らせる。

455～458は口縁外面に段を持って、段の上に押し引き文を巡らせる。459～464は段の下に押し引き文を持って、横位の沈線を巡らせる。

465～487は胴上半部に文様帯を持つ土器である。465～467は縦位の平行沈線文、468～472は対弧文で、沈線間を磨研して条線を擦り消す手法が多くみられる。473～475は蛇行沈線文で、縦位平行沈線文や対弧文との組み合わせで用いられる。

476は平行沈線の斜行文と弧線文の組み合わせで、丸棒状工具の太い沈線を用いており、地文条線を失っている。477・478は押圧隆帯で文様を描く土器である。

479～487は縄文施文の土器で、安行3b式であろう。479・480は対弧文をベースに擦り消し縄文を描く。481～487は口縁外面に縄文を施文する土

器で、484は胴部中段にも帯縄文の区画を巡らせる。胴上半部には横位の弧状条線を施文する。

488～516は無文土器である。488～492は折り返し口縁で、488は外面に指頭押圧を巡らせる。493は口端がS字に屈曲する。495～499は浅鉢の可能性もある。511は内面に段を巡らせる。514は外面に輪積み痕を残している。

515・516は製塩土器で、前者の口縁部は寛で水平に切り落としたように断面角頭棒状となっており、内面は平滑に調整されている。後者の口縁部は指でつまみだしたような先細りの断面形態で、表裏とも寛状工具の粗いナデ調整を施している。

517～532は床面焼土上層からの出土遺物である。

517・518は安行式の大波状口縁深鉢で、517は安行3a式、518は同3b式であろう。519～521は安行式の碗弾形深鉢である。519は安行3a式、520は同3b～3c式か。521は後期安行式であろう。

522は浅鉢で、安行3a～3b式であろう。523は後期安行式の台付き鉢で、円孔を穿つ。524～530は安行式の粗製深鉢である。524は口縁外面に刻み目+沈線を巡らせる。525～527は口縁外面と胴部中段に連続押圧を伴う隆帯を巡らせる。527～530は胴上半部に文様帯を持つ土器で、528は平行沈線の斜行文、529は縦位の蛇行沈線文、530は押圧隆帯で文様を描く。531は無文土器で、水平口縁上に山形の突起を配する。532は製塩土器とみられるが、表裏ともヘラナデを徹底した精緻なつくりである。口縁は寛で切り落としたような外削ぎ状である。

第45号住居跡出土土器（第220図279～第221図291、第289～291図）

第220図279は半粗製の深鉢で、加曾利B2式である。軽微に内湾しつつ開く単調な器形で、口縁外面に2段の押圧隆帯、内面に凹線を巡らせる。胴上半部には上下を平行沈線で区画した文様帯を

持ち、内部には鋸歯文を描いて、間隙を弧状モチーフで埋めている。地文はR L単節の縄文である。

280は大波状口縁の深鉢で、加曾利B 3式であろう。口縁部～胴上半部にかけて残存する。大きく内湾する口縁に沿って1条の沈線を巡らせ、胴部には曲線的な擦り消し文様を描く。地文はL R単節の縄文である。

281は粗製土器である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。地文縄文を持たず、胴上半部では横方向、胴中段以下では斜め方向の条線を施文している。曾谷式に伴うものか。

282は口縁部～胴部中段にかけて残存する。3単位の山形波状口縁で、口唇断面肥厚して内面に稜を形成する。口縁部は無文で、胴部中段に矢羽状の条線を施文する。加曾利B 3式か。

283は浅鉢である。口縁内湾して口唇断面肥厚し、口端上は平坦に整形している。口唇外面には刻みと横位の沈線を巡らせる。中間に無文帯を挟んで胴上半部と下半部に縄文を施し、境界を横位の沈線で区画する。地文はL R単節の縄文である。加曾利B 3式である。

284は山形波状口縁の深鉢で、口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁外面に2段の凹線を巡らせ、波頂部と波底部にそれぞれ対をなす貼り瘤を配する。胴部は無文で、中段のくびれ部分に部分的に沈線を巡らせる。高井東式である。

285は安行1式の精製水平口縁深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁緩やかに外反して、口端内屈する。口縁外面に帯縄文で1段の区画を構成し、縦瘤を配する。胴上半部は縄文帯となり、胴部中段に沈線+押し引き文の区画を巡らせて、胴下半部は対向弧線文を描いている。地文はR L単節の縄文である。

286～288は安行式の精製深鉢・底部である。286は胴下半部である。上下を帯縄文で区画し、対向弧線文を描いて縄文を充填する。モチーフの接点には豚鼻突起を配する。胴下半部には斜位の

条線を施文する。287・288は底部～胴下半部である。底部周辺を縄文帯として、胴部との境を横位の沈線で区画している。地文はR L単節の縄文である。

289は安行式の粗製深鉢である。胴部中段にくびれを持ち、口縁緩やかに外反する。口縁外面に押し引き文を巡らせ、胴部中段に押し引き文+沈線の区画を持つ。口縁部～胴下半部まで一続きの斜位の条線を施文する。安行1式に伴うものである。

290は台付き鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。胴部中段がZ字状に屈曲してこの部分に無文帯を持ち、上下に条線を施文する。

291は無文の浅鉢である。平底で、緩やかに内湾しつつ立ち上がる碗型の器形である。横方向のヘラナデ調整を施しており、底面には網代痕を残す。

第289～291図は破片資料である。

1は東関東系の浮島式である。2は加曾利E IV式と考えたが、後期に降る可能性がある。3は堀之内1式で、小波状口縁の波頂部に一対の盲孔を配する。4・5は堀之内2式で、パネル文を描く精製深鉢である。

6～10は加曾利B 2式であろう。6は横帯文の深鉢、7・8は3単位波状口縁深鉢の波頂部に付される突起で、8は円盤状の大型突起である。9は弧線文を巡らせる浅鉢である。10は横帯文に沿って括弧状の短沈線を重畳させる。

11は異形台付き土器で、加曾利B 2～B 3式であろう。12～14は矢羽状沈線を描く深鉢胴部で、加曾利B 2～B 3式であろう。

15～18・26は曾谷・高井東式である。15は大波状口縁深鉢で、波頂部に柱状の突起を配する。口縁外面には隆帯の区画を持って刻みを巡らせ、小さな縦瘤を配する。26は凹線+刻みによって多段の区画を構成している。波頂部に寛状の突起を配して縦瘤を重畳させるが、剥落している。安行1

式段階に降る土器であろう。16は水平口縁の深鉢で、やはり口縁直下に隆帯で幅狭の区画を構成し、刻みと凹線を巡らせる。17も水平口縁で、口縁下に縄文帯を持つ。18は瓢形深鉢で、安行1式に降る可能性もある。

19～25は紐線文の土器で、加曾利B～曾谷式に伴うものである。19～21は地文縄文で、20は極めて粗く、かつ浅い施文である。22～24は条線施文の土器で、22・23は粗い縄文を施文する遠部第一類。24は密な条線で縄文を持たず、曾谷式と考えられる。

27～35は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文で1段の区画を構成し、縦瘤を配する。31～33は区画と縦瘤が多段化している。31の胴部には矢羽状の沈線を描く。

36・37は後期安行式の砲弾形深鉢である。38～41は安行1式の瓢形深鉢である。38は口縁直下に円孔を穿つ。

42・43は安行式精製土器の胴部である。深鉢胴部中段である。胴部中段には平行沈線の区画を巡らせ、胴上半部には弧線文を巡らせている。縄文は施文しない。安行3b式であろう。43は胴下半部である。対向弧線文を描いて縄文を充填する。底部付近は縄文帯となって、上端を沈線で閉塞する。

44～46は後期安行式の台付き鉢である。44は外反口縁で、口端に刻みを巡らせ、縦位の条線を施文する。45は外反口縁で、横位の平行沈線を施文する。46は斜行条線の胴下半部で、胴部中段の文様帯との境を刻み隆帯で区画する。

47は東北系の瘤付き土器で、刻みを伴う平行沈線で文様を描き、一對の貼り瘤を配する。内面に輪積み痕を残しており、注口土器ないし壺などの特殊な器形と考えられる。

48～56は安行式の粗製深鉢である。口縁外反する48～54は安行1式で、曾谷式を含む可能性がある。48・49は口縁部に装飾を持たない。50～52は

口端部に刻みを巡らせる。53・54は連続押圧を伴う隆帯を巡らせる。

56は内湾口縁で口唇断面肥厚し、外面に1条の隆帯を巡らせる。56は押圧隆帯の土器で、口縁部の隆帯が反転して胴上半部に侵入し、文様を描く。いずれも安行2～3a式であろう。

57は斜位の条線を施文する底部～胴下半部である。底部周縁に段を持ち、胴部にかけてやや丸みを帯びて立ち上がる。安行式の精製土器に伴うものと考えた。

58は無文土器で、口縁内面に凹線を巡らせる。加曾利B式に伴うものか。59は無文の丸底浅鉢である。口唇断面やや肥厚して、口端上面を平坦に整形している。器面は表裏とも研磨を徹底しており、精緻なつくりである。60は無文の底部で、底面に網代痕を残している。後期前葉～中葉の土器であろう。

第46号住居跡出土土器（第221図292～第222図298、第291～293図）

第221図292は加曾利B2式の浅鉢である。胴部中段に弧状モチーフが巡って、接点に対弧状の沈線を配する。地文はLR単節の縄文である。

293は大波状口縁の深鉢で、口縁部～胴部中段にかけて残存する。5単位の波状口縁となるものとみられ、口唇外面に刻みを巡らせる。胴上半部に縄文帯を持ち、下端を横位の沈線で水平に区画し、頸部は無文帯とする。胴部との境の屈曲部分に平行沈線+列点文の区画を巡らせ、胴部中段には対向弧線文を描いて縄文を施文する。胴下半部は縄文帯となる。加曾利B3式である。

294は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁部～胴上半部まで残存する。胴部から直線的に開いて頸部で「く」の字に屈曲し、口縁直立する。口縁外面に帯縄文で区画を構成し、縦瘤を配する。胴上半部には弧線文を巡らせて縄文を施文した半円形の擦り消しモチーフを描いている。地文はRL単節の縄文である。

295は精製深鉢胴部で、屈曲部分に平行沈線＋刺突文の区画を巡らせ、胴部中段に対向弧線文を描いて縄文を施文し、胴下半部は縄文帯となる。地文はL R単節の縄文である。296もこれに類似の文様である。いずれも曾谷・安行1式であろう。

297は吊り手土器である。扁平板状の吊り手で、やや湾曲したV字状のカーブを描く。背面に4条の刻み隆帯を持ち、頂部には一対の貫通孔を持つ盃状の突起を配し、両側縁に突起を配する。曾谷・高井東式である。

298は大型の浅鉢である。口縁部～胴下半部まで残存する。胴上半部に最大径を持って口縁内湾し、口唇直下に平行沈線を巡らせて以下胴部中段までを縄文帯とする。胴下半部に若干の無文帯を挟んで、底部周辺は再び縄文帯となっており、それぞれの境は横位の沈線で区画している。地文はR L単節の縄文である。加曾利B 3式であろう。

第291～293図は破片資料である。

1は堀之内2式の注口土器で、所謂「福田類型」である。断面蒲鉾状の浮線で曲線文を描き、縄文は施文しない。

2は加曾利B 1式の鉢である。外割ぎの口縁外面に刻み隆帯を巡らせ、これに接して一帯構成の横帯文を描く。11は同時期の浅鉢で、内文を持つ。3～10・12～14は加曾利B 2式である。3・4は多条沈線を巡らせる口縁部である。5は横帯文の土器で、3単位波状口縁の波頂部に8の字の貼り付け文を配し、胴部には弧状に横帯文を巡らせて接点に括弧状の単位文を配する。

7～10は口縁内傾して胴上半部に最大径を持つ鉢で、9はソロバン玉状に張り出し隆帯を巡らせる。10は胴部中段に斜行沈線文を巡らせる。

12は無文の波状口縁で、研磨した胴部に鋭利な工具の格子目文を描く。13・14は粗い地文縄文上に格子目文を描く遠部第四類である。

15～27は加曾利B式の粗製土器である。15～21は紐縄文の土器で遠部第一類および類似の土器で

ある。粗い縄文を施文し、16以外は条線を施文する。縄文の施文がごく浅い18～20は時期が下る可能性がある。21は胴部中段に押圧隆帯を巡らせ、上下で条線の施文方向を変えている。22・24は縄文のみの深鉢である。23は口縁直下に斜行沈線を施文する土器で、加曾利B 2式であろう。25は無文の口縁で、内面に凹線を巡らせる。26は地文縄文上に粗放な横帯文を描く土器で、加曾利B 1式に伴うものか。27は櫛歯状工具の条線を交差させる土器で、堀之内式期に遡る可能性もある。

28～40は曾谷・高井東式である。

28は胴上半部が「く」の字に張る浅鉢で、加曾利B 2式以来の器形だが、扇状の突起や縄文を持たない点などからこの時期に置いた。29・30は水平口縁深鉢で、圧縮された文様帯を持つ。29は口縁外面に集合沈線を巡らせて横瘤を配し、胴部は地文縄文上に格子目文を描く。30は口縁内屈するキャリバー形の深鉢で、帯縄文の区画を巡らせる。36も類似の土器だが、研磨により縄文を擦り消している。

31～35は内湾する口縁で、瓢形の鉢であろう。口縁直下に平行沈線を巡らせ、胴上半部を縄文帯としている。37は無文の浅鉢で、口端内屈して直下に凹線を巡らせる。

38は波状口縁の深鉢である。口縁外面に平行沈線＋刻みの区画を巡らせ、胴部に弧線文を描いて縄文を施文する。

39は深鉢胴下半部で、横位の平行沈線に弧線文を組み合わせた「遮光器文」を描いて、モチーフの接点に貼り瘤を配する。40は異形台付き土器で、胴部が「く」の字に張り出して平行沈線を巡らせ、横位の貫通孔を持つ突起を配する。

41は安行2式で、大波状口縁の深鉢である。刻み隆帯で多段の区画を構成する。42は後期安行式の水平口縁深鉢で、帯縄文の区画を巡らせる。

43～46は安行式の精製深鉢胴部で、大半が後期の土器であろう。胴部中段がくびれて平行沈線＋

押し引き文の区画を巡らせ、胴下半部には対向弧線文を描いて、底部周辺は縄文帯とする。

48は安行3 a式の鉢で、波状口縁波頂部に内文を持つ双頭突起を配し、外面に対向三叉文を描く。49は安行3 a～3 b式の浅鉢であろう。胴部中段に縄文帯を持ち、胴下半部は無文である。

50・51は無文土器である。50は外反口縁で頸部との境に段を持つ。加曾利B～曾谷式に伴うものか。51は内湾口縁で、口唇断面肥厚する。晩期前葉の土器であろう。52～54は無文の底部で、後期の土器とみられる。いずれも底面に網代痕を残している。

第47号住居跡出土土器 (第222図299～第223図311、第293～295図)

第222図299～301は波状口縁の深鉢で、加曾利B 3式である。299は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁直下と胴部中段のくびれ部分に平行沈線+刺突文の区画を巡らせ、胴下半部に縄文帯を持つ。地文はR L単節の縄文である。

300は口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁部～胴上半部と胴下半部に斜格子文を描き、間に無文帯を挟んで、境界を横位の沈線で区画している。

301は口縁部～胴上半部まで残存する。器面を丁寧に研磨し、胴部には鋭利な沈線で斜行ないし矢羽状の集合沈線文を施文する。曾谷式であろう。

302～304は浅鉢である。302は丸底で胴部中段にくびれを持ち、口縁内湾する2段の立ち上がりを持つ。口縁外面に粗雑な平行沈線を重畳させ、胴上半部は無文、胴部中段に平行沈線+刻みの区画を巡らせて、以下底部まで縄文帯としている。地文はL R単節の縄文である。曾谷式に伴うものであろう。

303は加曾利B 3式の浅鉢である。口縁部～胴下半部まで残存する。胴上半部～中段と底部付近を縄文帯とし、胴下半部が無文帯を挟んで、境を沈線で区画している。地文はR L単節の縄文であ

る。

304は波状口縁の浅鉢である。4単位の波状口縁で、口唇断面外削ぎ状である。波頂部に突起を伴っていたものとみられるが、剥落している。波底部には刻みを伴う隆帯のU字文を配している。底面は上げ底状となっている。

305は安行1式の大波状口縁深鉢である。口縁部～胴上半部にかけて残存する。4段の帯縄文で区画を構成し、波頂部は二叉となって、2段の縦瘤を配する。地文はR L単節の縄文である。

306・307は後期安行式の瓢形深鉢である。306は口縁部～胴下半部にかけて残存する。口唇断面肥厚して内側が突出する。口縁下には帯縄文+押し引き文の区画を重畳させ、胴上半部には櫛状の入り組み文を描く。胴部中段には2段の押し引き文を巡らせ、胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を施文する。地文はR L単節の縄文である。307は口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁外面に押し引き文を巡らせ、胴上半部には櫛状の入り組み文を描く。地文はR L単節の縄文である。

308・309は浅鉢ないし台付き鉢で、安行1式である。308は帯縄文で2段の区画を構成し、2段の縦瘤を配する。309はやはり帯縄文で区画を構成し、2個一對の縦瘤を配する。胴下半部には斜位の条線を施文する。地文はいずれもR L単節の縄文である。310・311は無文の底部である。310は安行式の深鉢に伴うものとみられ、底面には網代痕を残している。311は浅鉢であろう。

第293～295図は破片資料である。

1・2は花積下層式である。1は3本一組の燃糸側面瓦痕文を施文し、間隙に刺切文を施文する。2は0段多条の原体による羽状縄文である。

3は諸磯a式で、半截竹管状工具の波状文を重畳させる。4・5は加曾利E IV式で、2本一組の微隆起線を描く渦巻文の一部である。

6は称名寺式で、列点を伴う平行沈線でJ字文を描く。7は称名寺式末～堀之内1式で、無文の

口縁部に貫通孔を持つ突起を配し、胴部との境を、列点を伴う平行沈線で区画する。

8は堀之内1式である。隆帯で器面を縦に分割し、平行沈線で直線的なモチーフを描いて、間隙を集合沈線で埋める。口縁部に段を持ち、盲孔+沈線文を巡らせている。9は堀之内2式である。口端内屈して口縁外面に刻み隆帯を巡らせ、胴部には帯縄文でパネル文を描く。

10~17は加曾利B2式である。10は横帯文の土器である。山形波状口縁で、口縁に沿って横帯文を描き、左右の平行沈線が波頂部の下で弧状にループしている。11は直線的に開く深鉢ないし鉢の口縁で、口縁外面に刻み隆帯を巡らせ、上下一対の押圧を伴う突起を配する。12・13は胴上半部が張り出す鉢で、弧線文を描いて縄文を施文する。12は弧線に沿って刺突文を巡らせ、13は弧線の接点に盲孔+括弧状のモチーフを配する。

14~17は口縁部に斜行沈線や矢羽文・格子目文を描く土器である。頸部との境を沈線で区画する。地文縄文を持たない。加曾利B2~B3式か。

18~21は加曾利B3式である。18は波状口縁の深鉢で、口縁外面と胴部中段に平行沈線+刺突列の区画を巡らせ、胴上半部と下半部にそれぞれ弧線文を描く。縄文は施文しない。19~21も波状口縁深鉢で、口縁外面に刻み目文を巡らせ、胴上半部を縄文帯とする。

22~24は加曾利B式に伴う粗製土器であろう。いずれも口縁内面に凹線を巡らせる。22は半裁竹管状工具の条線、23・24は粗い縄文を施文する。

25~35は曾谷・高井東式である。25は大波状口縁深鉢である。波頂部に円柱状の突起を配し、口縁外面に隆帯の区画を巡らせる。26は山形波状口縁で、口唇断面肥厚して内面に稜を形成し、口縁外面に凹線を巡らせる。

27も波状口縁で、口縁外面に段を持って平行沈線文を巡らせ、波底部に縦瘤を配する。胴部には鋭利な工具の斜行沈線文を施文する。

28は水平口縁深鉢で、口縁外面に平行沈線文を巡らせ、縦瘤を配する。胴部には弧線文を巡らせて縄文を施文する。29・30は無文の水平口縁深鉢で、口縁外面に段を持つ。

31~34は内湾口縁で、瓢形深鉢である。31は口縁外面に平行沈線文を巡らせて縦瘤を配し、胴上半部に弧線文を巡らせて縄文を施文する。32は口縁外面に刻みを巡らせて、胴上半部には遮光器文を描き、モチーフの交点に円形の貼り瘤を配する。33は口縁外面に平行沈線文を巡らせ、胴上半部を縄文帯とする。34は口端外屈して平行沈線文を巡らせ、胴上半部を縄文帯とする。

35は異形台付き土器であろう。ソロバン玉形の胴部で、口縁直立する。胴上半部に平行沈線の弧線文を上下対向させて縄文を施文し、貼り瘤を配する。

36~43は加曾利B~曾谷式に伴う粗製土器である。36~42は紐線文の土器である。口縁外面に押圧隆帯を巡らせる。36~39は斜位の条線を施文し、37以外は粗い縄文を施文する。40は縄文のみの土器である。41は地文縄文上に櫛歯状工具の条線を施文している。42は押圧隆帯を巡らせる胴部中段である。43は条線のみの口縁部で、口縁直下に段を持つ。

44・45は安行1式の大波状口縁深鉢である。帯縄文と凹線で多段の区画を描き、二又の波頂部に単独の縦瘤を配する。

46~49は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文+沈線の区画を巡らせ、46・47は2段、48・49は単独の縦瘤を配する。47は二次的な被熱によって器面が著しく変形し、部分的に還元状態になっている。

50~53は帯縄文の区画を巡らせる水平口縁深鉢である。54・55は瓢形深鉢口縁部である。口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせる。いずれも後期安行式であろう。

56~62は後期安行式の精製深鉢胴部である。56

は地文縄文の胴下半部に綾線状の沈線文を描く。57・58・61は瓢形深鉢で、胴部中段に平行沈線＋押し引き文の区画を巡らせる。59・60は樽状入り組み文である。62は水平口縁深鉢に伴う胴上半部であろう。

63は後期安行式の台付き鉢口縁部である。64～67は安行式の粗製深鉢である。64～66は安行1式であろう。口縁外反し、口端に刻みを巡らせて、胴部に条線を施文する。67は内湾口縁で、口縁外面に段を持って刻みを巡らせ、胴部には縄文を持たず、縦位の蛇行沈線＋紡錘文を描く。安行3b～3c式であろう。

68～70は無文土器である。いずれも後期中葉の土器とみられる。口縁外面に軽微な段を持つ70は曾谷式か。72～75は網代痕を持つ無文の底部で、後期の土器であろう。74は安行式の瓢形深鉢か。75は浅鉢ないし注口土器であろう。

第48号住居跡出土土器（第223図312・313、第295図）

第223図312は堀之内2式の精製深鉢で、胴部中段のみ残存する。朝顔形の深鉢で、パネル状の擦り消し文様を描く。地文はL R 単節の縄文である。胴下半部には縦方向の入念へラミガキが施されている。破片の下部が水平に剥離しており、規則的な凹凸が観察されたため、拓影図に示した。これは輪積み成形の際に下位の粘土帯の上端に刻みを施して圧着した痕跡がネガ的に残ったものと考えられる。

313は台付き鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴部中段がZ字に屈曲して口縁強く外反する。胴上半部に斜位の条線を施文して下端を沈線で閉塞する。胴部中段は無文帯、胴下半部には横位の条線を施文し、境が「く」の字に張り出して、押し引き文に伴う隆帯を巡らせる。曾谷式であろう。

第295図は破片資料である。

1～4は加曾利B 2式である。1は3単位波状口縁深鉢の突起である。2～5は胴上半部が張り

出す鉢で、2・4は平行沈線＋刺突列の区画を巡らせ、4は口縁部に横位の弧線文を描く。3は波状口縁の波頂部に括弧状のモチーフを配する。5は胴部中段に横位の弧線文を描き、平行沈線の区画を挟んで胴下半部に矢羽状の集合沈線文を巡らせる。

6～9は加曾利B 3式である。6・7は口縁外面に刻み目文を巡らせ、胴上半部に縄文帯を持つ。8は平行沈線＋刻み目文の多段の区画を巡らせる。9は瓢形深鉢である。口縁と胴部中段に刻み目文を巡らせ、胴上半部に縄文帯を持つ。

10～13は加曾利B 2式に伴う粗製深鉢である。10は遠部第一類で、まばらな縄文を施文した上に横位の条線を施文する。加曾利B 3～曾谷式であろう。11～13は縄文のみの深鉢で、口縁内面に凹線を巡らせる。

14・15は曾谷式で、瓢形深鉢である。胴上半部に半円形の擦り消しモチーフを巡らせる。14は口縁外面に平行沈線＋押し引き文の区画を巡らせ、円形の貼り付け文を配する。15は口縁外面に平行沈線を巡らせ、「ノ」の字状の貼り付け文を配する。

16は精製深鉢胴下半部で、曾谷～安行1式である。対向弧線文を巡らせて縄文を施文する。17～19は加曾利B 3～曾谷式に伴う粗製深鉢で、17・18は縦位の条線、19は矢羽状の沈線文を施文する。18は口縁内面に凹線を巡らせる。

第49号住居跡出土土器（第223図314～317、第295～296図）

第223図314は浅鉢である。口縁部～胴上半部まで残存する。水平口縁で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせ、半円形の突起と逆U字状の貼り付け文を配する。地文はL R 単節の縄文である。胴部には斜位の条線を施文する。加曾利B 3式ないし曾谷式である。

315は瓢形深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴下半部に最大径を持って、胴部中段にごく細いくびれを持ち、口縁内湾する。口

縁外面に押し引き文を巡らせ、胴上半部は縄文帯となつて、下端を横位の沈線で閉塞する。胴部中段には押し引き文を巡らせ、胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を施文する。地文はR L単節の縄文である。加曾利B 3式ないし曾谷式であろう。

316は水平口縁の精製深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外面に押し引き文を巡らせて区画を構成し、「ノ」の字状の貼り瘤を配する。胴上半部には弧状モチーフを巡らせて半円形の擦り消し文様を描く。地文はR L単節の縄文である。曾谷式であろう。

317は無文の深鉢底部である。

第295～296図は破片資料である。

1は加曾利B 1式で、横帯文の深鉢である。口縁上に盲孔と刻みを持つ突起を配し、クランク状の区切りを持つ横帯文を描く。

2～4は加曾利B 2式である。2は横帯文の1段おきに縄文を施文する。3は横帯文に括弧状の区切り文を重畳させる。4はソロバン玉状の鉢で、横括弧状の擦り消しモチーフを描く。

5～7は加曾利B 3式である。5・6は波状口縁深鉢、7は瓢形深鉢である。

8は加曾利B式に伴う粗製土器で、縄文施文の紐線土器である。9は無文地に矢羽状沈線を描く土器で、加曾利B 3～曾谷式であろう。

10・11は曾谷式である。10は浅鉢で、口縁と胴部の境が「く」の字に張り出す。口縁外面には平行沈線と縄文の区画を巡らせ、寛状の突起と中央押王をともなう楕円形の貼り付け文を配する。胴部には鋭利な工具の矢羽状沈線文を巡らせる。11も浅鉢で、口縁外面が「く」の字に張り出し、1条の沈線を巡らせる。口縁内面には2段の凹線を巡らせる。胴部にはヘラケズリを残す。

12は網代痕を残す底部で、後期の浅鉢ないし注口土器であろう。

第50号住居跡出土土器（第296図）

1・2は水平口縁の深鉢で、口端と胴部中段に

押し引き文を巡らせ、口縁外面に斜行沈線文を描いて下端を横位の沈線で閉塞する。加曾利B 3～曾谷式であろう。

3は加曾利B 2式に伴う粗製土器で、遠部第3類である。口縁外面に紐線文を巡らせ、地文縄文上に粗放な横帯文を描いて、半裁竹管状工具によるコンパス状の蛇行文を垂下させる。

4は安行1式の水平口縁深鉢である。5は大波状口縁深鉢で、安行3 a式であろう。6は半円形の擦り消しモチーフを描く胴下半部で、晩期前葉の土器であろう。

第51号住居跡出土土器（第224図318・319、第296図）

第224図318は深鉢で、胴部中段～胴下半部にかけて残存する。胴下半部が大きく張り出し、胴上半部の文様帯との境を1条の沈線で区画して、胴部中段には弧線文を巡らせる。安行3 cないし3 d式である。

319は胴部中段～胴下半部にかけて残存する。胴部中段に最大径を持つ紡錘形の胴部で、全面に斜位の条線を密に施文しており、地文縄文はみられない。曾谷～安行1式の粗製深鉢である。

第296図は破片資料である。

1は安行1式の大波状口縁深鉢で、波頂部の寛状突起である。2は平行沈線間に鋭利な工具の刺突を充填する土器で、安行3 b～3 c式であろう。3は安行3 c式で、壺の肩部である。Z字状の沈線文を描き、口縁との境を横位の沈線で区画する。

4～6は安行式に伴う粗製土器で、安行2～3 a式であろう。口縁部に刻みや連続押王をともなう隆帯を巡らせ、胴部に沈線文や押王隆帯を施文する。7は無文の深鉢で、口縁軽微に外屈する。粗いヘラケズリの上からヘラミガキを施す。晩期前葉の土器であろう。

第55号住居跡出土土器（第224図320～325、第296～297図）

第224図320は安行1式の大波状口縁深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外

面に帯縄文による多段の区画を巡らせて、波頂部と波底部に縦瘤を重畳させる。胴上半部には斜位の条線を施文して上下を平行沈線でごく浅い縄文を伴う加曾利B 3～曾谷式。6は粗放な横帯文を描く遠部第三類で、加曾利B 2式である。

321は安行1式の水平口縁深鉢である。口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁外面に帯縄文による多段の区画を持って、縦瘤を重畳させる。胴上半部には条線を施文する。地文はR L単節の縄文である。

322は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口端上に円形の小突起を配し、口縁外面に1条の沈線を巡らせる。胴部には平行沈線の粗雑な紡錘文を重畳させて、篋状工具の先端を用いた十字の刺突を多段に配する。特異な土器だが、東北地方後期後葉の新地式の影響下にある土器と理解される。小型の深鉢と考えたが、注口土器の口縁部の可能性もある。

324は口縁部～胴部中段にかけて残存する。砲弾形の器形で、口唇断面肥厚し、外面に段を持って刺突列を巡らせ、内面に突出して口端上面は平坦に整形している。胴部は無文である。晩期前葉の土器であろう。

323・325は安行1式に伴う粗製土器である。胴部中段に緩いぐびれを持ち、口縁が内湾しつつ立ち上がる。口唇断面は軽微に肥厚する。

323は口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁外面に押し引き文+沈線、胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を巡らせ、上下二帯に分かれた斜位の条線を施文する。

325は口縁部～胴部中段にかけて残存する。口縁外面と胴部中段に連続押圧の隆帯を巡らせ、斜位の条線を施文する。

第296～297図は破片資料である。

1は諸磯b式である。2・4は加曾利B 1式で、2は横帯文の深鉢、4は内文を持つ浅鉢である。3は無文の浅鉢で、加曾利B～曾谷式であろう。

5・6は紐線文の土器で、5は地文条線の遠部第一類系の土器で、ごく浅い縄文を持つ加曾利B 3～曾谷式。6は粗放な横帯文を描く遠部第三類で、加曾利B 2式である。

7～11は加曾利B式から曾谷式に伴う粗製土器であろう。7は縄文のみの深鉢で口縁内面に沈線を巡らせる。8～12は条線文の土器である。9は不整な隆帯を巡らせ、粗い縄文を施文する。加曾利B 2式か。内湾口縁で、口唇断面肥厚する12は、晩期前葉の土器であろう。

13～16は安行1式の大波状口縁深鉢で、15・16は波底部に縦瘤を重畳させる。17～24は安行式の水平口縁深鉢である。口縁外面に帯縄文の区画を巡らせる。縦瘤を配する17～20は安行1式、21・22も後期安行式であろう。

23は縦瘤とボタン状の貼り瘤が共存する南東北系の土器で、曾谷～安行1式であろう。24は擦り消し文様を描く土器で、安行3 a～3 b式であろう。

25・26は安行1式の瓢形深鉢である。内湾口縁で、外面に帯縄文と押し引き文の区画を巡らせている。27～30は精製深鉢胴部で、曾谷～安行1式であろう。27は帯縄文の区画に貼り瘤を配し、29は平行沈線+押し引き文の区画と貼り瘤が重畳する。

31・32は後期安行式の台付き鉢である。外反口縁で口端部に刻みを巡らせ、縦位の条線を施文する。31は胴部中段が「く」の字に張り出して沈線+押し引き文の区画を巡らせ、胴下半部には横位の条線を施文する。

33～42は安行式の粗製深鉢である。33～37は外傾ないし直立する口縁部で、口縁外面に押し引き文を巡らせる。安行1式であろう。38～40は押し引き文+沈線を巡らせる土器で、後期安行式であろう。41・42は連続押圧を伴う隆帯を巡らせる。後期末葉～晩期初頭の土器であろう。

43～45は無文土器である。43は内湾口縁、44・

45は軽微に外反する口縁である。44は口唇断面肥厚して内面に稜を形成する。いずれも後期の土器と考えられる。

第56号住居跡出土土器（第224図326～328）

第224図326は瓢形土器で、胴部中段～底部まで残存する。胴部中段に平行沈線＋押し引き文の区画を巡らせ、胴部中段には対向弧線文を描いて縄文を充填する。底部周辺は縄文帯となって、上端を沈線で区画する。底面には網代痕を残している。地文はR L単節の縄文である。曾谷～安行1式であろう。

327は晩期安行式の精製深鉢底部であろう。L R単節の縄文を施文し、底部付近は無文となる。

328は胴下半部～底部にかけて残存する。斜位の条線が交錯し、地文縄文を持たない。曾谷～安行1式であろう。

第58号住居跡出土土器（第297図）

1は浮島式である。2は加曾利B 1式で、横帯文の土器である。

第59号住居跡出土土器（第225図329、第297～298図）

第225図329は堀之内2式の精製深鉢である。口縁部～胴上半部にかけて残存する。口縁外面に隆帯の区画を持たず、胴部文様帯上端の帯縄文がこれを兼ねており、ここに8の字状の貼り付け文を配している。胴部には擦り消し縄文による入り組み文を描くものとみられる。地文はL R単節の縄文である。口径に比して肉厚の器壁である。

第297～298図は破片資料である。

1～3は堀之内1式である。1は波状口縁で、口縁外面に沈線＋刻み隆帯を巡らせ、波頂部から刻み隆帯が垂下して器面を分割する。2は頸部と胴部の境に平行沈線＋刺突列の区画を巡らせ、横8の字の貼り付け文を配する。3は称名寺式の流れをくむ平行沈線文を描く。

4～7は堀之内2式である。平行沈線でパネル文を描き、縄文を充填する。4は文様帯上端の区

画が単沈線となり、口縁外面の隆帯も省略されている。7は入り組み文の一部であろう。

8・9は堀之内式の半粗製の土器である。8は篋状工具を用いた浅く幅広い沈線文を描く。9は胴下半部で、地文縄文上に沈線文を描く。10は注口土器ないし4単位橋梁状把手の壺の口縁部で、胴部に浮線文を描く。称名寺～堀之内式期の土器である。

11は加曾利B 2式である。胴部中段が張り出して平行沈線＋刻み目文を巡らせ、胴下半部に矢羽状沈線文を描く。12は縄文のみ施文する波状口縁の土器で、加曾利B式である。13は無文土器で、内外面とも横位の研磨を徹底する。

第60号住居跡出土土器（第225図330、第298図）

第225図330は加曾利B 2式の鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴上半部が「く」の字に張って口縁内湾し、3単位の突起を配する。口縁直下に帯縄文を巡らせ、頸部には平行沈線＋刺突文の区画を巡らせて、胴部中段には綾杉状の集合沈線を巡らせる。胴下半部には縦位のヘラミガキを施して、集合沈線の一部擦り消している。地文はR L単節の縄文である。

第61号住居跡出土土器（第225図331～第226図

344、第298～299図）

第225図331は高井東式の大波状口縁深鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁外面に隆帯の区画を巡らせ、波頂部は欠失、波底部には形骸化した橋梁状の突起を配する。胴部は無文である。

332は安行1式の大波状口縁深鉢である。口縁部～胴下半部まで残存する。口縁外面に多段の帯縄文を巡らせて波頂部に縦帯を重ねさせ、胴上半部は三角形の区画となって斜位の集合沈線文を施文し、胴部中段に帯縄文＋押し引き文の区画を巡らせる。胴下半部には対向弧線文を描いて縄文を充填し、底部付近は縄文帯となって上端を横位の沈線で区画している。地文はR L単節の縄文である。

333は同時期の砲弾形深鉢である。口縁部～胴部中段まで残存する。胴上半部に最大径を持って、口縁強く内湾し、口唇断面は著しく肥厚する。口縁外面に帯縄文を巡らせて2段の楕円形区画を構成し、3段の縦瘤を配する。胴部は無文で、横位の粗いヘラナデを残している。

334は瓢形深鉢で、口縁部～胴上半部まで残存する。口縁外面に帯縄文を巡らせて2段の押し引き文を施文する。胴上半部には円文を描いて、内部に縄文を充填する。地文はR L単節の縄文である。安行1式であろう。

335は安行1式の瓢形土器胴下半部とみられる。粗放な対向弧線文を描いて縄文を施文する。底部付近は縄文帯となって、上端を沈線で閉塞する。地文はR L単節の縄文である。

336は後期安行式の精製深鉢胴下半部である。胴部中段～下半部にかけて残存する。文様構成は335に類似し、胴部中段に押し引き文を巡らせる。

337は安行式の精製土器底部である。R L単節の縄文を施文し、底部周辺は無文となる。

338・339は小型の鉢である。

338は口縁部～胴下半部まで残存する。口唇断面肥厚して、口端外屈する。口縁外面および胴上半部に帯縄文を巡らせて区画を構成する。地文はR L単節の縄文である。胴部は無文となる。安行1式であろう。

339は無文の鉢で、口縁部～胴下半部まで残存する。口端部に小さな縦瘤を配する。曾谷式であろうか。

340は台付き鉢である。胴部中段～下半部にかけて残存する。胴下半部は直線的に開いて横位～斜位の条線を施文し、「く」の字に屈曲して胴部中段は直立し、多段の刻み隆帯を巡らせて、対をなす瘤を配する。安行1式である。

341・342は小型の浅鉢である。

341は口縁部～底部まで残存する。口縁外面に帯縄文で2段の楕円形区画を構成し、区画の交点

では口端上に押圧を加えて双頭状にしている。安行1式であろう。

342は胴部中段～底部まで残存する。無文で、底面に網代痕を残している。

343・344は安行1式に伴う粗製深鉢である。いずれも口縁部～胴下半部にかけて残存する。

343は胴部中段に緩やかにびれを持ち、口縁内湾しつつ立ち上がって、口唇断面肥厚する。口縁外面と胴部中段に押し引き文を巡らせ、上下2帯の条線を施文する。

344は内湾しつつ一本調子に立ち上がる単調な器形で、口唇断面軽微に肥厚する。胴部中段に平行沈線文を巡らせ、上下2帯の条線を施文する。

第298～299図は破片資料である。

1～3は堀之内2式である。1は3単位波状口縁の深鉢で、波頂部に円盤状の小突起と8の字状貼り付け文を配し、口縁外面に刻み隆帯を巡らせる。胴上半部には一段の帯縄文を巡らせるものと思われる。

2は水平口縁で、口縁外面に刻み隆帯を巡らせる。3は隆帯を持たず、胴上半部にパネル文を描き、口縁内面に凹線を巡らせる。

4・5は加曾利B2式である。4は水平口縁で、押圧を伴う縦長の突起を起点に口縁外面に弧線文を巡らせ、胴上半部に矢羽状沈線文を描く。5は山形波状口縁の浅鉢で、遠部第二類である。胴部中段の無文帯を挟んで上下に斜行沈線文を施文する。口縁内面に沈線を巡らせ、器面を入念に研磨している。

6は加曾利B3式で、遠部第二類の瓢形深鉢である。口縁外面に平行沈線・刻み目文を巡らせる。胴上半部には地文縄文上に条線を施文した文様帯を配し、口縁との間に若干の無文帯を持つ。

7は遠部第四類の水平口縁深鉢で、加曾利B2式であろう。8・9は粗い縄文を施文する深鉢で、加曾利B式に伴うものであろう。8は口端の内外に半裁竹管状工具の沈線を巡らせる。9は口縁内

面に凹線を巡らせる。

10・11は曾谷・高井東式で、いずれも大波状口縁深鉢である。10は口縁外面に段を持って平行沈線を巡らせ、縄文を施文する。11は突起を欠失する波頂部で、口縁外面に短沈線を巡らせ、下方に横位の平行沈線を施文する。

12～14は安行1式の大波状口縁深鉢である。帯縄文の区画を巡らせ、波頂部に縦瘤を重畳させる。12は波頂部に笠状の突起を配し、縦瘤の間に円孔を穿つ。15・16も同時期の波状口縁であろう。

17～21は後期安行式の水平口縁深鉢である。帯縄文で1段の区画を描く。17は縦瘤を配する安行1式で、18～20も同時期のものと考えられる。20は帯縄文に沿って押し引き文を巡らせる。21は対をなす半円形突起を配する口縁部で、瘤を持たない。やはり安行1式で、浅鉢や台付き鉢の可能性はある。

22は砲弾形深鉢で、後期安行式の土器であろう。23・24は瓢形深鉢で、口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせる。24は区画上に矮小な縦瘤を配するもので、曾谷式の可能性はある。

25～27は後期安行式の台付き鉢口縁部である。外反口縁で、口端部に刻み目文を巡らせ、縦位の条線を施文する。25は安行1式で、胴部に刻み隆帯を巡らせて貼り瘤を配する。

28は異系統土器で、東北地方後期後葉の新地式の壺の肩部である。隆帯の楕円形区画を巡らせて、交点に先割れの突起を配し、区画内に環状の貼り付け文を配する。隆帯上に等間隔で貼り瘤を巡らせ、器面を入念に磨研して全面赤彩する。

29～44は安行式の粗製深鉢である。29～32は条線地文で口縁外面に押し引き文を巡らせる土器で、大半が安行1式であろう。33～35は押し引き文+沈線を巡らせる口縁部で、条線を失う35は晩期前葉、他は後期安行式であろう。

36～40は口縁部と胴中段に押圧隆帯を巡らせる土器で、後期中葉～晩期初頭の土器であろう。

41～44は口縁部の装飾を持たない条線地文の土器である。

45～49は無文土器である。45は口端上に粗い押圧を巡らせる。50は安行式の深鉢底部で、底面に木葉痕を残す。

第62号住居跡出土土器（第299図）

1・2・9は堀之内1式である。1は地文縄文上に多条沈線を描く。2は半截竹管状工具の多条沈線である。9は精製深鉢で、口縁外面に段を持ち、平行沈線を巡らせて、沈線間に斜めの刺突を施す。

3・4は加曾利B2式である。3は口縁直下が張り出して、平行沈線+縄文の区画を巡らせる。4は水平口縁で盲孔+短沈線の突起を配し、口縁外面に刻み目文を巡らせて、胴部には弧線文を描いて交点に括弧状のモチーフを配する。5は安行式の精製深鉢の胴下半部か。

6・7は紐線文の土器で、加曾利B2式であろう。6は波状口縁で口縁外面に2段の押圧隆帯を巡らせ、胴部に縦位の弧状沈線を描く。7は胴部中段に押圧隆帯を巡らせ、地文縄文上に半截竹管状工具の条線を断続的に施文する。

8は縄文のみの深鉢で、加曾利B式に伴うものであろう。10は無文の底部で、底面に網代痕を残している。後期前葉～中葉の土器であろう。

第63号住居跡出土土器（第266図345・346、第300図）

第266図345は水平口縁深鉢で、口縁部～胴上半部にかけて残存する。頸部が「く」の字に屈曲して口縁直立し、口唇断面は内割ぎ状となる。口縁外面に2段の平行沈線を巡らせて上下にRL単節の縄文を施文し、逆U字状の貼り付け文を配する。

346は壺ないし注口土器の口縁部～頸部であろう。緩やかに内湾しつつ立ち上がり、口唇断面肥厚して内面に稜をなし、口端上は平坦に整形して、3個1単位の突起と単独の小突起を交互配置するものと思われる。頸部外面には平行沈線を多段に巡らせており、地文縄文を持たない。瘤付き土

器の影響を受けた後期後葉の土器であろう。

第300図は破片資料である。

1は高井東式である。大波状口縁の波頂部で、剥落しているが大型の突起と橋梁状の把手を持っていたものであろう。口縁外面に2本隆帯の区画を巡らせて、円形竹管状工具の刺突を施す。

2・3は後期安行式の水平口縁深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画を巡らせる。4は瓢形深鉢で、安行1式である。口縁外面に帯縄文+押し引き文の区画を巡らせる。

5は後期安行式の精製深鉢胴部で、胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を巡らせ、胴下半部に対向弧線文を描いて縄文を施文する。6は後期安行式の台付き鉢で、口端部に刻みを巡らせて縦位の条線を施文する。

第64号住居跡出土土器 (第226図347～第227図

355、第300～302図)

第226図347は無文の深鉢で、曾谷式である。口縁部～胴上半部まで残存する。直線的に開いた後、口縁直下で内屈し、口唇断面肥厚して内割ぎ状となる。

348は安行式の粗製深鉢である。口縁部～胴下半部にかけて残存する。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して口唇断面著しく肥厚する。口縁外面に連続押圧を伴う隆帯を巡らせる。胴部中段にも同様の隆帯を巡らせ、末端が上下に分離して胴上半部の文様帯には対弧文と蛇行沈線文を描いている。口縁部直下～胴部中段にかけて斜位の条線を施文する。後期末葉～晩期初頭の土器であろう。

349～351は安行式の底部で、斜位の条線を施文する。352は無文の底部で、晩期安行式に伴うものである。

353～355は床面焼土上層から出土の土器である。353は大波状口縁の深鉢である。口縁部～胴部中段にかけて残存する。胴上半部に帯縄文で三角形区画文を描き、豚鼻突起を配する。胴部中段には横位の帯縄文を巡らせる。地文はR L単節の

縄文である。安行3 a式である。

354・355は安行式の粗製深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁内湾して口唇断面著しく肥厚する。

354は口縁部～胴部中段まで残存する。口縁外面と胴部中段に半裁竹管状工具の刻み隆帯を巡らせ、胴上半部には縦位の蛇行懸垂文を挟んで対弧文を描いており、それらを横位の対弧文で連繫する。

355は口縁部～胴下半部にかけて残存する。口縁外面に刻み隆帯と平行沈線文を巡らせ、胴部中段にも平行沈線を巡らせて文様帯上下を区画し、内部には平行沈線による「ノ」の字状のモチーフを描いている。口縁直下～胴部中段にかけて粗雑な斜位の条線を施文する。

第300～302図は破片資料である。

1～4は加曾利B 2式である。1は3単位波状口縁深鉢で、貫通孔を持つ突起を配し、平行沈線+刻み目文の区画を巡らせる。2は水平口縁の深鉢で、胴上半部に斜行沈線文を施文して上下を沈線で区画する。

3はソロバン玉状の鉢で、弧線文を巡らせて縄文を充填し、交点に押圧を持つボタン状貼り付け文を配する。粗雑な施文でモチーフに崩れが認められ、加曾利B 3式もしくはそれ以降の土器の可能性ある。4は「く」の字に張り出す深鉢胴上半部で、平行沈線文を巡らせる。

5・6は加曾利B 3式である。口縁外面に刻みを巡らせて、胴上半部は縄文帯となる。7～14は加曾利B式に伴う粗製土器である。7～9は加曾利B 2～B 3式で、口縁部と胴部中段に押圧隆帯を巡らせる遠部第一類である。粗い縄文の上に条線を描く。7は縄文がまばらで条線が密になっており、曾谷式の可能性がある。10・11はこれらに伴う胴部で、粗い条線の加曾利B 2式であろう。

12は横位の沈線の区画内に格子目文を描く遠部第四類である。13は無文地に縦位の沈線を交錯さ

せる。14は粗い地文縄文上に半裁竹管状工具の条線を描く。

15～18は曾谷・高井東式である。15は大波状口縁深鉢である。口縁外面に段を持って平行沈線文を巡らせる。16は水平口縁の深鉢で、口縁内屈して外面に段を持ち、平行沈線を巡らせて上下に縄文を施文する。

17・18は無文の口縁部で、口縁内屈して外面に段を形成する。

19～28は後期安行式の水平口縁深鉢である。口縁外傾または直立して、外面に帯縄文の区画を巡らせる。19～25は縦線を配する安行1式である。19は矮小な貼り瘤で、曾谷式の可能性がある。

29～35・42・44は曾谷～後期安行式の瓢形深鉢である。29～34は口縁外面に段を持って押し引き文+沈線の区画を巡らせる。29は胴上半部に櫛状の入り組み文、31は対向弧線文を描く。32は斜位の条線を施文する。34・44は円孔を穿つ口縁部である。35は帯縄文+凹線の区画で、胴上半部は縄文帯となる。42は口縁に無文帯を持って沈線を巡らせ、胴上半部を縄文帯とする。

36～38は後期安行式の精製深鉢胴部である。胴部中段に平行沈線+押し引き文の区画を巡らせる。36は瓢形深鉢で、胴上半部に縄文帯を持つ。37・38は胴下半部に対向弧線文を描く。

39は無文地に密な条線を施文する口縁部で、曾谷～安行1式の粗製土器であろう。

40・41・43は晩期前葉の土器であろう。40は姥山系の文様を描く安行3b式である。41は壺ないし注口土器で、帯縄文を巡らせる。43は注口土器ないし瓢形深鉢の口縁部で、半裁竹管状工具の平行沈線を多段に巡らせる。

45は晩期安行式の粗製土器である。口縁外面に列点文+沈線を巡らせ、鋭利な工具の条線を縦位に施文する。

46～73は床面焼土上層から出土の土器である。

46～49・54は水平口縁で、口縁外面に帯縄文の

区画を巡らせて貼り瘤を配する土器である。46は刻みを伴う縦線を配し、口端上に3個1単位の突起を配する。安行2式であろう。

47～49は縦位の短沈線や押圧をともなう縦線で、口端上に刻みを持つ突起を配する。帯縄文の区画を弧状に巡らせ、48・49は胴上半部に対向弧線文を描く。安行3a式であろう。54は49に似るが、太い沈線で文様を描き、地文縄文を持たない。安行3b式か。

50・51は砲弾形深鉢である。50は帯縄文で多段の区画を構成し、上下一対の縦線を配する安行1式である。51は1段の区画を巡らせて胴部に弧線文を描く土器で、後期安行式であろう。

52は安行3a式である。波状口縁で、波頂部を起点として弧線文を巡らせて縄文を充填し、間隙に三叉文を配する。胴部にも49に類似の対向弧線文を描くものであろう。

53は砲弾形の深鉢で、安行3b～3c式である。口縁直下に文様帯を持って、上下を沈線で区画する。縦位の沈線でパネル状の区画を構成し、内部に一对の蛇行沈線文を描く。

55～57は浅鉢である。55は安行3a式であろう。胴部中段がソロバン玉状に張って押圧隆帯を巡らせ、口縁内湾して口端屈曲し直立する。胴上半部を鋸歯状に分割して三叉文や入り組み文を描き、刻みを持つ横線を配する。胴下半部には平行沈線の弧状モチーフを巡らせて縄文を充填する。

56は安行3a式である。波状口縁で、波頂部に刻みを施し、対向三叉文を描いて縄文を充填する。57は水平口縁で、波状の沈線を巡らせて、余白に三叉文やステッキ状の沈線文を描く。安行3a式であろう。

58～70は安行式の粗製深鉢である。58は内湾口縁で、口縁外面に沈線を巡らせ、条線を施文しない。晩期前葉の土器であろう。59も内湾口縁で、口縁外面に押圧隆帯を巡らせる。

60～70は胴上半部に文様帯を持つ土器で、後期

末葉～晩期前葉の土器である。60は平行沈線の弧状モチーフを描く。61～63は対弧文で、63は沈線間を磨いて条線を擦り消している。64は平行沈線の紡錘文で、条線を施文しない。

65は平行沈線の弧状モチーフを入り組ませる。66～68は蛇行沈線文で、対弧文と組み合わせて用いている。69・70は押圧隆帯で文様を描く。

71～73は無文土器である。71は口端上面を平坦に整形している。72は製塩土器で、口縁が強く開く鉢である。内外面に篋状工具のナデ整形を施すが、外面には成形時の指頭王痕が残る。口端は指頭に摘み出した断面外削ぎ状の形態である。二次的な被熱の赤化がみられ、内面は部分的に剥落している。73も薄手の器壁で製塩土器とみられるが、二次的な被熱がみられない。口唇断面丸棒頭状で、軽微に肥厚して外屈する。

第65号住居跡出土土器（第227図356～358、第302図）

第227図356はキャリバー形の水平口縁深鉢で、口縁部～胴部中段まで残存する。水平口縁で、口縁直下に単沈線による楕円形区画文を描き、内部にL R単筋の縄文を施文する。区画の接点には楕円形の貼り瘤を逆三角形に配置する。曾谷式であろう。

357は安行1式の砲弾形深鉢である。口縁外面に帯縄文を巡らせて多段の文様帯を構成し、縦瘤を配する。地文はL R単筋の縄文である。

358は安行式の粗製深鉢である。口縁外面に半截竹管状工具の刻み隆帯を巡らせ、胴上半部には平行沈線の弧状モチーフを描き、横位の弧状条線を施文する。晩期前葉の土器であろう。

第302図は破片資料である。

1は加曾利EⅢ式である。両側になぞりを加えた扁平な隆帯で口縁部に区画文を描き、胴部に幅広の擦り消し懸垂文を垂下させる。

2は加曾利B2式で、粗い地文縄文上に格子目

文を描く遠部第四類である。口縁内面に沈線を巡らせている。3は曾谷式である。口縁外面に段を持ち、多段の平行沈線文を巡らせる。

4・5は安行式の大波状口縁深鉢で、帯縄文の三角形区画文を描く安行3a式であろう。6は後期安行式の水平口縁深鉢で、口縁外面に帯縄文の区画文を描く。7・8は後期安行式の砲弾形深鉢で、7は縦瘤を配する安行1式、8も同時期のものであろう。

9・10は水平口縁の深鉢で、擦り消し縄文を描くものである。9は3個1単位の突起を配し、胴部に三叉文を描く安行3a式、10は2個1単位の突起を配し、胴部に横位の紡錘文を重畳させる安行2式である。

11は無文地に沈線文を描く土器で、安行3c式であろう。12は浅鉢ないし台付き鉢である。水平口縁で、口縁外面に縄文帯を持ち、胴部に入り組み三叉文を描く。安行3b式であろう。

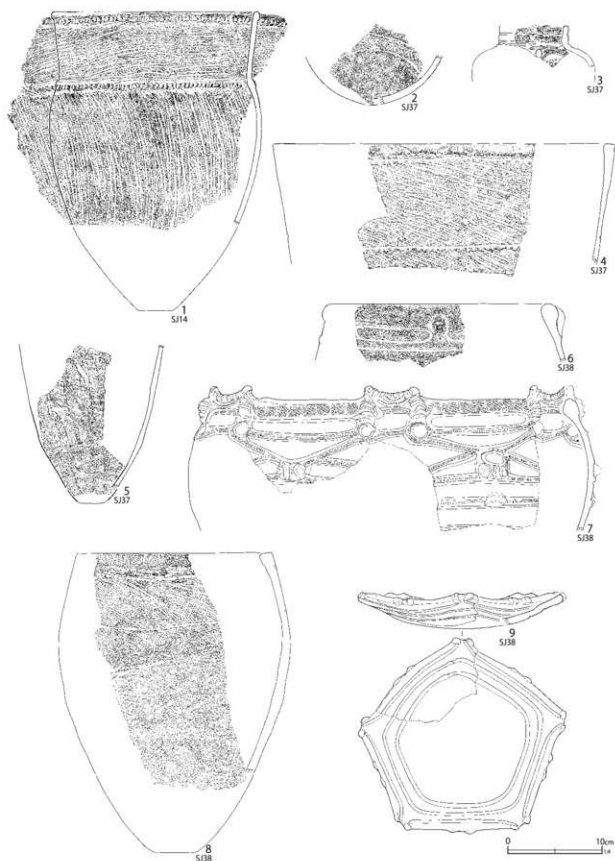
13～15は安行式の粗製深鉢である。13は口縁直立し、外面に沈線を巡らせる。後期安行式に伴う土器である。14は口縁外面に段を持って半截竹管状工具の刻みを巡らせ、無文地に沈線文を描く。晩期の土器であろう。15は刻み隆帯を巡らせ、胴部に擦り消し縄文を描く安行3b式である。

16は晩期の土器であろう。砲弾形の深鉢で、口端外屈し、胴部に斜位の条線を施文する。著しい被熱により器面が一部還元している。17は製塩土器である。薄手の器壁で、口端部は指頭で外削ぎ状に摘み出した後、寛で水平に整形している。外面は被熱により剥落を生じている。

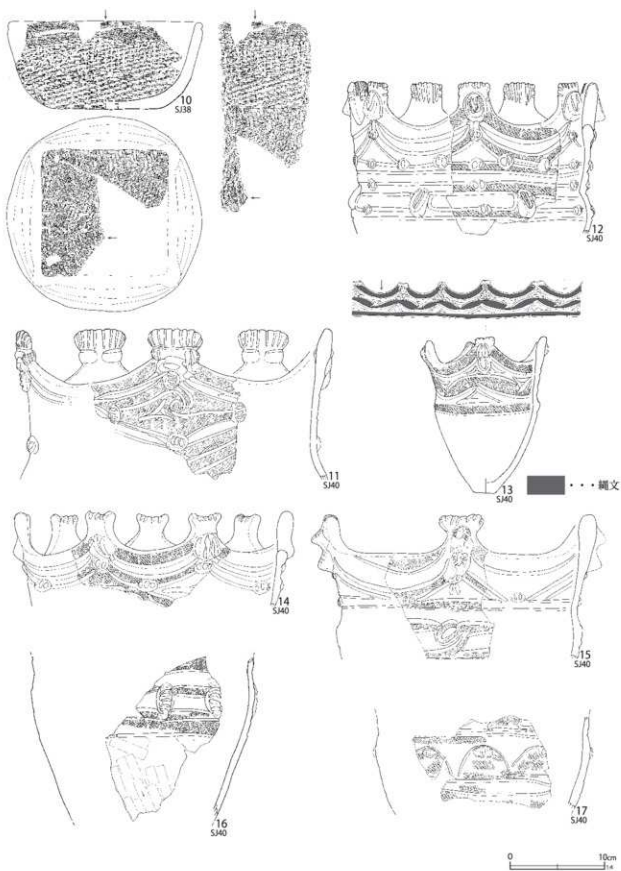
第67号住居跡出土土器（第302図）

1は早期末葉の土器である。0段多条の原体の回転方向を変えて、急角度の羽状縄文を構成する。

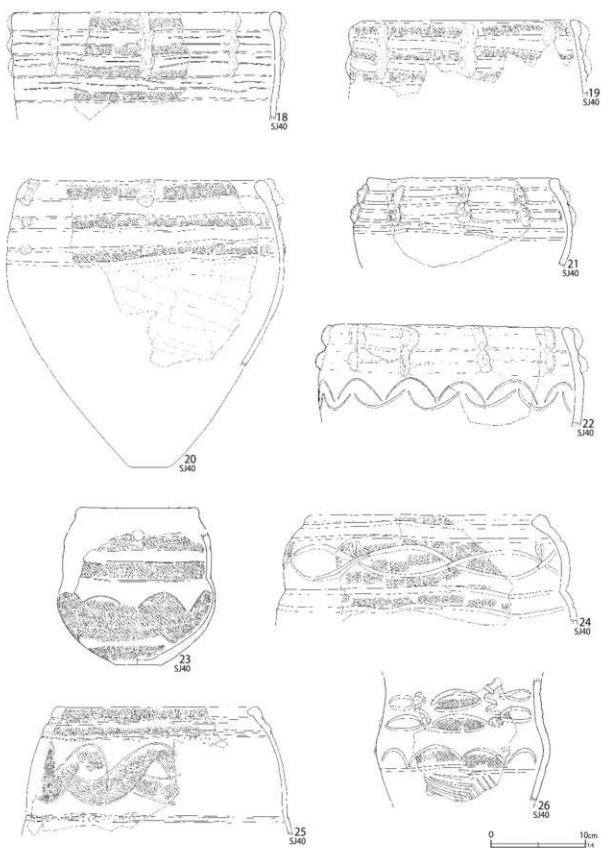
2は諸磯a式である。口縁外面に2段の爪形文を巡らせ、胴部には斜位の刻み目文と爪形文を重畳させる。



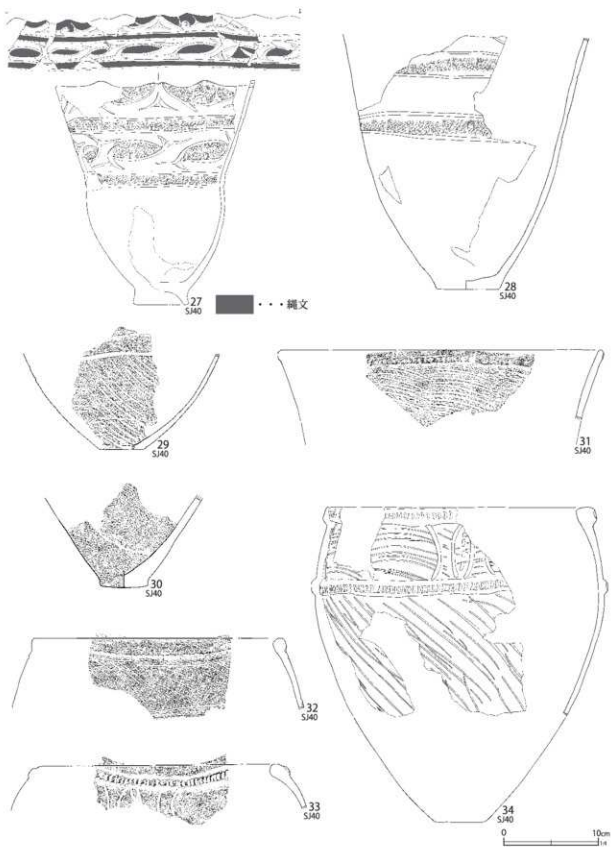
第191図 住居跡出土土器（1）



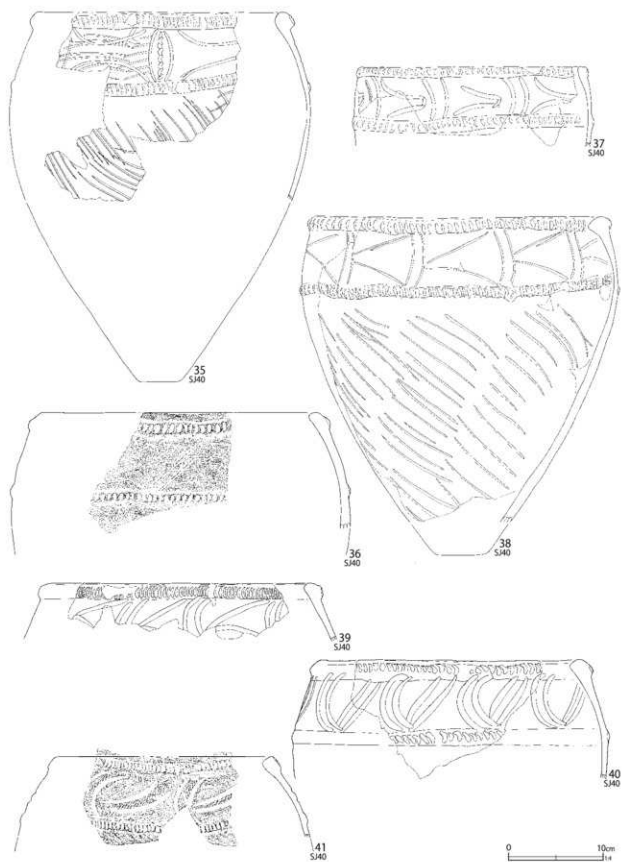
第192図 住居跡出土土器 (2)



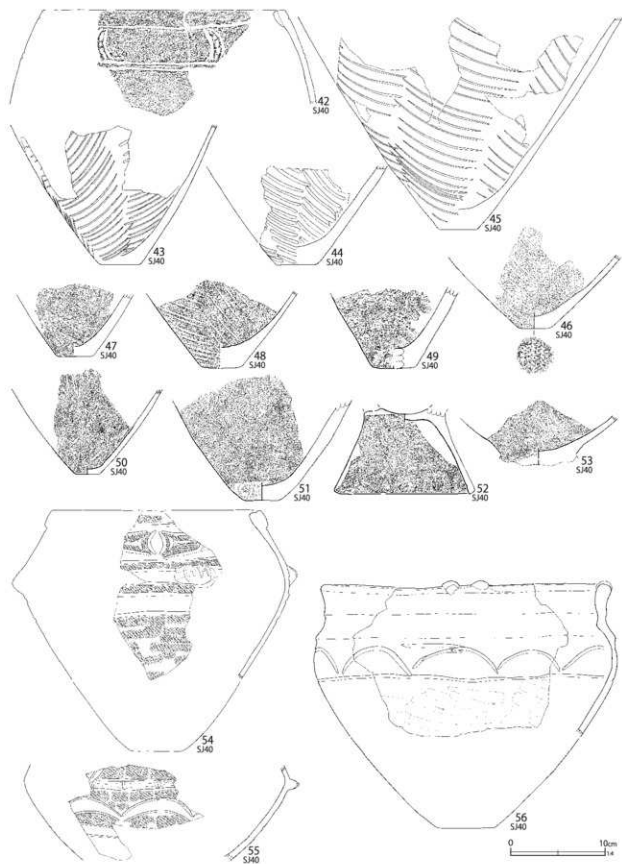
第193図 住居跡出土土器（3）



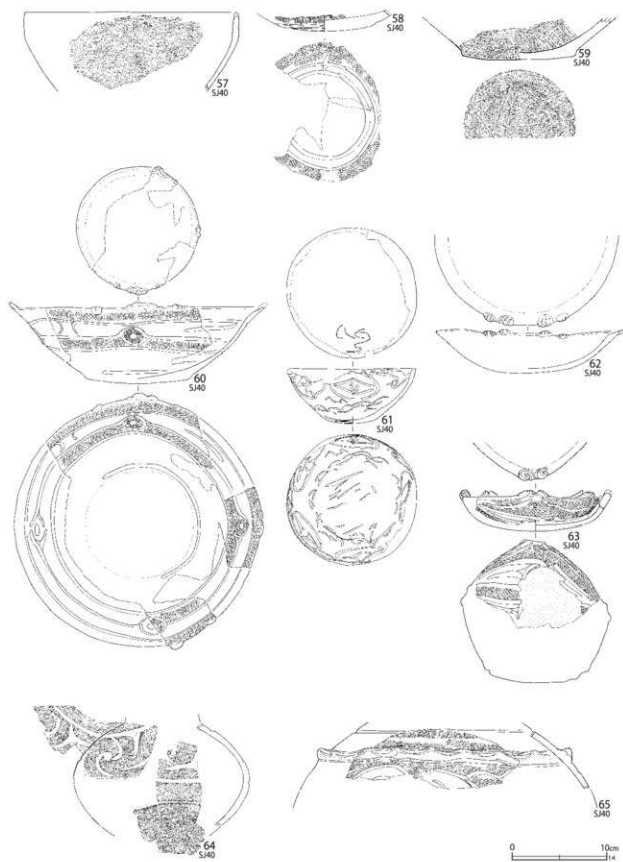
第194図 住居跡出土土器（4）



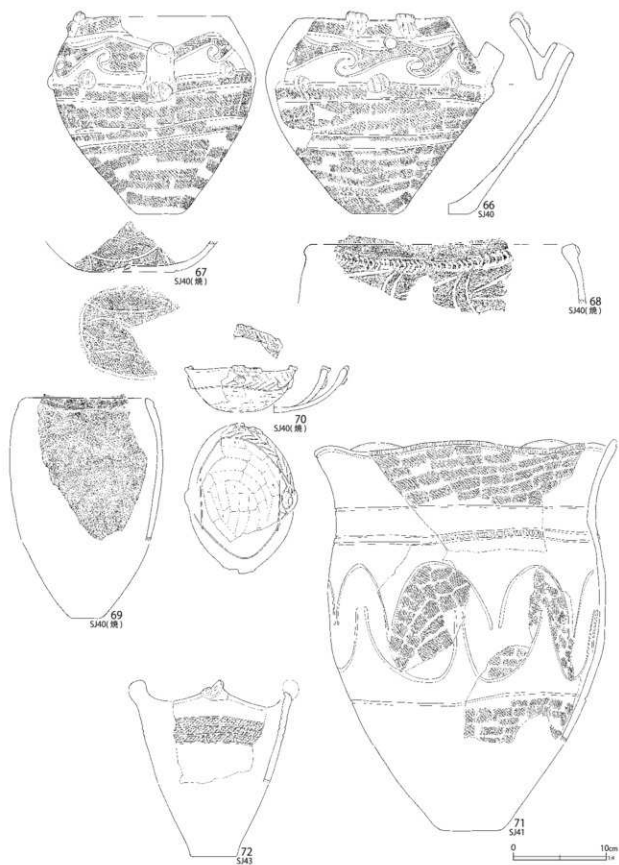
第195図 住居跡出土土器 (5)



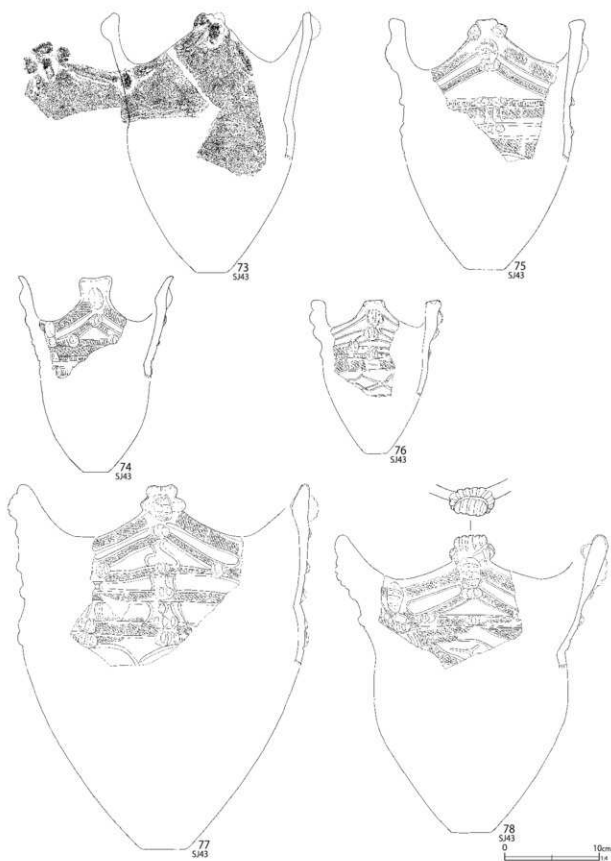
第196圖 住居跡出土土器（6）



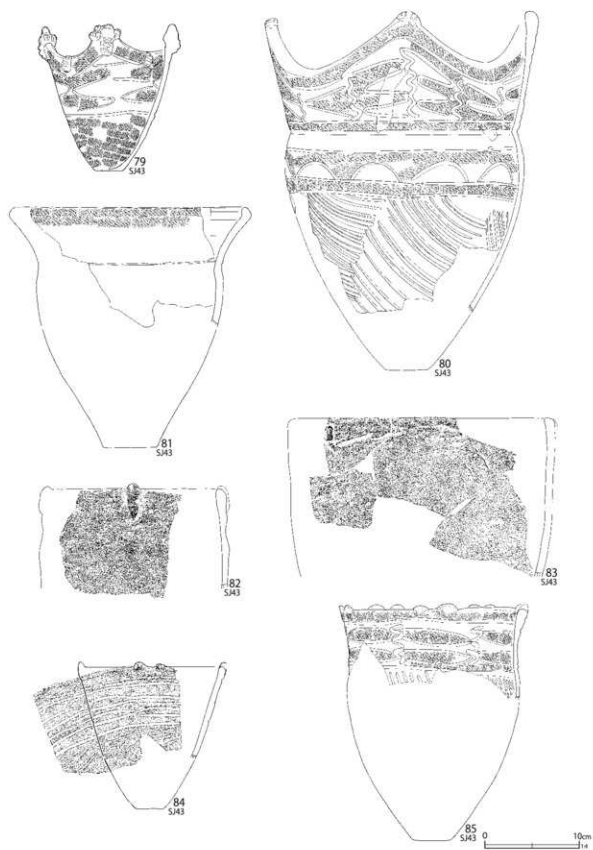
第197图 住居跡出土土器(7)



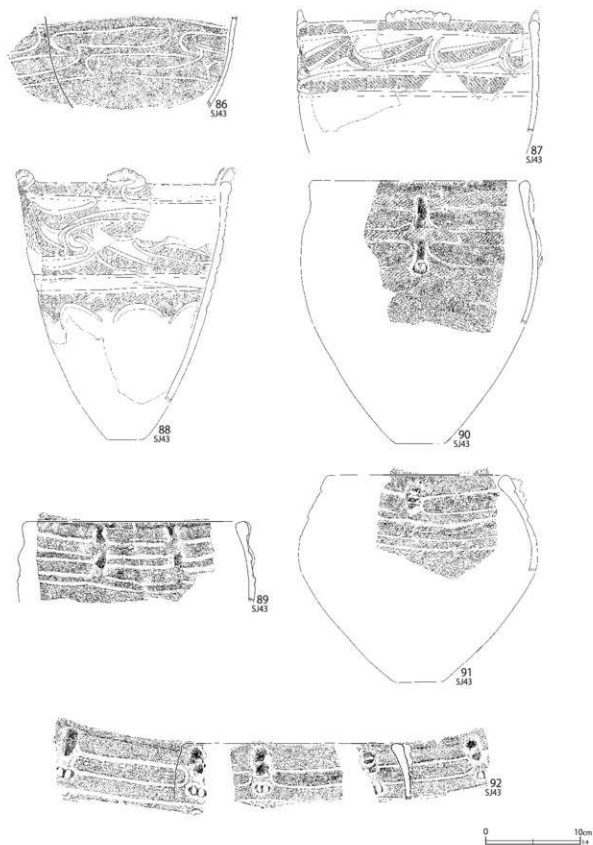
第198図 住居跡出土土器(8)



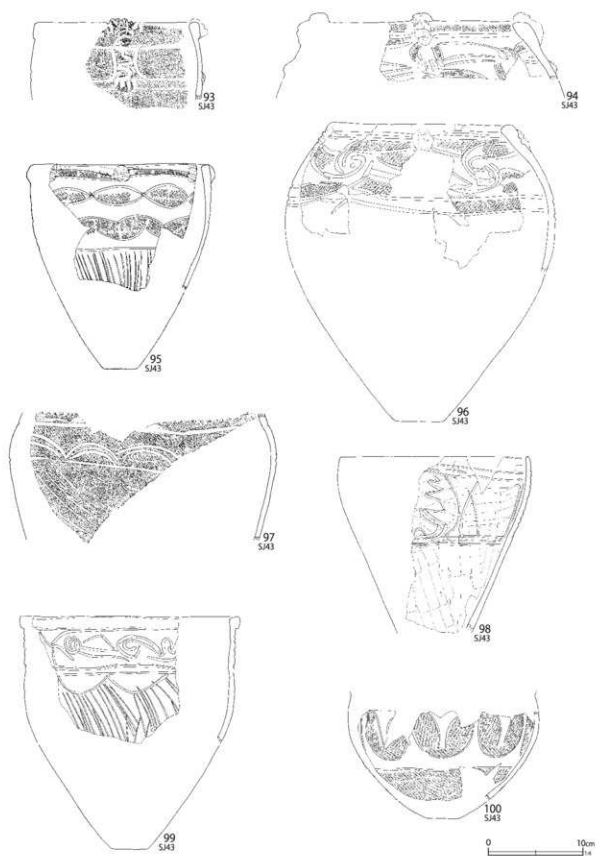
第199図 住居跡出土土器（9）



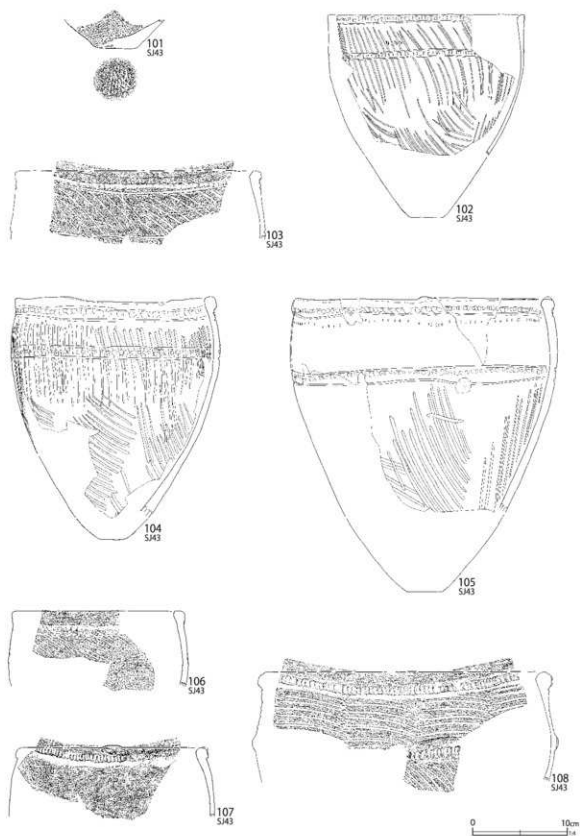
第200図 住居跡出土土器 (10)



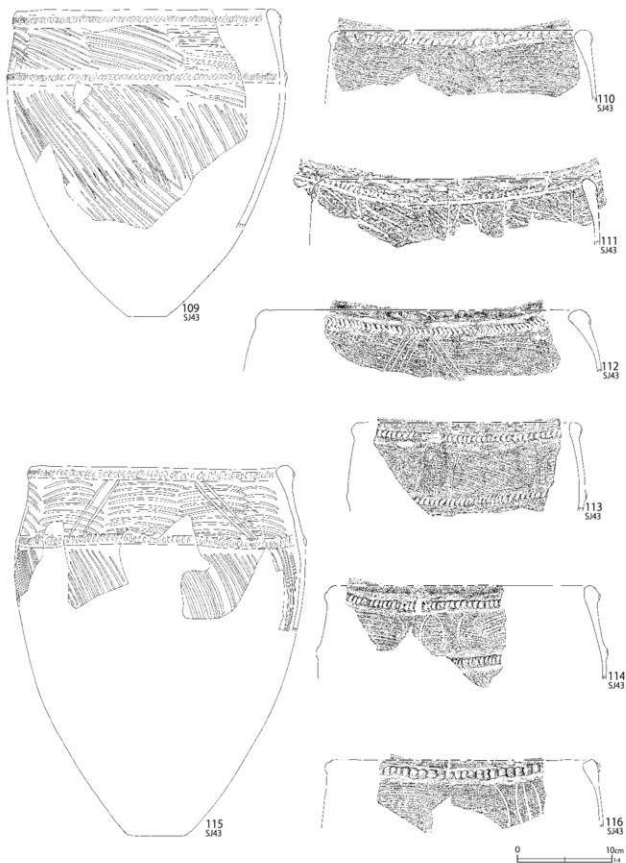
第201図 住居跡出土土器 (11)



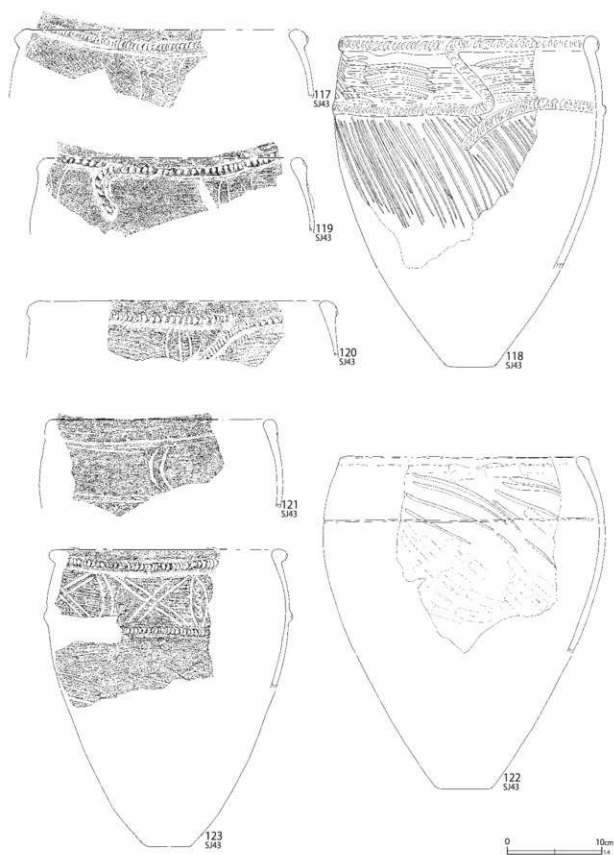
第202圖 住居跡出土土器 (12)



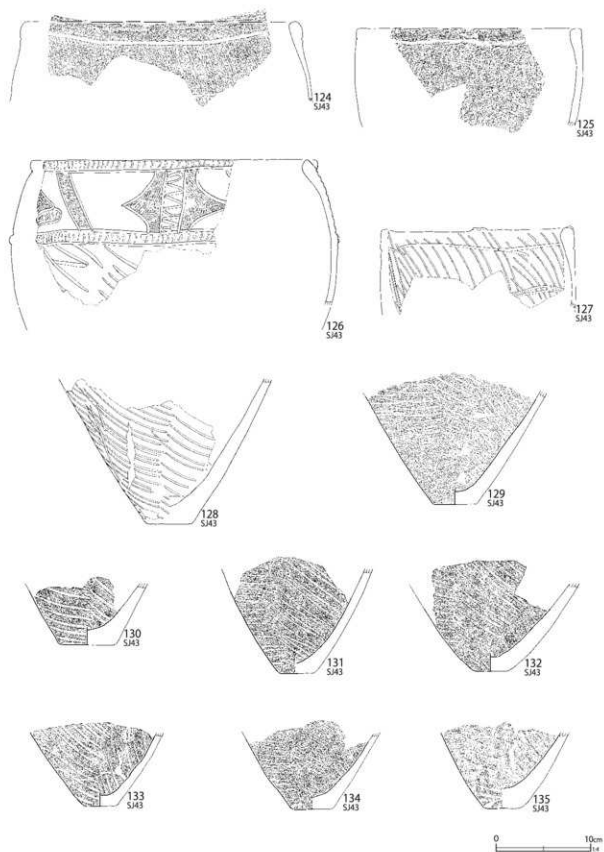
第203図 住居跡出土土器 (13)



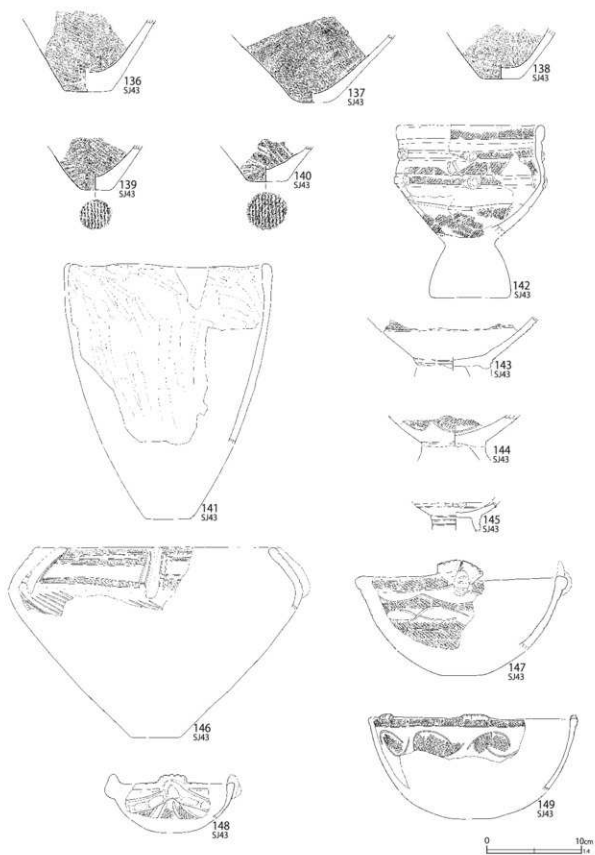
第204図 住居跡出土土器 (14)



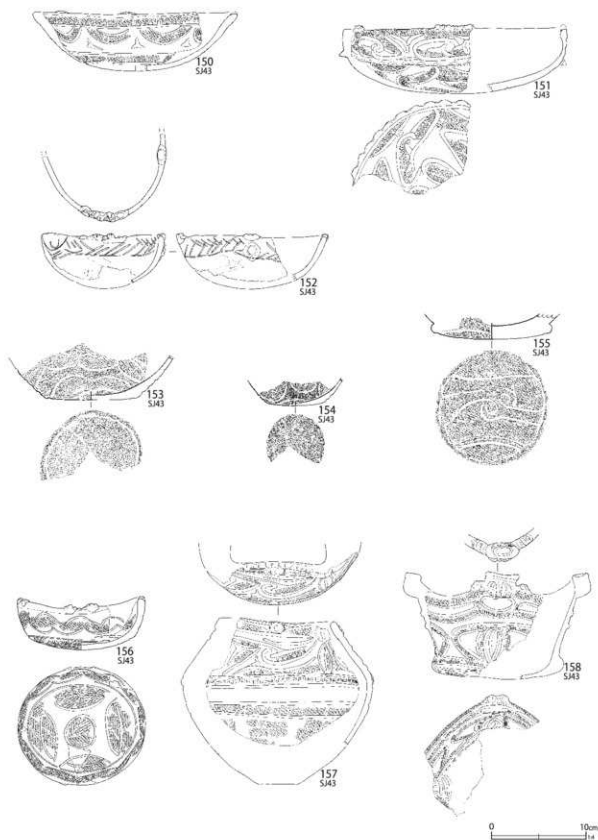
第206図 住居跡出土土器 (15)



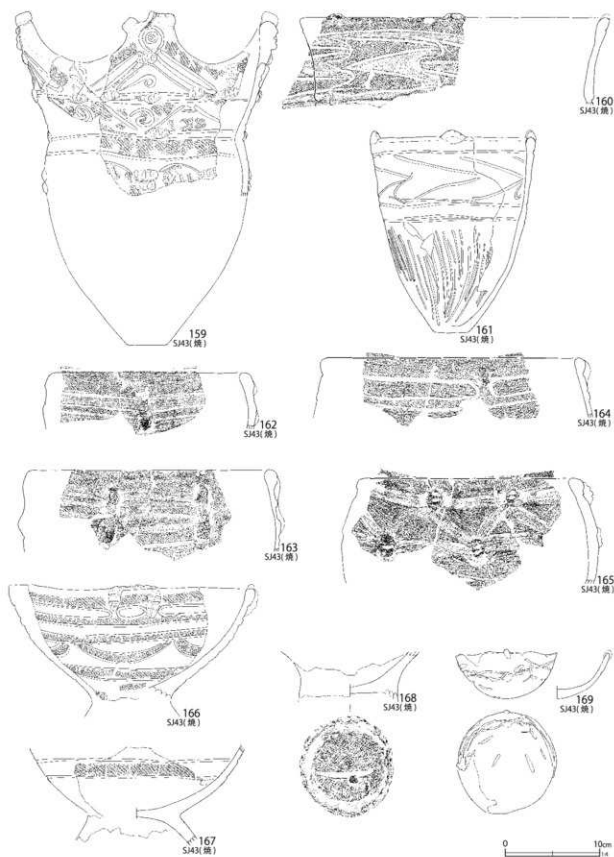
第206圖 住居跡出土土器 (16)



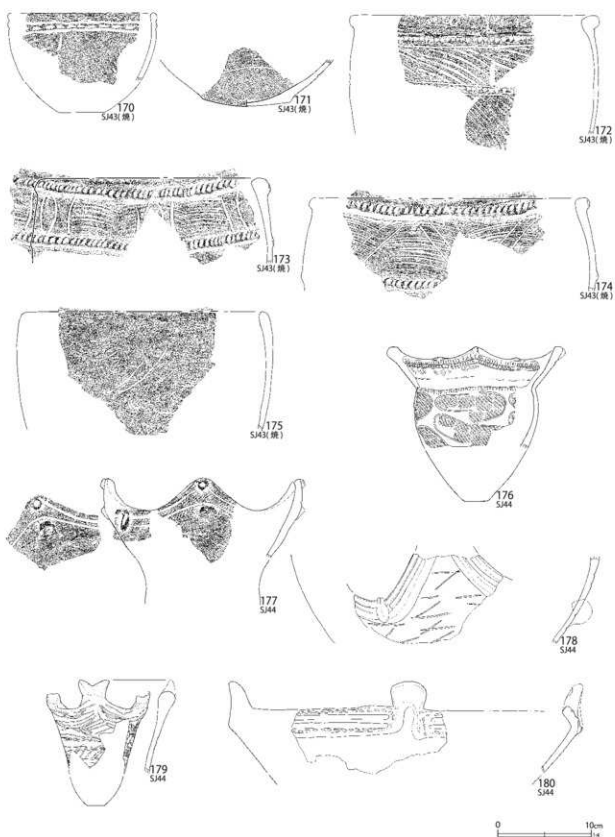
第207図 住居跡出土土器 (17)



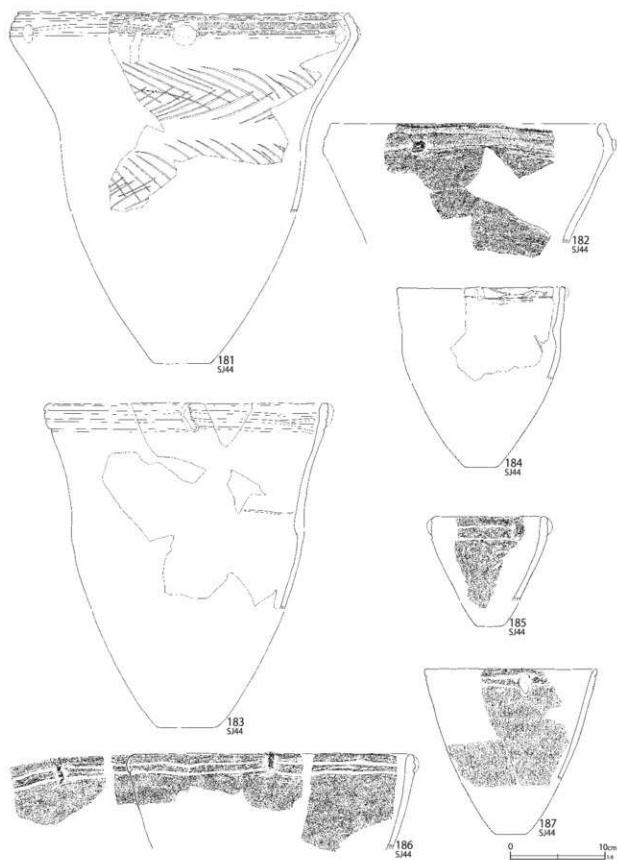
第208図 住居跡出土土器 (18)



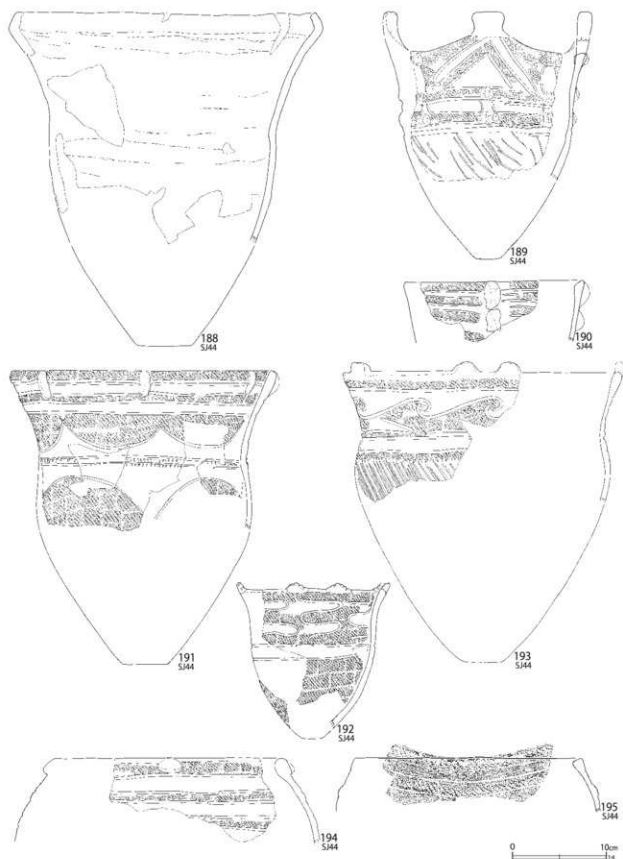
第209図 住居跡出土土器 (19)



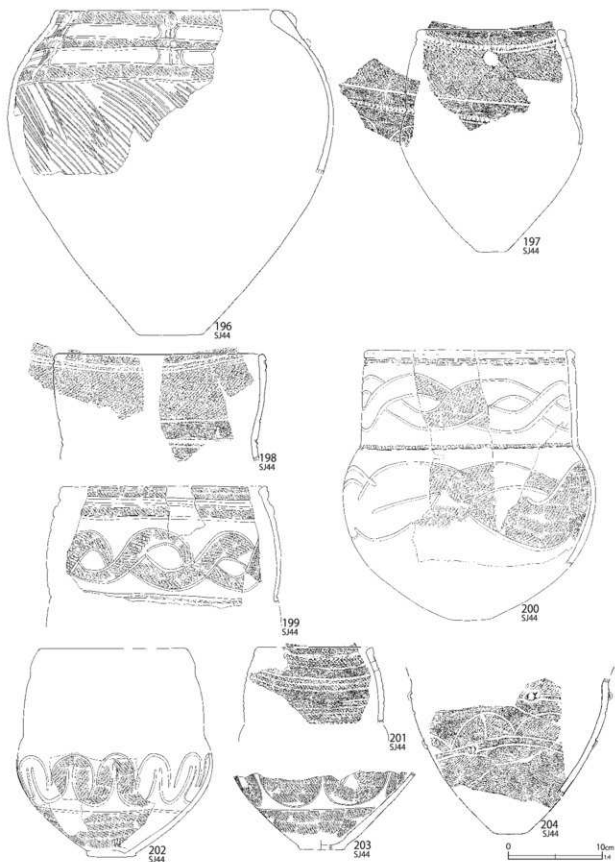
第210图 住居跡出土土器 (20)



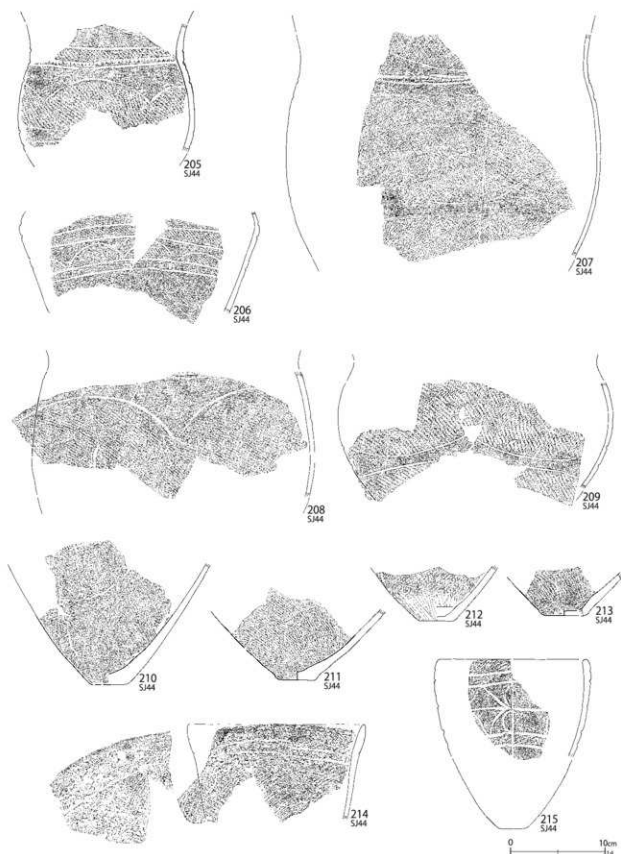
第211図 住居跡出土土器 (21)



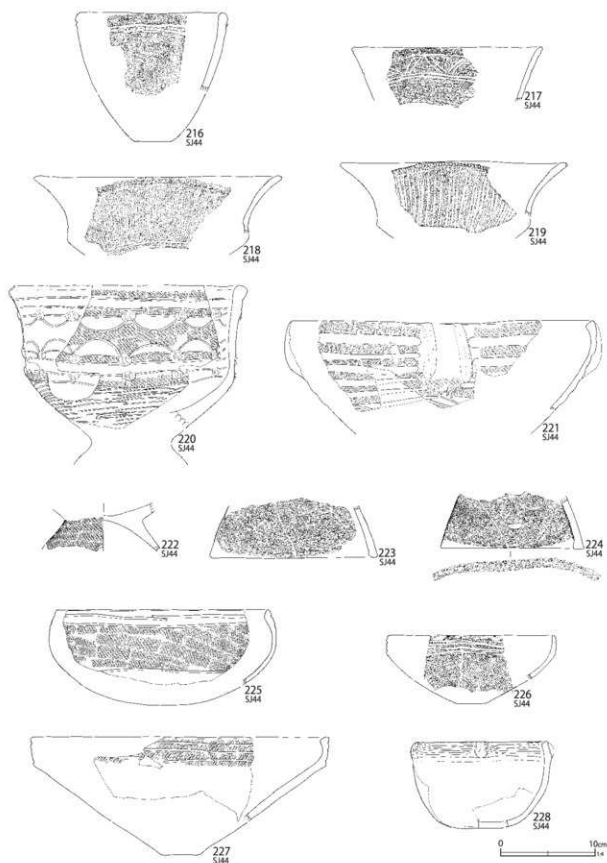
第212図 住居跡出土土器 (22)



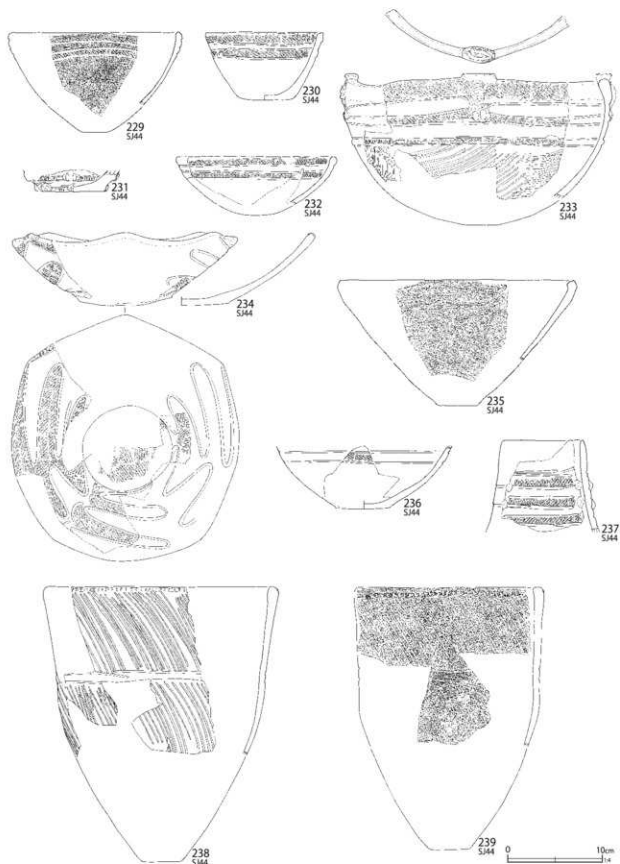
第213図 住居跡出土土器 (23)



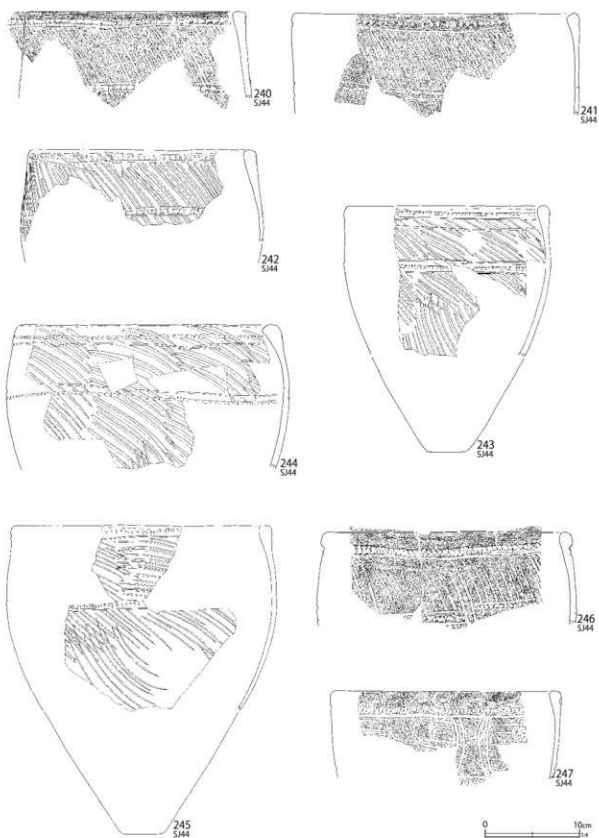
第214図 住居跡出土土器 (24)



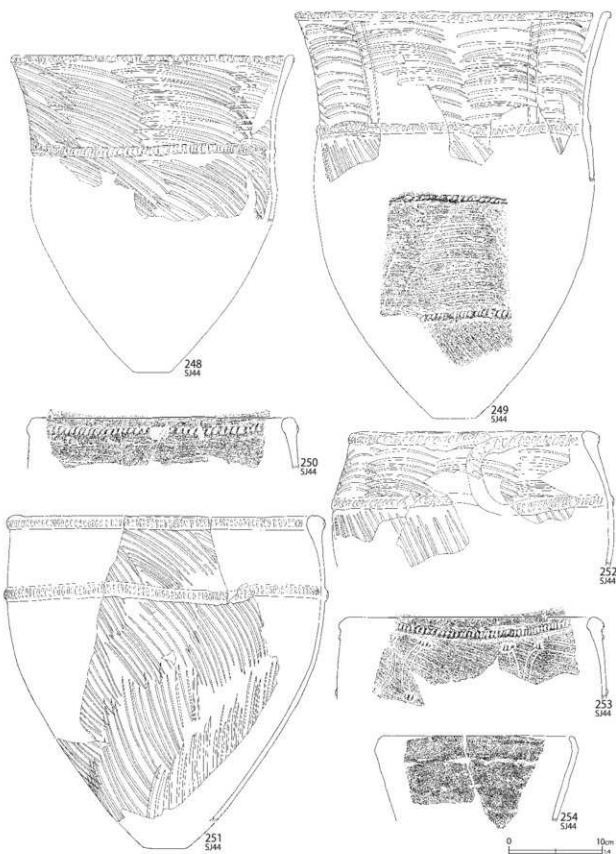
第215図 住居跡出土土器 (25)



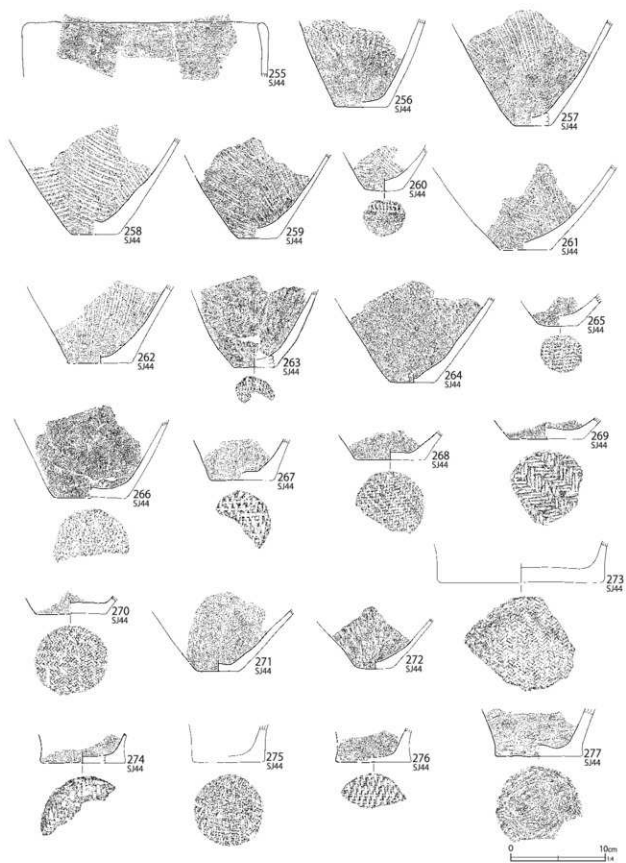
第216図 住居跡出土土器 (26)



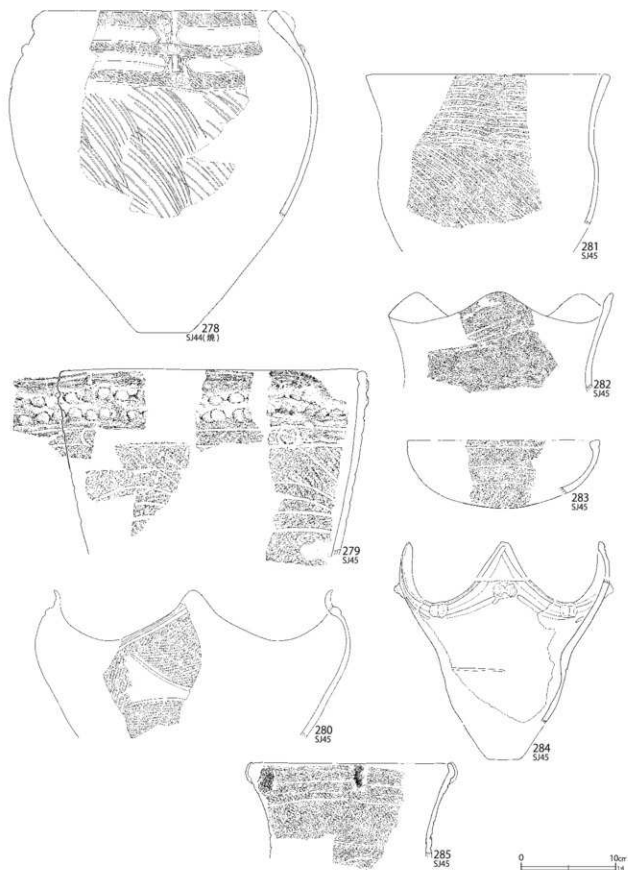
第217図 住居跡出土土器 (27)



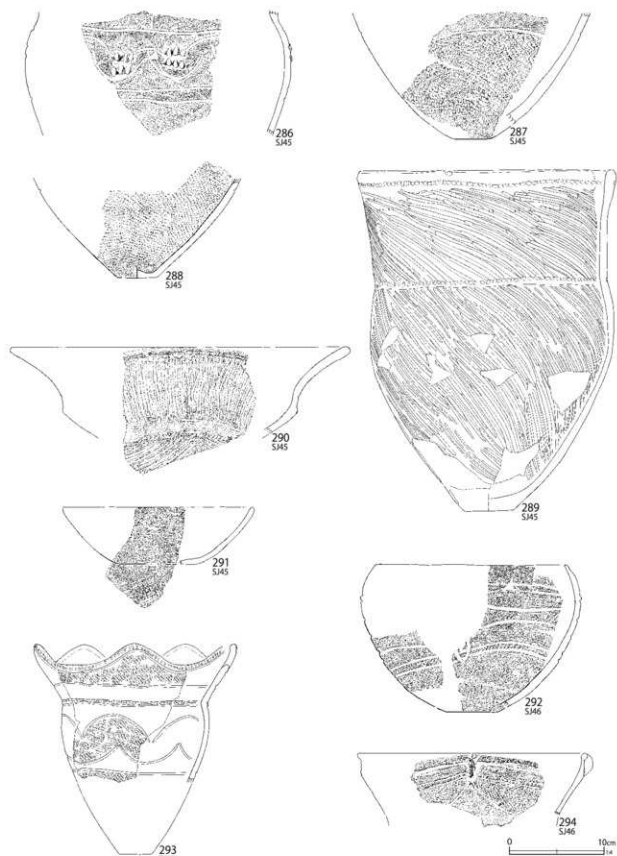
第218図 住居跡出土土器 (28)



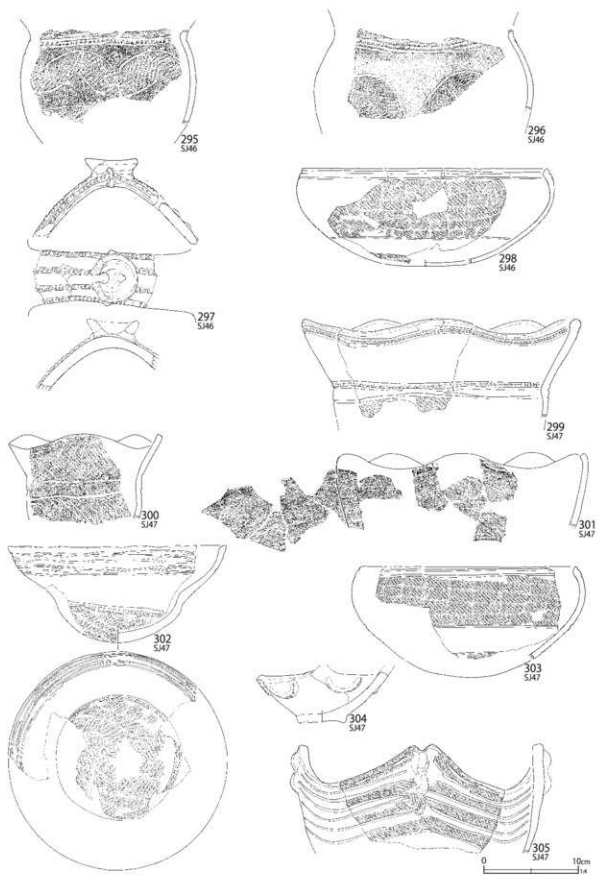
第219図 住居跡出土土器 (29)



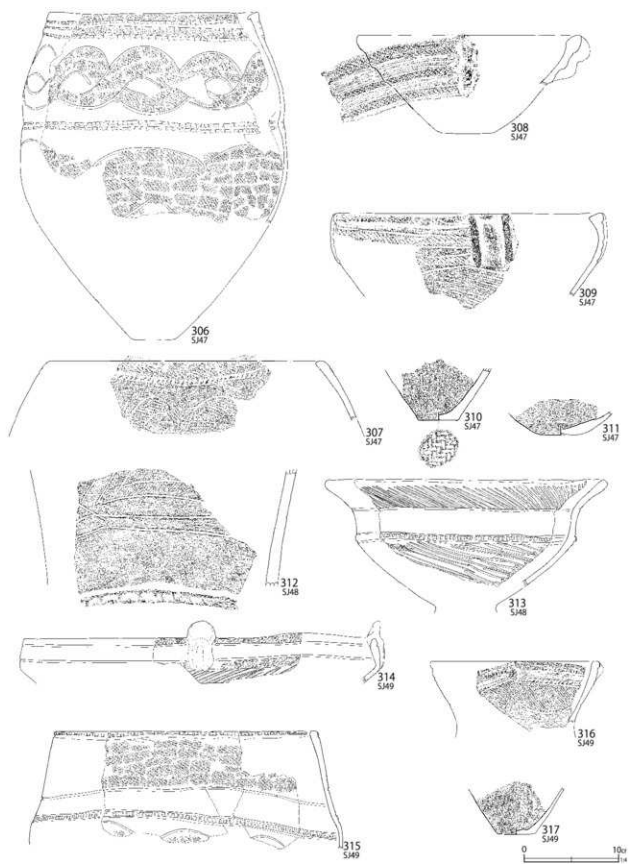
第220図 住居跡出土土器 (30)



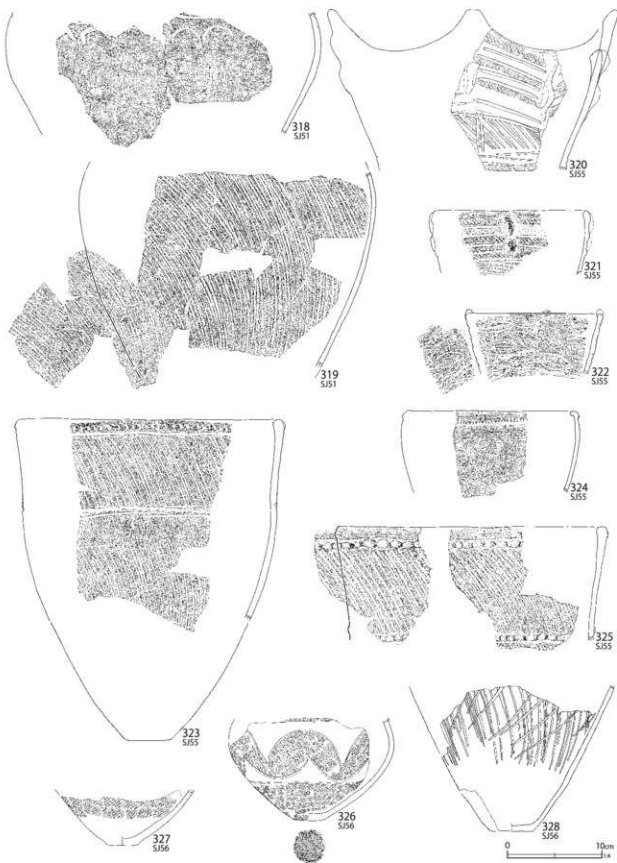
第221図 住居跡出土土器 (31)



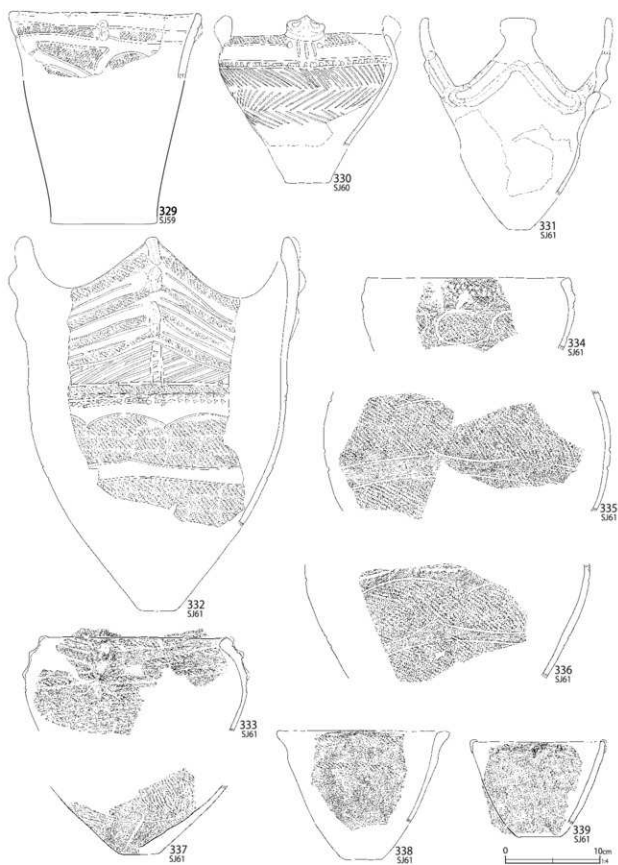
第222図 住居跡出土土器 (32)



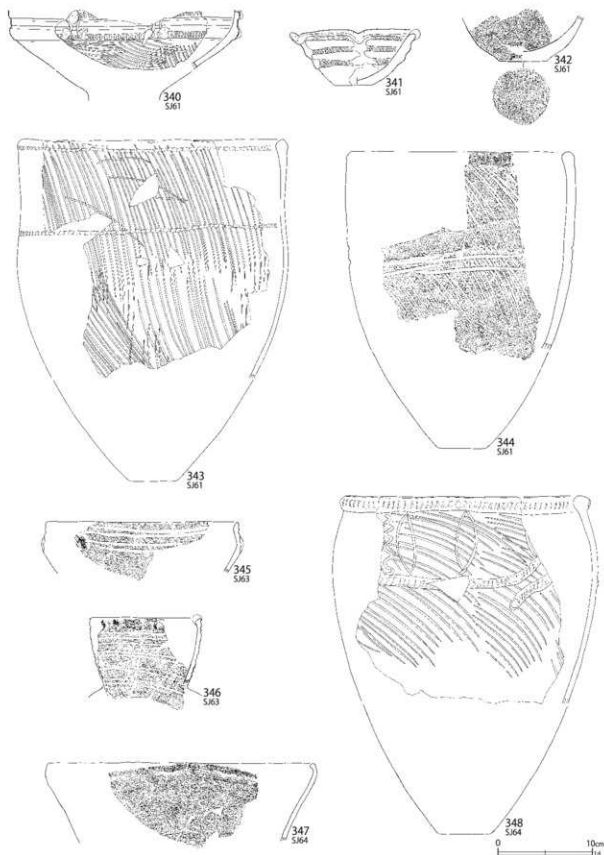
第223图 住居跡出土土器 (33)



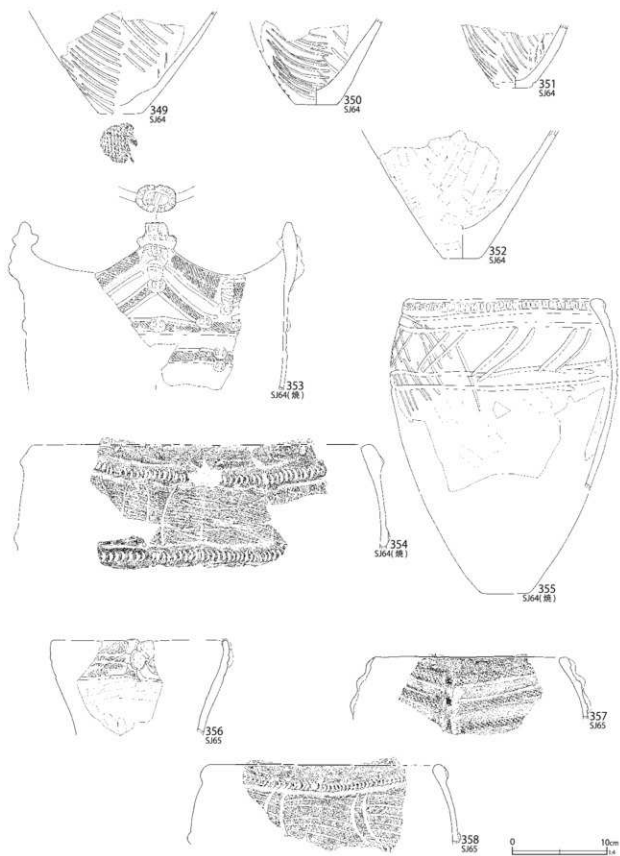
第224図 住居跡出土土器 (34)



第225図 住居跡出土土器 (35)



第226圖 住居跡出土土器 (36)



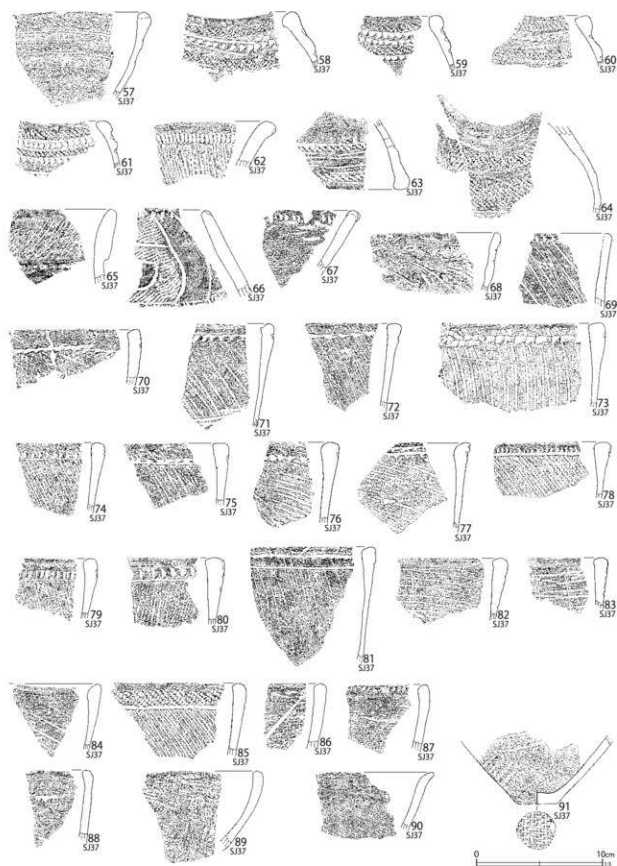
第227図 住居跡出土土器 (37)



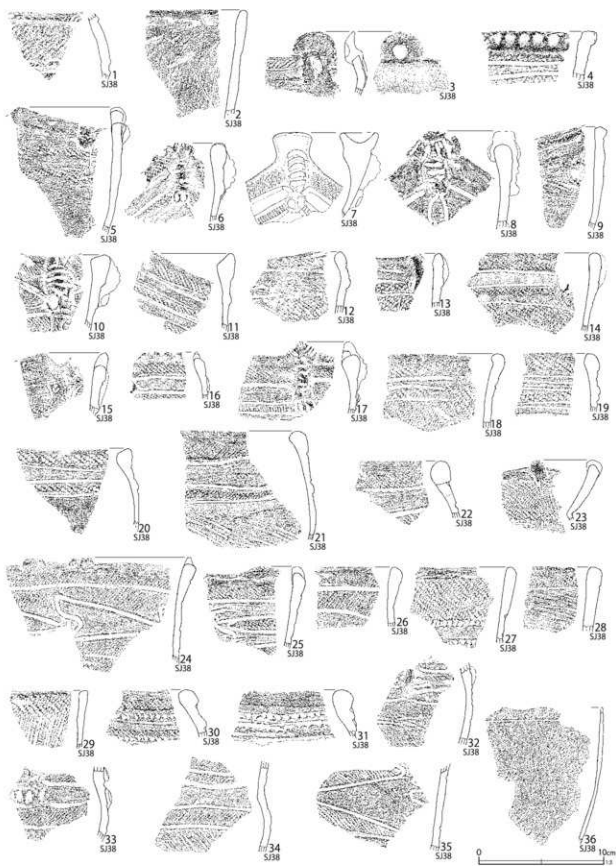
第228図 住居跡出土土器 (38)



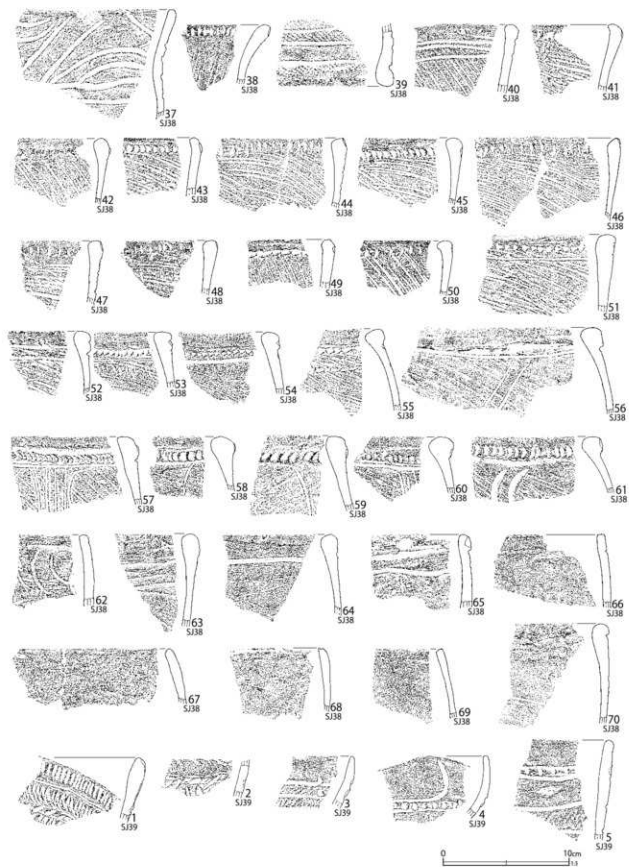
第229图 住居跡出土土器 (39)



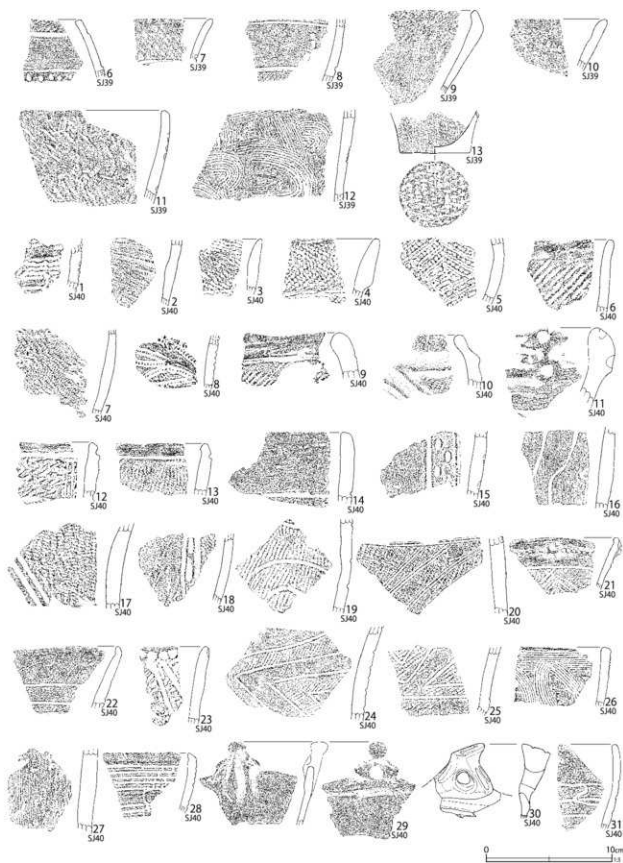
第230図 住居跡出土土器 (40)



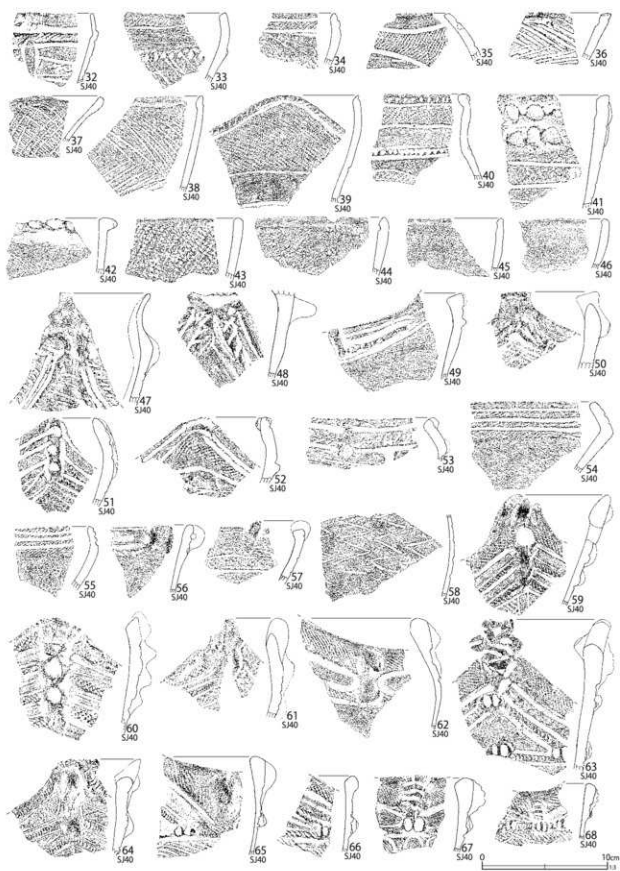
第231図 住居跡出土土器 (41)



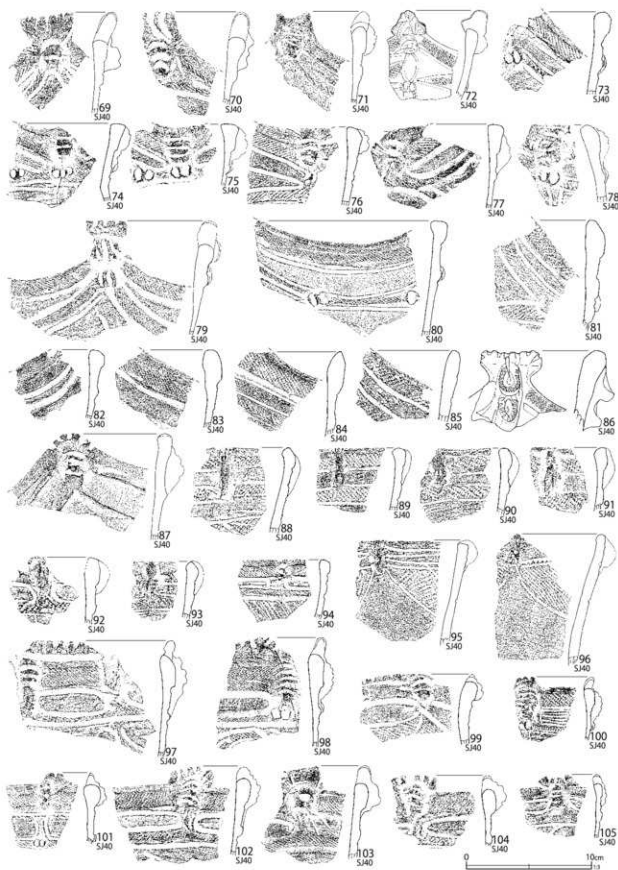
第232図 住居跡出土土器 (42)



第233図 住居跡出土土器 (43)



第234圖 住居跡出土土器 (44)



第235図 住居跡出土土器 (45)



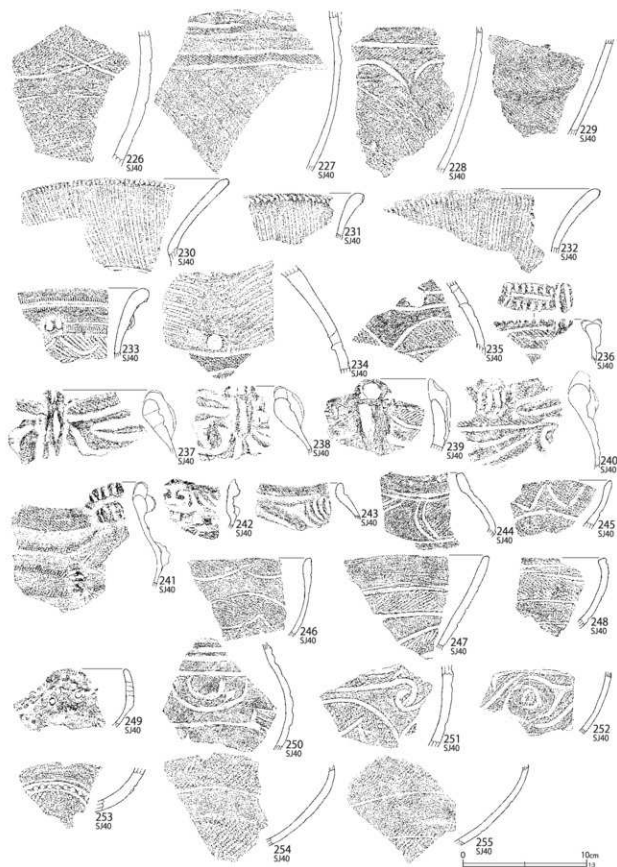
第236図 住居跡出土土器 (46)



第237图 住居跡出土土器 (47)



第238図 住居跡出土土器 (48)



第239图 住居跡出土土器 (49)



第240図 住居跡出土土器 (50)



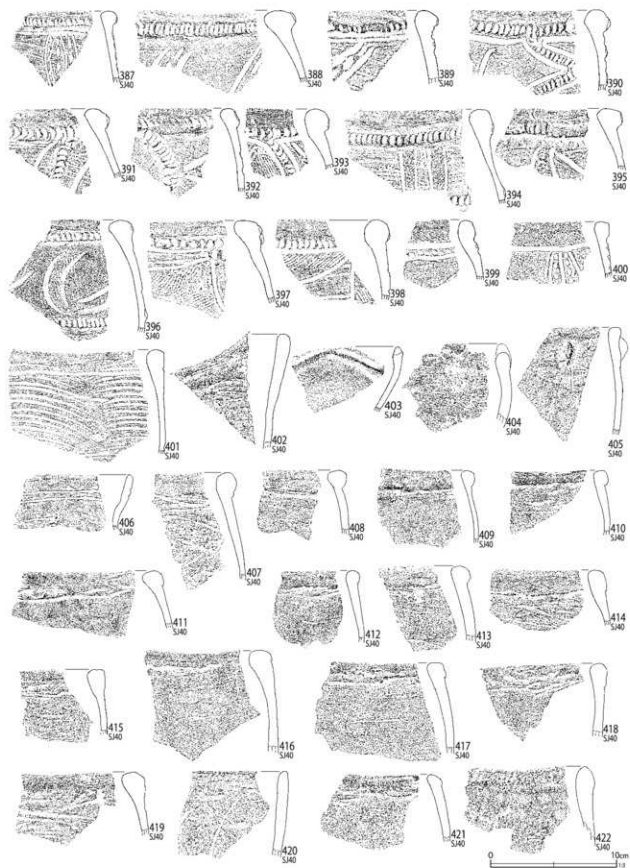
第241图 住居跡出土土器 (51)



第242図 住居跡出土土器 (52)



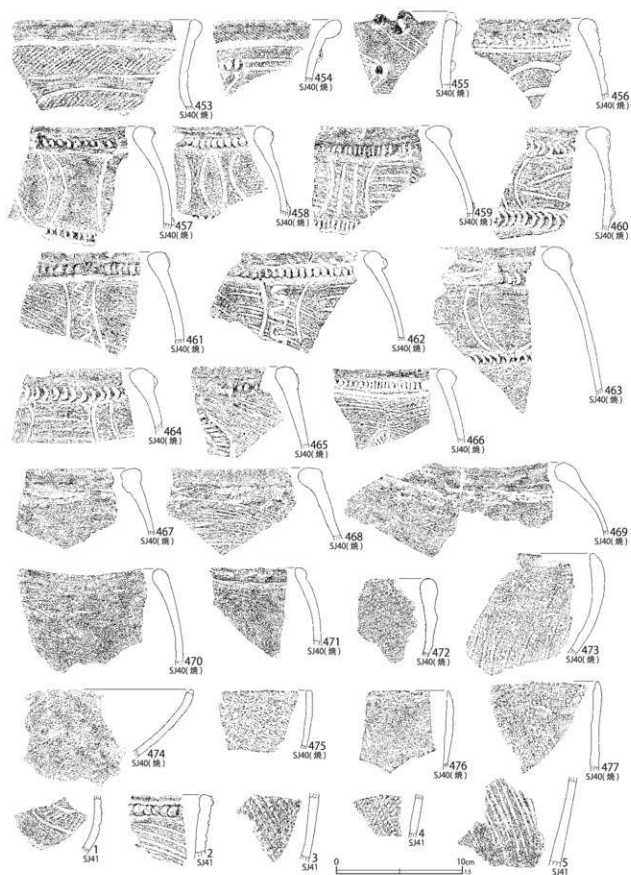
第243図 住居跡出土土器 (53)



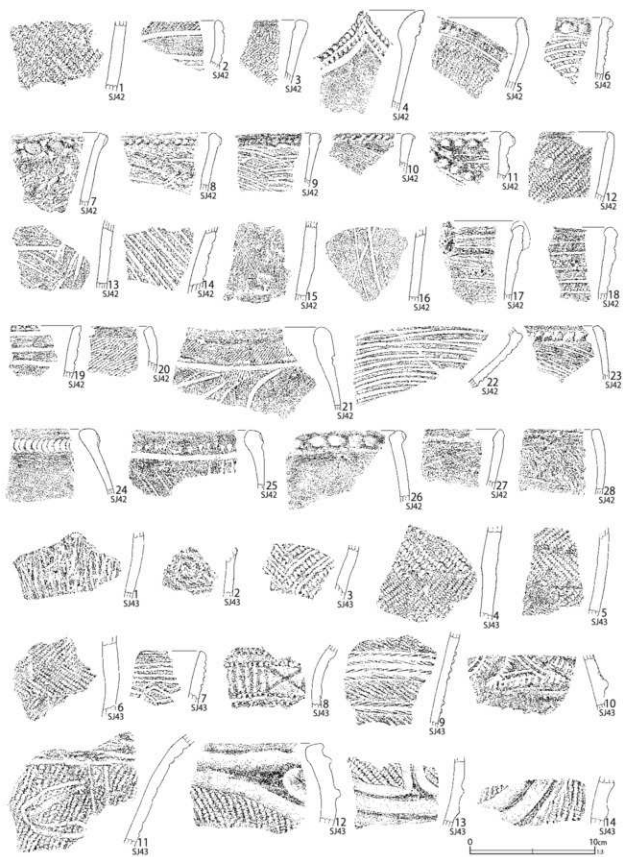
第244图 住居跡出土土器 (54)



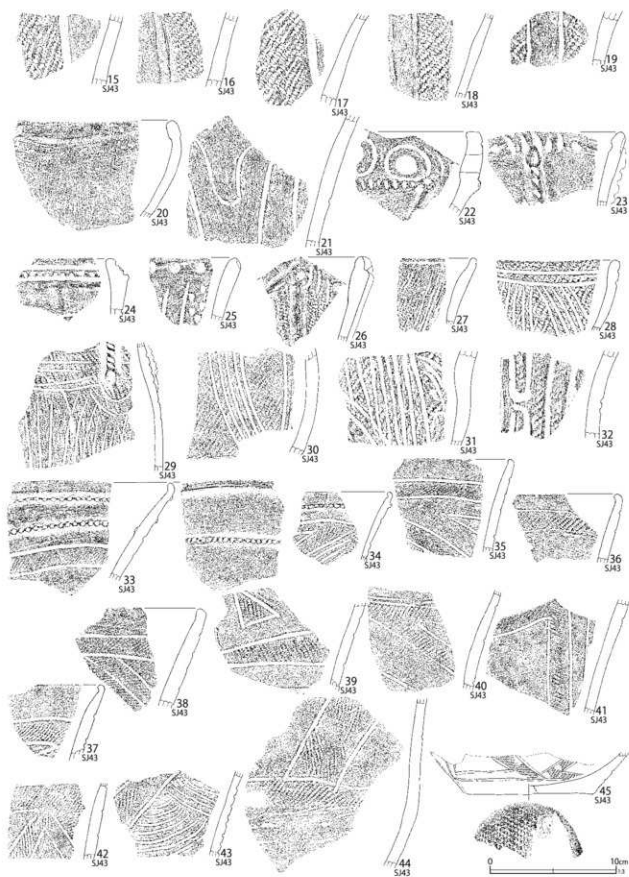
第245図 住居跡出土土器 (55)



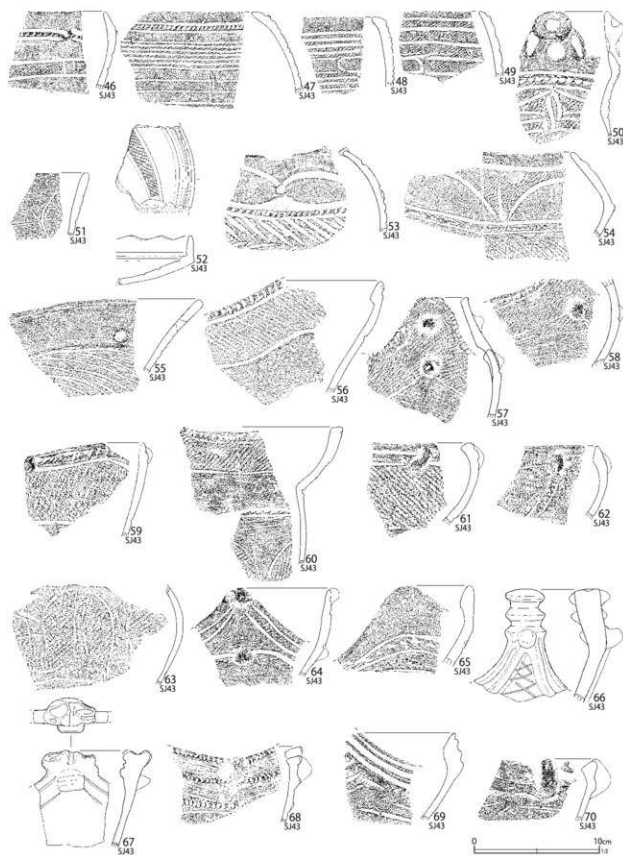
第246图 住居跡出土土器 (56)



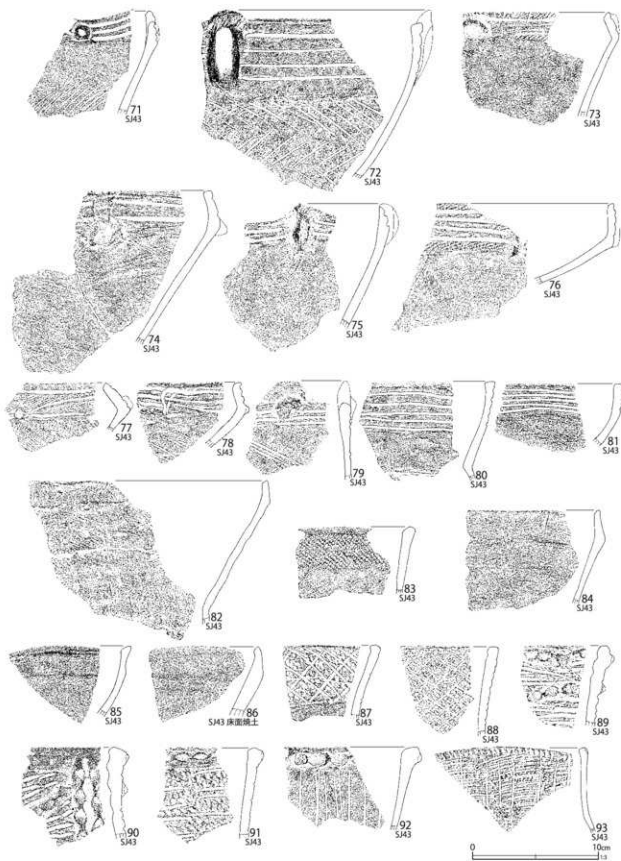
第247图 住居跡出土土器 (57)



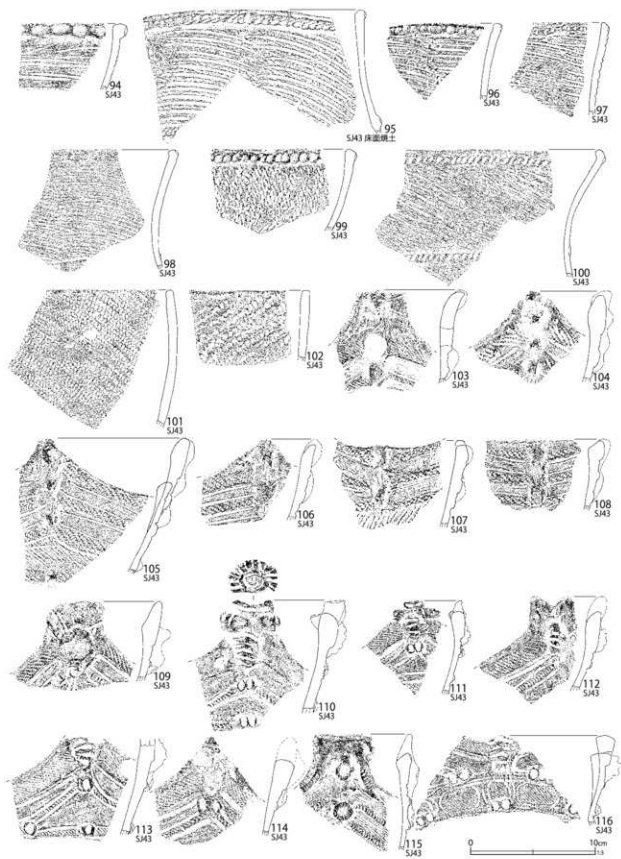
第248圖 住居跡出土土器 (58)



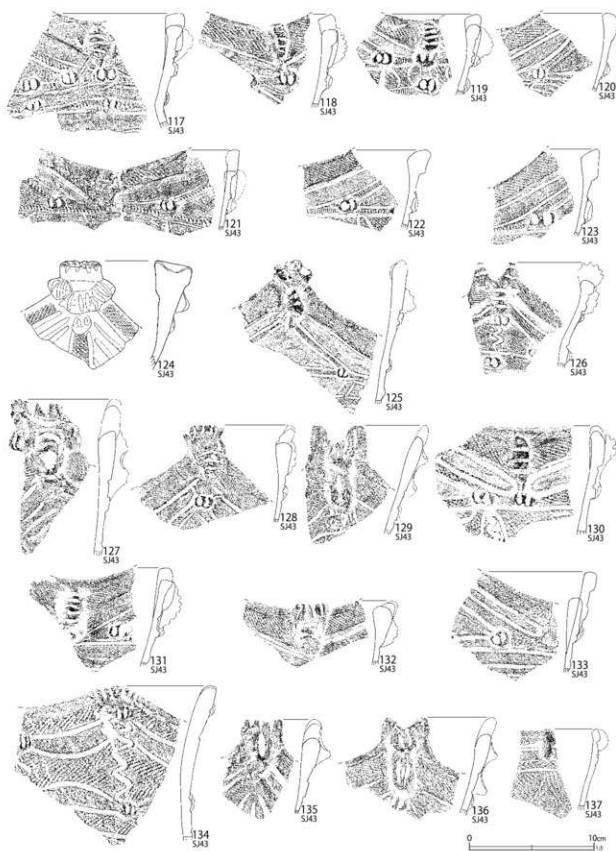
第249図 住居跡出土土器 (59)



第250図 住居跡出土土器 (60)



第251图 住居跡出土土器 (61)



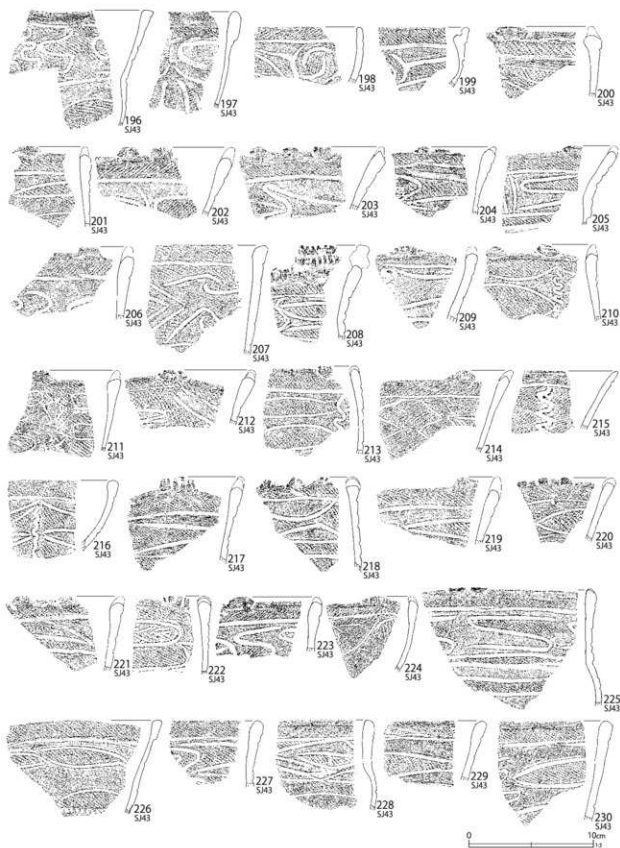
第252図 住居跡出土土器 (62)



第253图 住居跡出土土器 (63)



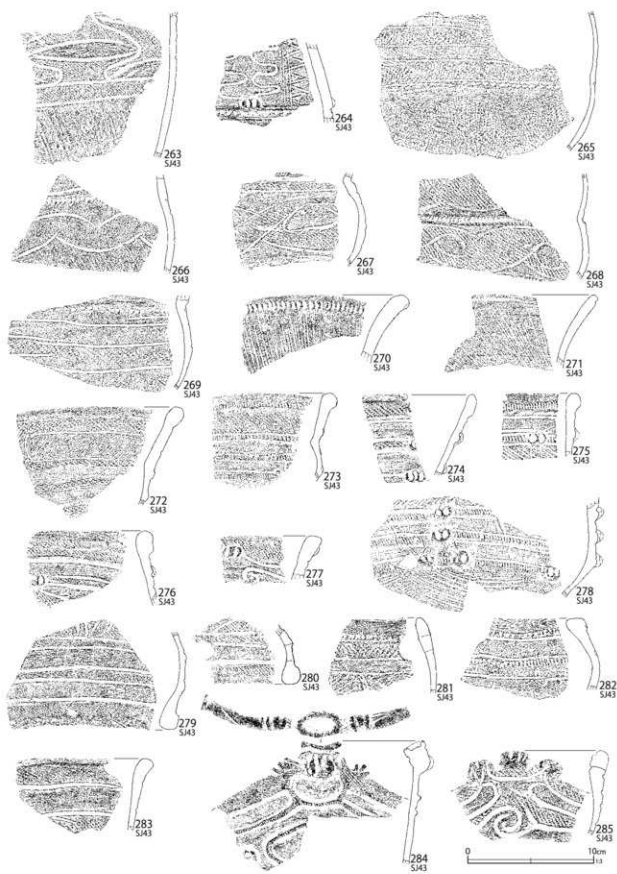
第254図 住居跡出土土器 (64)



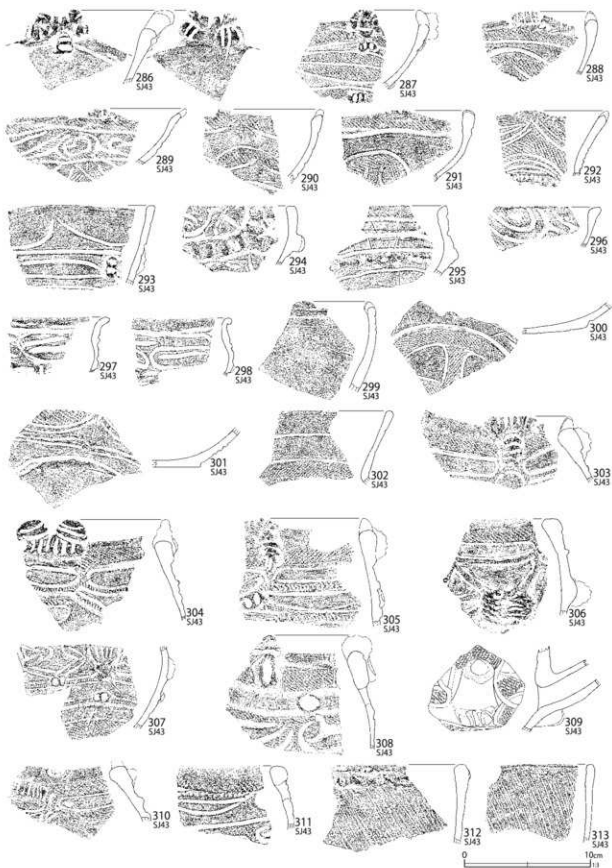
第255図 住居跡出土土器 (65)



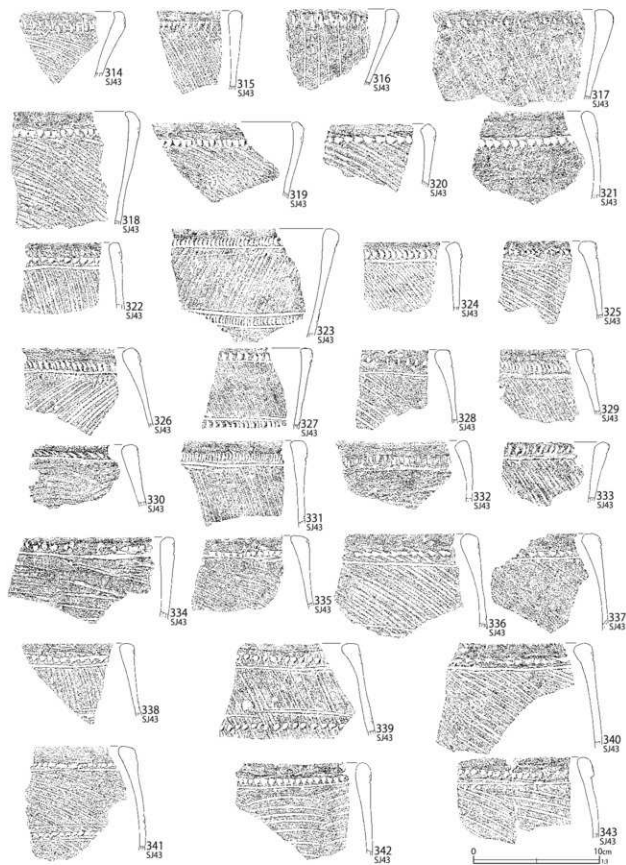
第256図 住居跡出土土器 (66)



第257图 住居跡出土土器 (67)



第258図 住居跡出土土器 (68)



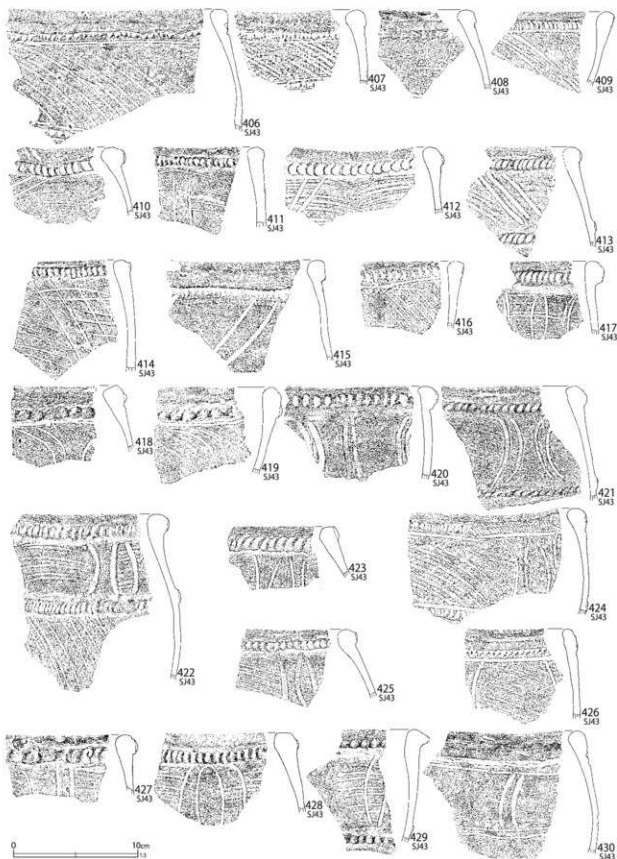
第259图 住居跡出土土器 (69)



第260圖 住居跡出土土器 (70)



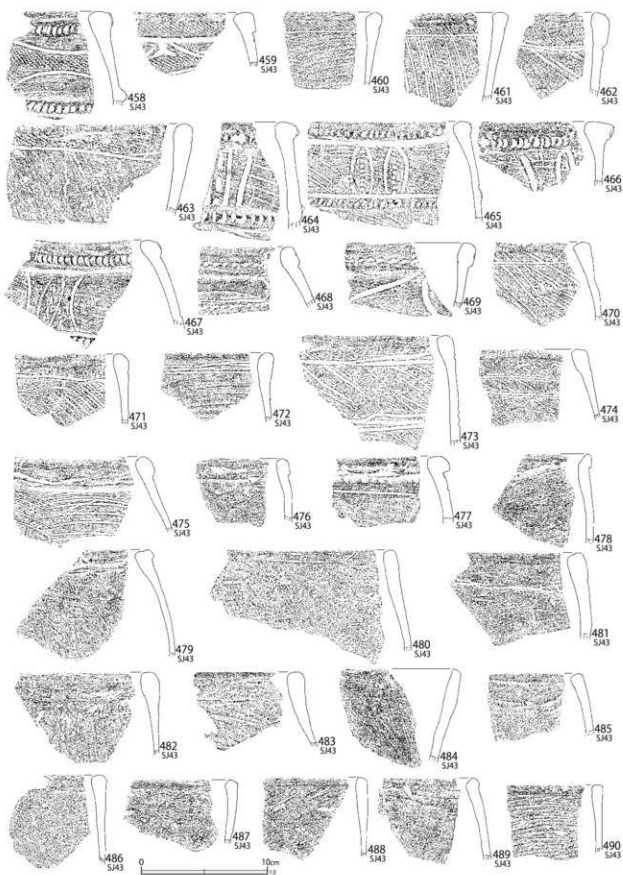
第261图 住居跡出土土器 (71)



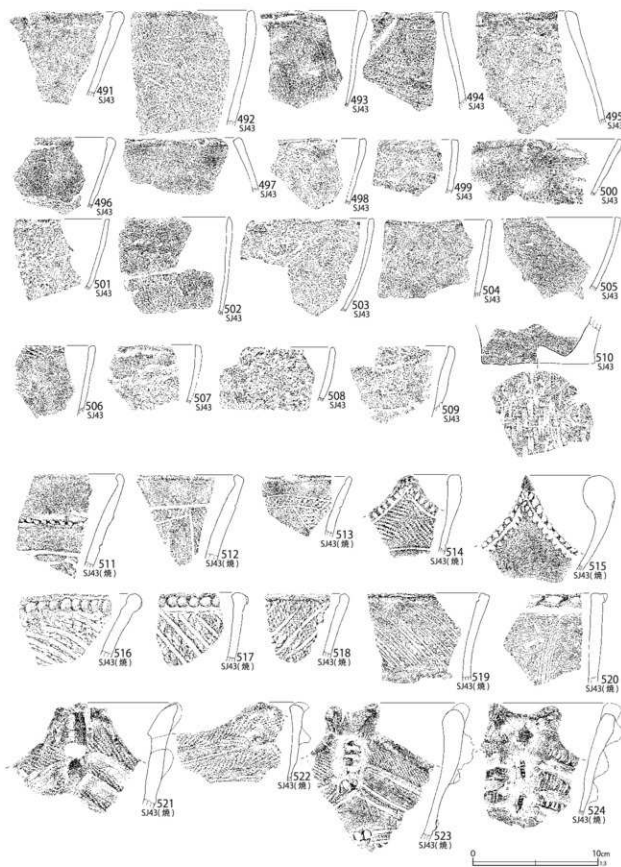
第262図 住居跡出土土器 (72)



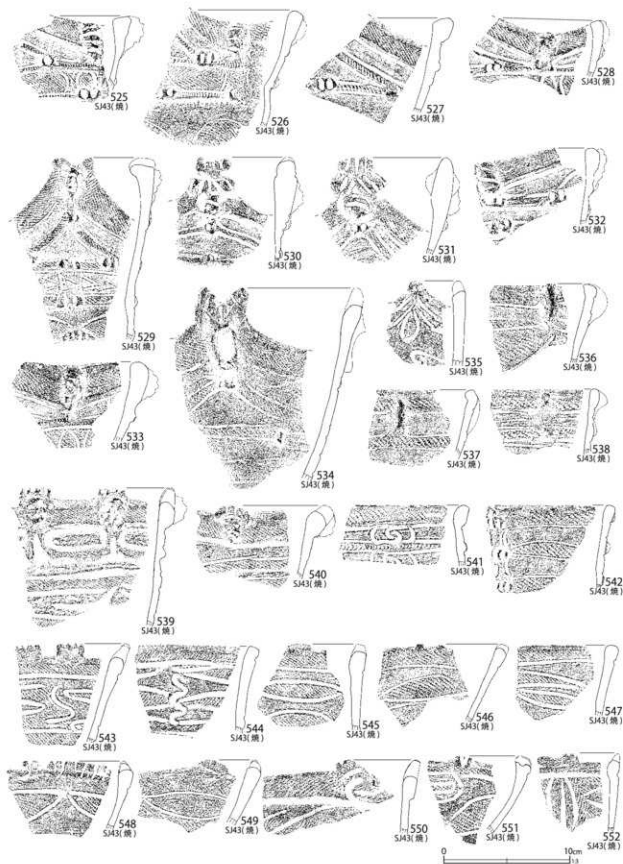
第263图 住居跡出土土器 (73)



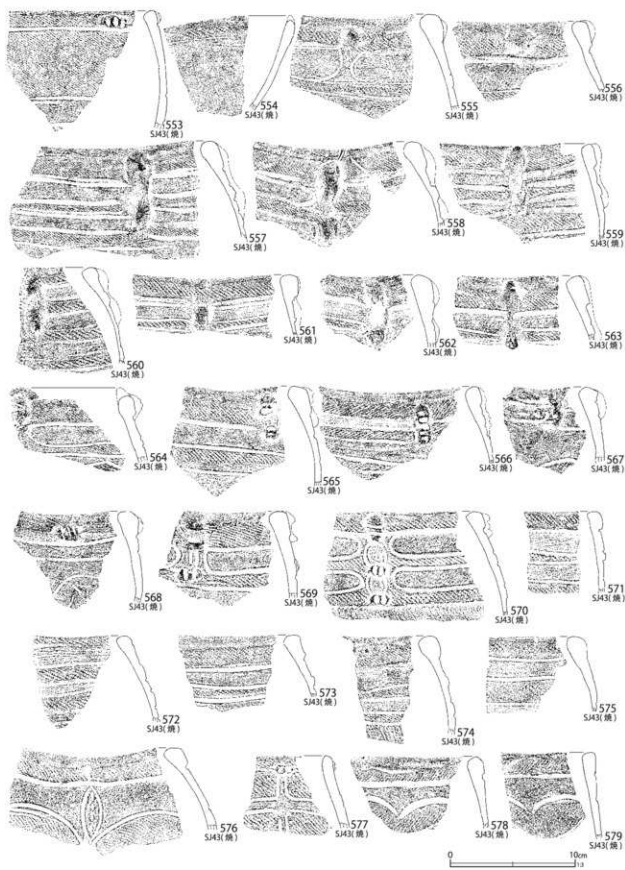
第264図 住居跡出土土器 (74)



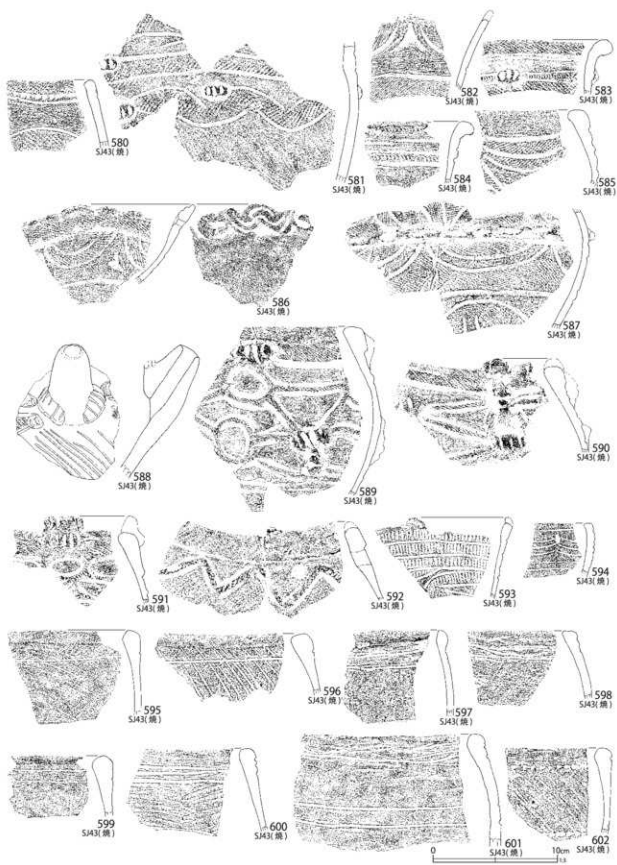
第265图 住居跡出土土器 (75)



第266图 住居跡出土土器 (76)



第267图 住居跡出土土器 (77)



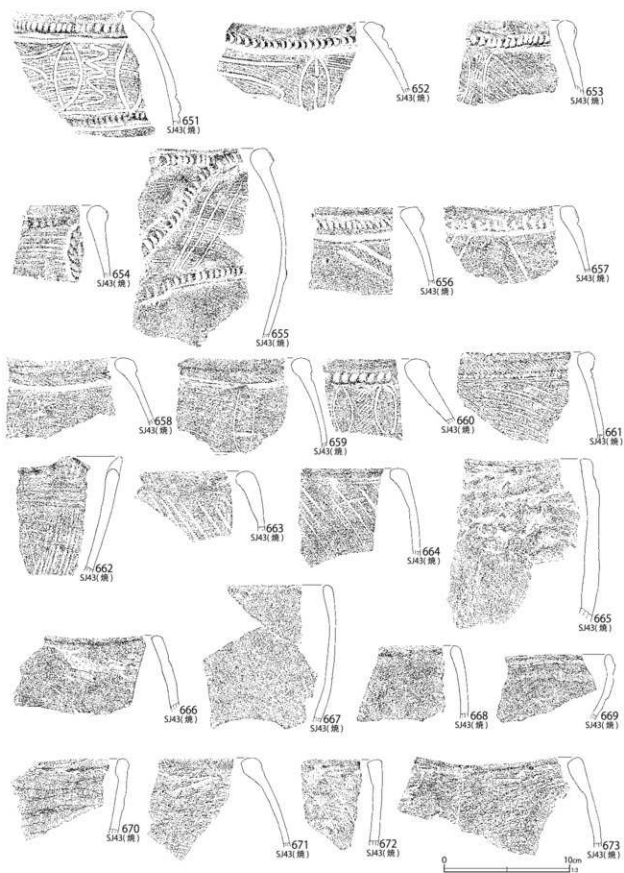
第268圖 住居跡出土土器 (78)



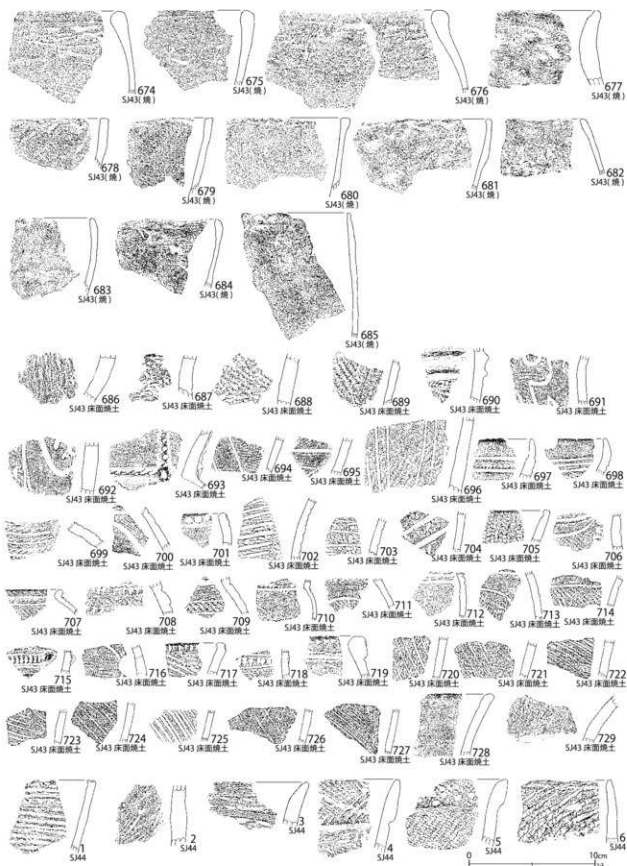
第269图 住居跡出土土器(79)



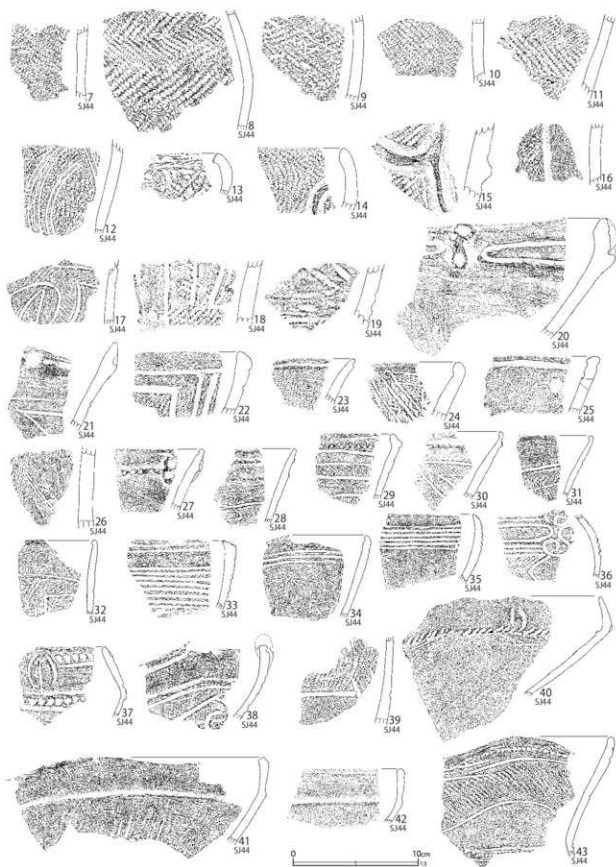
第270図 住居跡出土土器(80)



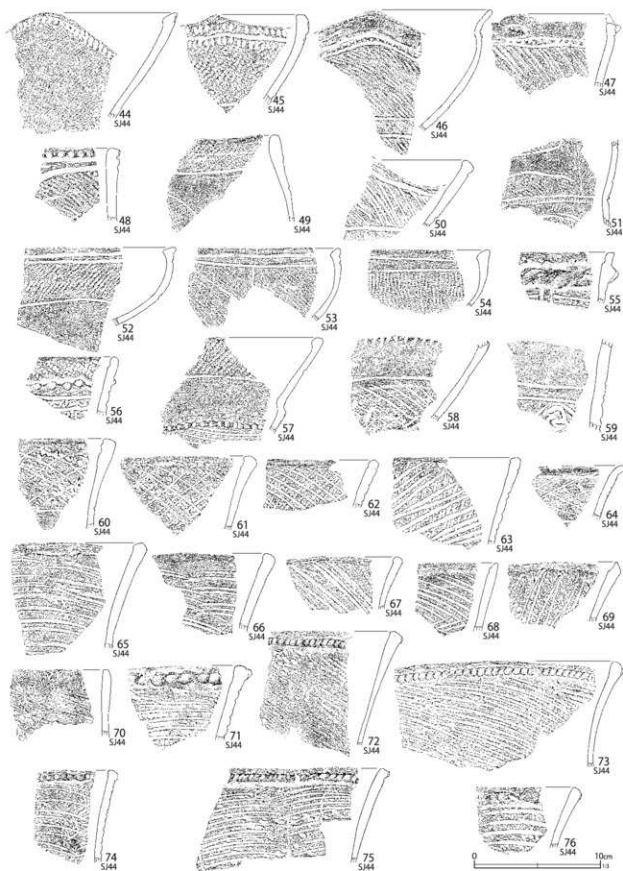
第271図 住居跡出土土器 (81)



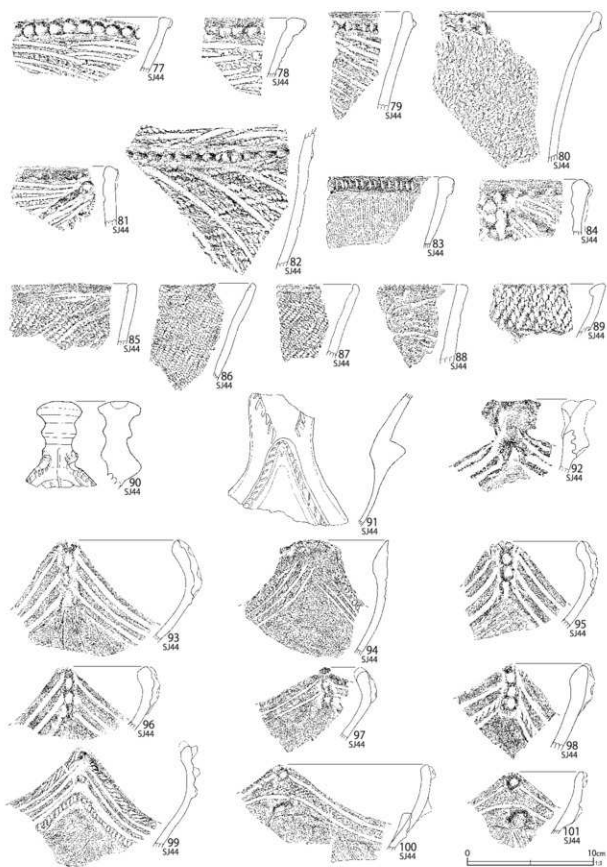
第272図 住居跡出土土器 (82)



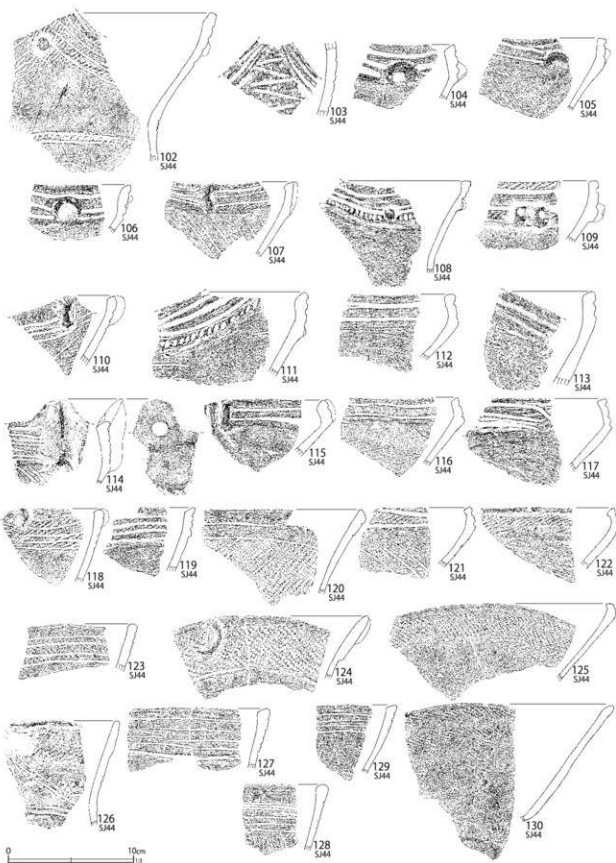
第273図 住居跡出土土器 (83)



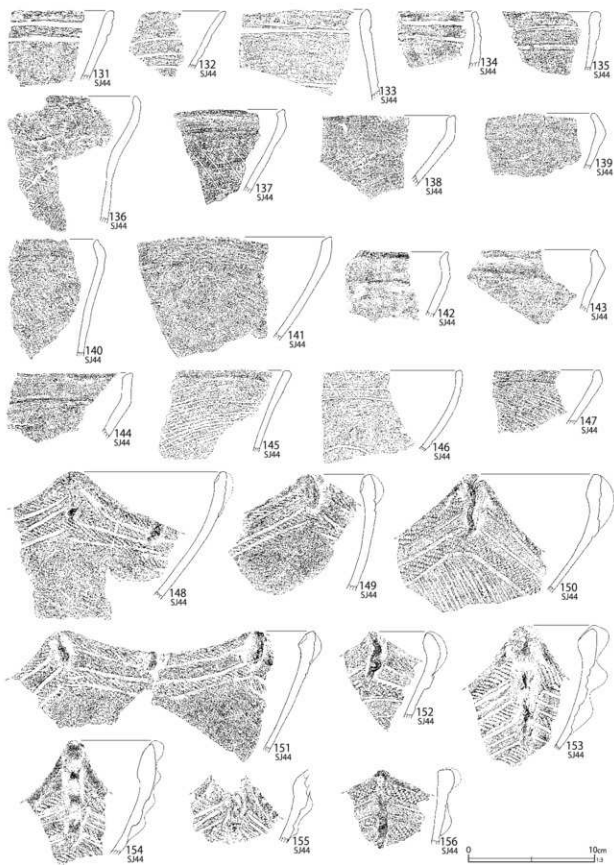
第274图 住居跡出土土器 (84)



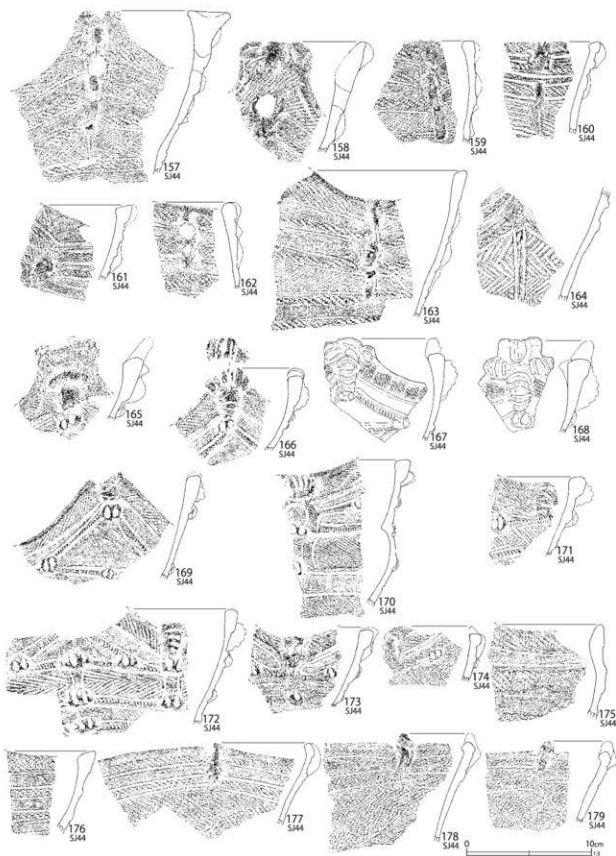
第275図 住居跡出土土器 (85)



第276図 住居跡出土土器 (86)



第277图 住居跡出土土器 (87)



第278図 住居跡出土土器 (88)



第279図 住居跡出土土器 (89)